漢郊祀歌十九章譯注

横山きのみ　奈良女子大學
西川ゆみ　奈良女子大學
谷口洋　奈良女子大學

本稿は、前漢の郊祀歌十九章（『漢書』二二禮樂志）の譯注である。郊祀歌十九章は、同じく『漢書』禮樂志に收められ、漢高祖の唐山夫人の作と傳える「安世房中歌」十七章と並び、前漢の歌謠群としてまとまった形で殘るものであり、『詩經』『楚辭』以降の歌謠史の空白を埋める貴重な資料である。他方、漢武帝による國家祭祀の整備という特別な狀況において制作されたものでもあり、武帝期という時代を考えるにあたっても貴重な情報を提供する。

郊祀歌十九章の邦譯は、小竹武夫『漢書』上（筑摩書房、一九七七）に含まれるほか、狩野直禎・西脇常記『漢書郊祀志』（平凡社東洋文庫、一九八七）に附錄として載せるものがあり、また第一章「練時日」は、澤口剛雄『樂府』（明德出版社中國古典新書、一九六九）にも收められる。いずれも譯文と簡單な語釋のみのものであるが、本稿の作成にあたってもこれらを隨時參照し、多大な裨益を受けたことはいうまでもない。

本稿ははじめ奈良女子大學大學院の演習において、横山・西川が分擔して作成したものである。擔當は以下の通りである。

横山：練時日（前半）・帝臨・朱明・玄冥・天地・天馬・景星・后皇・華爗爗・五神・象載瑜・赤蛟（後半）

西川：練時日（後半）・青陽・西顥・惟泰元・日出入・天門・齊房・朝隴首・赤蛟（前半）

ただし、各章とも、谷口を含めた意見交換を經て執筆されている。谷口はさらに部分的に補筆・修正し、最終的なとりまとめを行った。したがって、誤りや遺漏に關しては、

谷口が責任を負うべきものである。

底本は、中華書局版排印本を用い、必要に應じ武英殿本およびその考證、王先謙『漢書補注』に引く諸家の考證などを參考にした。

押韻については、羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』第一分冊（科學出版社、一九五八）所收の「兩漢詩文韻譜」に據った。

注釋においては、『漢書』顏師古注およびそこに引かれる諸家の注について、すべて原文を示し、ごく簡單なもの以外は書き下しを附した。その他、顏師古以降の諸家の說について、重要なものを紹介した。さらに、一つ一つの語について、その來歷を明らかにするよう努めたほか、漢賦や『淮南子』など近接する時期における使われ方にも注意した。この作業が、前漢における『詩經』『楚辭』の、あるいはひろく先秦文學の受容の一斑を示し得ていれば幸いである。

必要に應じ餘說の項を設け、注釋の枠に收まりきらない問題を取りあげた。餘說は、もとより演習における成果を反映したものであるが、もっぱら谷口が起草した。

なおカギ括弧の用法は、通常の習慣によるが、郊祀歌十九章の章名については、《　》で示して他と區別した。

本稿の作成を通じて得た知見の一端は、谷口「前漢『郊祀歌』十九章と『九歌』」（大野圭介編『「楚辭」と楚文化の總合的研究』、汲古書院、二〇一四掲載豫定）に述べたので、合わせ參照いただければ幸いである。本稿の作成期間には、科學研究費２１３２００６８（代表者：大野圭介）の援助を受けた。記して謝する。

《練時日》（第一）

練時日　侯有望　時日を練びて　侯に望有り
炳瑲蕭　延四方　瑲蕭を炳きて　四方を延かん
九重開　靈之斿　九重開けば　靈これ斿び
垂惠恩　鴻祜休　惠恩を垂れて　鴻祜や休し
靈之車　結玄雲　靈の車　玄雲に結ばれ
駕飛龍　羽旄紛　飛龍を駕して　羽旄は紛たり
靈之下　若風馬　靈の下ること　風馬のごとく

左倉龍　右白虎　　倉龍を左にし　白虎を右にす
靈之來　神哉沛　　靈の來ること　神なるかな沛たり
先以雨　般裔裔　　先んずるに雨を以てし　般くこと裔裔たり

靈之至　慶陰陰　　靈の至ること　慶陰陰たり
相放悲　震澹心　　相い放悲とし　心を震澹せしむ
靈已坐　五音飭　　靈已に坐して　五音飭う
虞至旦　承靈億　　虞は旦に至らん　靈を承けて億らかなり

牲繭栗　粢盛香　　繭栗を牲とし　粢盛香し
尊桂酒　賓八鄉　　桂酒を尊にし　八鄉を賓とす
靈安留　吟青黃　　靈安らかに留まり　青黃を吟ず
徧觀此　眺瑤堂　　徧く此れを觀て　瑤堂を眺む
衆嬉並　綽奇麗　　衆嬉並び　綽として奇麗
顏如荼　兆逐靡　　顏は荼の如し　兆逐いて靡く
被華文　廁霧縠　　華文を被り　霧縠を廁え
曳阿錫　佩珠玉　　阿錫を曳き　珠玉を佩ぶ
俠嘉夜　茝蘭芳　　嘉夜に俠して　茝蘭芳し
澹容與　獻嘉觴　　澹として容與　嘉觴を獻ぜん

練時日一

【押　韻】

望・方―陽部　斿・休―幽部　雲・紛―眞部　馬・虎―魚部
沛・裔―祭部　陰・心―侵部　飭・億―職部　香・鄉・黃・堂―陽部　麗・靡―歌部　縠・玉―屋部　芳・觴―陽部

三言の齊言體は、その後の郊祀歌においても時折用いられる。謝莊「宋明堂歌」（『宋書』二〇樂志二）第一首の迎神歌詩もこの形式であり、『宋書』の原注に、「依漢郊祀迎神、三言、四句一轉韻。（漢の郊祀の迎神に依り、三言、四句に一たび轉韻す。）」という。ただし、《練時日》には、陽韻が八句續く箇所がある。

なお師古注には「靡、合韻、音武義反。」という。去聲の「麗」と韻を踏むため、本來上聲である「靡」を去聲で讀むのである。ただ司馬相如「大人賦」でも「麗」と上聲の「倚」が押韻しており、むしろ「麗」のほうが本來上聲であったと考えられる。羅常培・周祖謨は、「麗」を歌部上聲とする。

【通　釋】

佳き日を選んで　ここに望祭を執り行う
脂と香草を燒いて　四方の神々をお招きしよう
九重の天の門が開けば　神靈がお出ましになり

恩惠をいきわたらせ　その大いなる福は素晴らしいものである
神靈の車は黒き雲に結びつけられており
飛龍をあやつり　きらびやかな羽旄旗がはためく
神靈の降臨するのは疾風や駿馬のように速く
左に青龍、右には白虎を従えている
神靈の來ることは靈妙にして速く
雨がその到來を報せ　廣く降りしきるのである
神靈が至れば　ああ　空はくろぐろとし
なんともおぼろげであり　心を動かすのだ
神靈はすでにお座りになって　祭りの音樂は調和する
祭りの樂しさは明け方まで續くだろう　神靈をお迎えして心が安らぐ
短い角の若い牛を生贄にして　器に盛ったキビはかぐわしい
桂の酒を樽に盛り　八方の神々をおもてなしする
神靈はやすらかにくつろいで　四時の歌が歌われる
周りを見渡して　玉で飾った堂を眺める
たくさんの巫女たちが居並び　そのさまはしなやかで美しい
巫女たちの顔はツバナのように白く　人々が巫女を追ってゆらゆらと動く
美しい柄の衣を着て　霧のように透ける薄絹をまとって
目の細かな布を曳いて　飾り玉を腰につけている
この素晴らしい夜に神靈にお仕えし　香草が芳しく香る
やすらかにゆったりと　美味しいお酒の入った杯を差し上げよう

【注　釋】

◎練時日　侯有望

「練」は、選ぶ。師古注に「練、選也。」祭祀歌の冒頭によき日を選ぶことをいうのは、『楚辭』九歌の第一章「東皇太一」が「吉日兮辰良」と始まるのと同趣旨。

「侯」は、『詩經』にもしばしば用いられる。毛傳・鄭箋とも常に「維」と訓じ、發語の辭として解しているが、ここでは王先謙補注が『爾雅』釋詁（先謙が釋訓というのは誤り）の「侯、乃也」を引くように、上を承けて次を導く語。

「望」は、祭の名。本來は、君主が高所から領土を望見して祀る國見の儀式であるが、春秋戰國期には、諸侯が柴を燒いて山川の神を祀ることをいった。「望」と、天子が天を祀る「郊」との結びつきについては、『左傳』宣公三年「春、不郊而望、皆非禮也。望、郊之屬也。不郊亦無望可也。（春、郊せずして望するは、皆禮に非ざるなり。望は、郊の屬なり。郊せざれば亦た望無くして可なり。）」などの記事にうかがえる。

◎炳膋蕭　延四方

「炳」は、燃やす。王先謙補注に「炳與爇同」、『廣雅』釋詁に「炳、爇也。」師古注に「炳（ヒヤウ）、音人說反。」

「膋」は、動物のはらわたの脂。李奇注に「膋、腸間脂也。」『說文解字』四下肉部に「膫、牛腸脂也。從肉寮聲。……膋、膫或從勞省聲。（膫、牛腸の脂なり。肉に從う寮の聲。……膋、膫或いは勞の省聲に從う。）」師古注に「膋（レウ）、音來彫反。」

「蕭」は、かおりよもぎ。李奇注に「蕭、香蒿也。」

「焫膋蕭」とは、よもぎと脂を燃やし、香りを天に立ち上らせること。師古注に「以蕭焫脂合馨香也。（蕭を以て脂を焫き、馨香を合わすなり。）」

この儀式については、『禮記』郊特牲に以下のような記述がある。

周人尙臭。……蕭合黍・稷、臭陽達於牆屋、故既奠、然後焫蕭合羶・薌。（周人は臭を尙ぶ。……蕭は黍・稷を合わせ、臭は陽に牆屋に達す。故に既に奠り、然る後に蕭を焫き羶・薌に合わす。）［鄭玄注：羶當爲馨、聲之誤也。（羶は當に馨と爲すべし、聲の誤りなり。）］

『詩經』大雅・生民にも、「載謀載惟、取蕭祭脂、取羝以軷。（載ち謀り載ち惟い、蕭を取りて脂を祭り、羝を取りて以て軷す。）」という描寫がある。

「四方」は、師古注に「四方、四方之神也。」

◎九重開　靈之斿

師古注に「天有九重、言皆開門而來降厥福。（天に九重有り、言うこころは皆門を開きて厥の福を來降す。）」という。

天が九重あるという觀念は、『楚辭』天問「圜則九重、孰營度之。（圜則は九重なりと、孰か之を營度す。）」、『淮南子』天文「天有九重、人亦有九竅。（天に九重有り、人も亦た九竅有り。）」などにみられる。

◎垂惠恩　鴻祜休

師古注に「鴻、大也。祜、福也。休、美也。祜音怙。」

◎靈之車　結玄雲

「靈」は、神靈。神と「玄雲」（黑い雲）との結びつきは、『楚辭』九歌・大司命に、「廣開兮天門、紛吾乘兮玄雲。（廣く天門を開き、紛として吾　玄雲に乘らん。）」とある。王逸以來諸注とも、「吾」は大司命を指すとする。

◎駕飛龍　羽旄紛

龍を駕し天をゆく形象は、『楚辭』『莊子』『淮南子』など楚系の文獻において、神・王・得道者など超越的存在を描くものとして頻出する。

・『楚辭』離騷「爲余駕飛龍兮、雜瑤象以爲車。（余の爲に飛龍を駕し、瑤象を雜え以て車と爲す。）」

・『莊子』逍遙遊「藐姑射之山、有神人居焉、……乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外。（藐姑射の山、神人の居する有り、……雲氣に乘り、飛龍を御し、四海の外に遊ぶ。）」

・『淮南子』覽冥「乘雷車、服駕應龍、驂青虬。（〔女媧〕雷車に乘り、應龍を服駕し、青虬を驂とす。）」

この形象は、『禮記』月令「天子居青陽左个、乘鸞路、駕倉龍。（天子は青陽の左个に居り、鸞路に乘り、倉龍を駕す。）」のように、地上の天子の美化表現ともなるが、「郊祀歌」の作者の一人ともされる司馬相如は、天子が龍を駕し天をゆく形象をしばしば用いている。なお以下相如の作品の引用は、特に斷らない限り、『史記』一一七司馬相如列傳による。

・「天子游獵賦（『文選』では「上林賦」。『史記』では「子虛賦」と「上林賦」を分けないが、以下の引用では『文選』での呼稱をも注記する。）」「於是乎背秋涉冬、天子校獵。乘鏤象、六玉虬、拖蜺旌、靡雲旗。（是に於てか秋に背き冬に涉り、天子は校獵す。鏤象に乘り、玉虬を六にし、蜺旌を拖き、雲旗を靡かす。）」

・「大人賦」「駕應龍象輿之蠖略逶麗兮、驂赤螭青虬之蟉蟉蜿蜒。（應龍象輿の蠖略逶麗たるを駕し、赤螭青虬の蟉蟉蜿蜒たるを驂とす。）」

「羽旄」は、きじのはねと旄牛（からうし）の尾でつくった飾り。また、それをつけた旗。『孟子』梁惠王下に「今王田獵於此、百姓聞王車馬之音、見羽旄之美。（今王　此に田獵するに、百姓王の車馬の音を聞き、羽旄の美を見る。）」というように、王侯の車の飾りとして使われた。

「紛」は、多いさま。師古注に「紛紛、言其多。」

◎靈之下　若風馬

「風馬のごとし」とは、速いさまをいう。師古注に「言速疾也。」

◎左倉龍　右白虎

蒼龍と白虎を護衛にすることをいう。師古注に「以爲衛。（以て衛と爲す。）」

類似の表現として、『禮記』曲禮上に王侯の行軍を述べ、「行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎。（行は、朱鳥を前にし玄武を後にし、青龍を左にし白虎を右にす。）」という。これは鄭玄注に「以此四獸爲軍陳、象天也。（此の四獸を以て軍陳と爲すは、天を象るなり。）」といい、天を模したものとされる。

他に『楚辭』九辯「左朱雀之茇茇兮、右蒼龍之躍躍。（朱雀の茇茇たるを左にし、蒼龍の躍躍たるを右にす。）」、惜誓「蒼龍蚴虬於左驂兮、白虎騁而爲右肆。（蒼龍　左驂に蚴虬し　白虎は騁せて右肆と爲る。）」という用例がある。

◎靈之來　神哉沛

「沛」は、師古注に「沛、疾貌、音補蓋反。」と釋するが、單に速いということではなく、『孟子』梁惠王上に「天油然作雲、沛然下雨。（天　油然として雲を作し、沛然として雨を下す。）」、盡心上に「若決江河沛然莫之能禦也。（江河を決して沛然とするが若く之を能く禦する莫し。）」というように、雨や流水の勢いをいう語である。

『楚辭』でも、九歌・湘君に「美要眇兮宜修、沛吾乘兮桂舟。（美にして要眇　宜しく修むべし、沛として吾　桂舟に乘る。）」、遠遊に「覽方外之荒忽兮、沛罔象而自浮。（方外の荒忽を覽じ、沛として罔象し自ら浮かぶ。）」などしばしば使われ、何らかの點で水との關わりを感じさせる。

武帝が元封二年（前一〇九）、瓠子（現河南省濮陽市附近）における黄河の決壞箇所を塞ぐ工事の際に作った「瓠子歌」（『史記』二九河渠書）には、「延道弛兮離常流、蛟龍騁兮方遠遊。歸舊川兮神哉沛、不封禪兮安知外。（延道弛みて常流を離れ、蛟龍

騁せて方に遠遊す。舊川に歸せば神なるかな沛たり、封禪せずんば安くんぞ外を知らん。)」といい、ここと同じ句を使っている。この《練時日》の場合も、王先謙補注に「瓠子歌」をふまえて「蓋流行意。」というように、勢いある雨が適切なときに降るさまをいうのであろう。

◎先以雨　般裔裔

「先以雨」は、師古注に、「先以雨、言神欲行、令雨先驅也。(先んずるに雨を以てす、言うこころは神　行かんと欲するに、雨をして先驅せしむるなり。)」、王先謙補注に、「乘雲駕龍、故先雨。(雲に乘り龍を駕す、故に雨を先にす。)」

「般裔裔」について、師古注には「般讀與班同。班、布也。裔裔、飛流之貌。」といい、雨が廣く盛んに降るさまとする。王先謙補注は、『史記』一一七司馬相如列傳に引く「天子游獵賦(子虛賦)」の「纚乎淫淫、班乎裔裔。」の句を、『漢書』五七上司馬相如傳では「纚乎淫淫、般乎裔裔。」に作ることを指摘し、師古注の「般は讀みて班と同じ。」という説を補強する。ただし、當該箇所の『史記』集解及び『漢書』注に引く郭璞が、「裔裔」について「羣行貌」すなわち隊列の集團で行くさまと注することを根據に、顏師古が雨のさまとみる點には疑問を呈するが、うがちすぎであろう。

◎靈之至　慶陰陰

「慶陰陰」は、師古注に、「言垂陰覆徧於下。(垂陰の覆うこと下に徧きを言う。)」といい、低く垂れた雲が廣く下界を覆うさまとする。ただ、「陰陰」の語自體は、二字で暗いさまを表す形容詞と見るべきだろう。王先謙補注には『說文解字』一四上阜部の「陰、闇也。」を引く。

「慶」については、王念孫『讀書雜志』四に「慶讀爲羌(キャウ)、發聲也。」という。「羌」は、『楚辭』特有の發語の助字で、「離騷」の「羌內恕己以量人兮、各興心而嫉妒。(羌(ああ)　內に己を恕して以て人を量り、各おの心を興して嫉妒す。)」のほか數例がある。王逸の章句には「羌、楚人語辭也。猶言卿何爲也。(羌、楚人の語辭なり。猶お卿の何爲れぞと言うがごとし。)」といい、それが人に問いかける、あるいはいぶかる語氣を含むことを指摘する。

「慶」がそのように使われた例としては、つとに洪邁『容齊隨筆』七に言及するように、揚雄「反離騷」(『漢書』八七上揚雄傳上)がある。たとえば、「遭季夏之凝霜兮、慶天顥而喪榮。(季夏の凝霜に遭い、慶(ああ)　天顥して榮を喪う。)」とあり、張晏注に「慶、辭也。」、師古注に「慶讀與羌同。」という。

今本の『楚辭』で「慶」をこのように用いた箇所はないが、「反離騷」は、屈原の「離騷」を下敷きにした作品であり、かつては『楚辭』に「慶」という表記が存した可能性がある。

◎相放悲　震澹心

「相」については、ここでは假に「相い放悲とし」と讀んだが、「相(すがた)は放悲とし」と讀むことも可能であろう。

「放悲」については、師古注に「放悲猶髣髴也。放音昉(ハウ)。悲音沸(フツ)。」双聲の語。表記はほかにも「彷彿」などさまざまあり、『楚

辭』にも九章・悲回風「存髣髴而不見兮、心踊躍其若湯。（存すること髣髴として見えず、心は踊躍して其れ湯のごとし。）」、九辯「顏淫溢而將罷兮、柯彷彿而萎黃。（顏は淫溢として將に罷れんとし、柯は彷彿として萎黃す。）」などの例がある。

「澹」は、師古注に「澹、動也。澹音大濫反。」この字はのちにもう一度現れ、異なる訓を與えられているが、そのことに關しては【餘說二】參照。

◎靈已坐　五音飭

「五音」は、中國の音階の宮・商・角・徵・羽の五つの音。轉じて音樂を指す。『楚辭』九歌・東皇太一に、神を迎える儀式の音樂を描いて、「五音紛兮繁會、君欣欣兮樂康。（五音紛として繁會し、君欣欣として樂康す。）」という。

「飭」は師古注に「飭讀與敕字同、謂整也。」とあり、整うの意。

◎虞至旦　承靈億

「虞」は師古注に「虞、樂也。」

「億」は師古注に「億、安也。」

◎牲薦栗　粢盛香

「薦栗」は角が生え始めたころの若い牛のこと。角が薦や栗の形に似ているところから言う。師古注に「薦栗、言角之小如薦及栗之形也。（薦栗は、角の小なること薦及び栗の形の如きを言うなり。）」『禮記』王制に「祭天地之牛、角薦栗。（天地を祭るの牛は、角　薦栗なり。）」、『國語』楚語下に「郊禘不過薦栗、烝嘗不過把握。（郊・禘は薦栗に過ぎず、烝・嘗は把握に過ぎず。）」という。

「粢盛」は器に盛ったキビのお供え物のこと。『春秋左氏傳』桓公六年「粢盛豐備」の杜預注に「黍稷曰粢、在器曰盛。」とある。

◎尊桂酒　賓八鄉

「尊」は、祭祀用の大型の酒器。晉灼注に、「尊、大尊也。」

「桂酒」は、桂を酒に浸したもの。應劭注に「桂酒、切桂置酒中也。（桂酒は、桂を切りて酒中に置くなり。）」とある。桂は『楚辭』にしばしば現れる香木で、「桂酒」も、『楚辭』九歌・東皇太一に「蕙肴蒸兮蘭藉、奠桂酒兮椒漿。（蕙肴を蒸め　蘭もて藉き、桂酒と椒漿とを奠む。）」の例がある。なお晉灼注には、「元帝時大宰丞李元記云、以水漬桂、爲大尊酒。（元帝の時　大宰の丞の李元の記に云えらく、水を以て桂を漬け、大尊酒を爲ると。）」というが、李元及びその「記」については未詳。

「八鄉」は、師古注に「八鄉、八方之神。」

◎靈安留　吟青黃

「吟青黃」は、服虔注では「吟音含。」とするが、師古注は「服說非也。吟謂歌誦也。青黃、謂四時之樂也。（服の說は非なり。吟は歌誦するを謂うなり。青黃は、四時の樂を謂うなり。）」といい、四季の歌を歌うこととする。「青黃」で四時を表す用例を他に見ないが、今は師古注による。

◎徧觀此　眺瑤堂

「瑤堂」は、玉で飾った堂。師古注に「以瑤飾堂。（瑤を以て堂を飾る。）瑤音遙。」『楚辭』離騷に「望瑤臺之偃蹇兮、見有娀之佚女。（瑤臺の偃蹇たるを望み、有娀の佚女を見る。）」という。

◎衆嫭並　綽奇麗

「嫭」は容貌にすぐれたさま、またその人。神に仕える巫女を形容していう。孟康注に「嫭音互。嫭、好也。」、如淳注に「嫭、美目貌。」、晉灼注に「嫭音坼罅之罅。」、師古注に「孟說是也。謂供神女樂、並好麗也。（孟說是なり。神に供うる女樂、並びに好麗なるを謂うなり。）」とある。

「綽」は『詩經』衞風・淇奥に「寬兮綽兮、倚重較兮。（寬たり綽たり、重較［貴族の乘る車］に倚る。）」、毛傳に「綽、緩也。」とあり、君子のゆったりしたさま。女性の姿態をいう例としては、『楚辭』大招に「滂心綽態、姣麗施只。（滂心綽態、姣麗にして施す。）」とあり、王逸注は「綽、猶多也。」という。王先謙補注はこれを引き、多くの美女が妍を競うさまとするようであるが、むしろこれもゆったりした、しなやかなさまとみてよかろう。宋玉「神女賦」（『文選』一九）は「宜高殿以廣意兮、翼放縱而綽寬。（宜しく高殿にて以て意を廣め、翼に放縱して綽寬たるべし。）」と、『詩經』同樣「寬」とともに用いる。

「奇麗」は先秦の諸書に見えず、郊祀歌とほぼ同時期の『淮南子』に、「耳聽滔朗奇麗激抮之音。（耳に滔朗奇麗激抮の音を聽く。）」（原道）、「不務於奇麗之容、隅眥之削。（奇麗の容、隅眥の削に務めず。）」（齊俗）と見える。

◎顏如荼　兆逐靡

「荼」はアシやチガヤの類の白い穗のこと、ツバナ。

「顏如荼」は、應劭注には「荼、野菅白華也。言此奇麗、白如荼也。（荼は、野菅の白き華なり。此の奇麗、白きこと荼の如くなるを言うなり。）」といい、巫女の顏の白いさまとする。師古注は「菅、茅也。言美女顏貌如茅荼之柔也。荼者、今俗所謂蒹錐也。（菅は、茅なり。言うこころは美女の顏貌　茅荼の柔かきが如きなり。荼なる者は、今俗に所謂蒹錐なり。）荼音塗。菅音姦。」とし、巫女の容貌がツバナの穗のように柔らかなさまと解する。

「如荼」という表現は『詩經』鄭風・出其東門に「出其闉闍、有女如荼。（其の闉闍を出ずれば、女有り荼の如し。）」とみえる。鄭箋には「荼、茅秀、物之輕者、飛行無常。（荼は、茅秀、物の輕き者なり、飛行すること常無し。）」とあり、洪亮吉はこれをふまえ、次の「兆逐靡」の句と關連づけようとする。しかし王先謙がいうように、ここは顏のことをいうのであるから、應劭注に從うべきであろう。女性の顏立ちを植物にたとえるのは、鄭風・有女同車にも「有女同車、顏如舜華。（女有り同車す、顏は舜華の如し。）」という例がある。

「兆逐靡」は、孟康注に「兆逐靡者、兆民逐觀而猗靡也。（「兆逐靡」なる者は、兆民　逐いて觀て猗靡するなり。）」とあり、人々が巫女たちを追って、なびくように動くさまと解しているようである。「兆民」の語は《玄冥》（第六）にみえるし、「兆」一字で「兆民」を意味する例も、《后皇》（第十四）に「兆被祉福。

（兆　祉福を被る。）」とあるが、《練時日》のこの箇所に「兆民」が現れることには疑問が殘る。小竹文夫『漢書』は、「兆」を「逃」とみて「逃げ逐い靡く」と譯し、澤口剛雄『樂府』は、「兆」は巫女を指すとみて「多數の美女がその妍を競うのである」と譯すが、ここではかりに孟康注によった。

◎被華文　廁霧縠

「廁」は師古注に「廁、雜也。」

「霧縠」は輕やかで目の細かな薄絹のこと。師古注に「霧縠、言其輕細若雲霧也。（霧縠は、其の輕細なること雲霧の若きなるを言うなり。）」とある。美人の服裝として賦に描かれる。

・宋玉「神女賦」「動霧縠以徐步兮、拂墀聲之珊珊。（霧縠を動かして以て徐步すれば、墀を拂いて聲は珊珊たり。）」

・司馬相如「天子游獵賦（子虛賦）」「於是鄭女曼姬、被阿錫、揄紵縞、襍纖羅、垂霧縠。（是に於いて鄭女曼姬、阿錫を被、紵縞を揄き、纖羅を襍え、霧縠を垂らす。）」

◎曳阿錫　佩珠玉

「阿錫」は如淳注に「阿、細繪。錫、細布也。」細い糸で細かく編んだ絹と麻。前條に引いた司馬相如「天子游獵賦」に、「霧縠」とともに見える。「錫」は、錢大昭『漢書辨疑』一二にいうように「緆」と通用。『說文』一三上糸部に「緆、細布也。」

「佩玉」は、『詩經』鄭風・有女同車に「將翺將翔、佩玉瓊琚。（將た翺し將た翔す、佩玉瓊琚たり。）」と見える。

「阿錫」「佩玉」をともに用いた例としては、『淮南子』脩務に「正蛾眉、設笄珥、衣阿錫、曳齊紈、粉白黛黑、佩玉環揄步、襍芝若、籠蒙目視。（蛾眉を正し、笄珥を設け、阿錫を衣、齊紈を曳き、粉白黛黑し、玉環を佩びて揄步し、芝若を襍え、籠蒙として目視す。）」とある。

以上四句は、諸子の文章や辭賦の文學で、宮廷の美女の形容として定型となっていた表現である。

◎俠嘉夜　茝蘭芳

「俠嘉夜」は、祭りを行う良い夜に、巫女たちが神靈にかしずくさまをいう。如淳注では「佳、俠、皆美人之稱。嘉夜、芳草也。」といい、美人と香草とするが、師古注では「俠與挾同、言懷挾芳草也（俠は挾と同じ、懷に芳草を挾むを言うなり。）」という。しかしここでは王先謙の說に從った。先謙は『漢書』四三叔孫通傳の「殿下郎中俠陛、陛數百人。（殿下に郎中　陛を俠み、陛ごとに數百人。）」を例證に、「俠」を「夾侍」（左右に付き添う）の意で解している。また「嘉夜」は、禮樂志に「昏祠至明。（昏に祠り明に至る。）」ということから、文字通り良き夜とする。

「茝」は師古注に「茝卽今白芷。」白芷はヨロイグサ。セリ科の香草。茝（芷）と蘭は、香草の代表としてしばしば並稱され、『荀子』宥坐に「且夫芷蘭生於深林、非以無人而不芳。（且つ夫れ芷蘭は深林に生ずるも、人無きを以て芳しからざるには非ず。）」とあるほか、『楚辭』にも多く見え、離騷に「蘭芷變而不芳兮、荃蕙化而爲茅。（蘭芷變じて芳しからず、荃蕙化して茅と爲る。）」という。「茝」に作る例は九歌・湘夫人「沅有茝兮醴有蘭、思公

子兮未敢言。（沅に茝ありて醴に蘭有り、公子を思いて未だ敢えて言わず。）」、大招「茝蘭桂樹、鬱彌路只。（茝蘭桂樹、鬱として路に彌る。）」などあるが、補注の校語には、いずれも「茝一作芷。」という。

「茝」の音について、師古注には「茝音昌改反。」ともいうが、芷と通用するのであれば、音はシ。ただし、『爾雅』釋草には「蘄茝、蘼蕪。」、釋文に「茝、昌改切。」といい、蘼蕪（センキュウ）という別の香草とする。一方『廣韻』では、上聲六止に「香草、字林云、蘼蕪別名、諸市切。」、上聲一五海に「香草也、昌紿切。」といい、シを蘼蕪とするなど、音義とも揺れがある。

◎澹容與　獻嘉觴

「澹」は師古注に「澹、安也。澹音大濫反。」

「容與」は師古注に「容與、言閑舒也。」双聲の語。ゆったりと揺れ動くさま。『楚辭』に用例が多い。九歌・湘君「岢不可兮再得、聊逍遙兮容與。（岢は再び得べからず、聊か逍遙して容與せん。）」や九歌・湘夫人「時不可兮驟得、聊逍遙兮容與。（時は驟得べからず、聊か逍遙して容與せん。）」では、「逍遙」とともに用いられている。また九歌・禮魂「成禮兮會鼓、傳芭兮代舞、姱女倡兮容與。（禮を成して鼓を會し、芭を傳えて代るがわる舞い、姱女倡いて容與たり。）」では巫女の遊戯する様子、九章・涉江「船容與而不進兮、淹回水而疑滯。（船は容與として進まず、回水に淹まりて疑滯す。）」では船のたゆたうさまの描寫に用いられている。

漢郊祀歌十九章譯注（横山・西川・谷口）

「澹容與」の例は『楚辭』九辯に「悼余生之不時兮、逢此世之俇攘。澹容與而獨倚兮、蟋蟀鳴此西堂。（余が生の時ならざるを悼み、此の世の俇攘に逢う。澹として容與として獨り倚れば、蟋蟀此の西堂に鳴く。）」とあり、この世の騒がしさを避け、一人立ちつもとおりつするさまを表す。

【餘説一】『楚辭』との關連について

迎神の歌であり、楚の祭祀歌に基づく「九歌」をはじめ、『楚辭』との關連が強い。全篇三言の齊言體であるが、同様に三言齊言の《天馬》（第十）が、『史記』二四樂書の引用では、奇數句末に「兮」字を伴う「〇〇〇兮〇〇〇」の形であることは、「九歌」との關連をいっそう意識させる（「〇〇〇兮〇〇〇」の形は、「山鬼」「國殤」をはじめ、「九歌」にしばしばみられる）。

『楚辭』にみられる、雲や龍に乘る神あるいは超越者の形象や、宋玉賦における神女の描寫は、司馬相如らの漢賦においては、現世における天子の出陣や、狩獵の後の女樂の描寫に作りかえられてゆくが、ここではそれらが神と巫女の描寫として用いられている。

【餘説二】「澹容與」が表す揺らぎの感覺

「澹」は、前半の「相放悊　震澹心」では「動也」、結句の「澹容與　獻嘉觴」では「安也」と、一見正反對の訓を與えられていたが、同様の例は、宋玉「高唐賦」（『文選』一九）にもみら

れる。すなわち、高唐臺を遠くから望見する前半では「水澹澹而盤紆兮、洪波淫淫之溶漪。（水澹澹として盤紆たり、洪波淫淫として溶漪たり。）」と、逆巻く激流を形容していた「澹」（李善注に『說文』を引いて「澹澹、水搖也。」『說文解字』一一上水部の原文は「澹」字を重ねない。）が、高唐臺の内側の描寫においては「徙靡澹淡、隨波閒藹。（徙靡として澹淡、波に隨いて閒藹たり。）」と、穏やかなさざ波を表している（李善注に「澹淡、水波小文也。」）。さらに、「神女賦」においては、神女のしとやかなさまを指して「澹清靜其愔嫕兮、性沈詳而不煩。（澹　清靜として其れ愔嫕たり、性は沈詳にして煩しからず。）」という。

このような「澹」の二面性は、『楚辭』九歌にいくつか現れる「憺」と關連するのであろう。

・雲中君「蹇將憺兮壽宮、與日月兮齊光。（蹇　將に壽宮に憺んぜんとして、日月と光を齊しくす。）」

・東君「羌聲色兮娛人、觀者憺兮忘歸。（羌　聲色の人を娛しましむる、觀る者憺として歸るを忘る。）」

・山鬼「杳冥冥兮羌晝晦、東風飄兮神靈雨。留靈脩兮憺忘歸、歲既晏兮孰華予。（杳冥冥として　羌　晝も晦く、東風　飄として　神靈　雨ふらす。靈脩を留めて憺として歸るを忘れしめん、歲既に晏ければ孰か予を華さかせん。）」

これらはいずれも「靈」なるものとの關連で現れている。「雲中君」では「靈」が神殿に安らぐさま、「東君」は「靈」を見る者が忘我に至るさまを表し、「山鬼」では「靈脩」を引き留め歸るのを忘れさせたいという。「憺」は『說文』には「安也」と訓じられるが、本來は神靈と一體化する恍惚感を表す語であったと考えられる。「澹」も同様に、神靈との合一に支えられた幸福感をその基盤とし、靈的なるものを前にした高ぶりと、合一が實現したのちの安らぎとをともに表すのである。

「澹」が、スタティックな安定ではなく、靈的なものにふれる魂の搖らぎを伴うことは、「容與」と組み合わされていることからも確かめられる。「容與」はゆったりしたさまを表す語であるが、じっとしているのではなく、先に擧げた例にも見るように、ゆらゆらと搖れるような感覺を伴っている。「容與」にも、靈的なものの懷に抱かれて搖らぐ幸福感が引き繼がれているようだ。道家系の文獻で、『莊子』人間世「以求容與其心。（以て其の心を容與せんことを求む。）」、『淮南子』精神「抱其太清之本而無所容與。（其の太清の本を抱きて容與する所無し。）」のように、情欲をほしいままにするという意味で使われるのも、その感覺から派生したものであろう。

なお、「澹」の意味とその展開については、谷口洋「深山の恍惚――漢魏六朝文學における「淡」「澹」をめぐって――」（『奈良女子大學文學部研究年報』四六、二〇〇二）を參照されたい。

《帝臨》（第二）

帝臨中壇　　帝は中壇に臨みて

四方承宇　四方は宇に承く
繩繩意變　繩繩として意は變じ
備得其所　備(ことごと)く其の所を得(う)
清和六合　清和たる六合
制數以五　數を制するに五を以てす
海内安寧　海内は安寧たり
興文匽武　文を興して武を匽(や)めん
后土富媼　后土は富媼なり
昭明三光　三光を昭明す
穆穆優游　穆穆優游として
嘉服上黄　嘉服は黄を上とす
帝臨二

【押　韻】
宇・所・五・武―魚部　光・黄―陽部

【通　釋】
天帝は中央の祭壇に降臨し
四方の神は（祭壇の）軒にくだってくる
謹みて心あらため
ことごとく然るべき場に祀る
清くのどかなる天地四方
この世を司る數は五と定める
天下は安らか
文を興して戰をやめよう
后土とは豊穣をもたらす大地の母神である
日月星辰を輝かす
なごやかに　ゆるやかに
正装の色には黄をたっとぶのだ

【注　釋】
◎帝臨中壇　四方承宇
「壇」は、祭壇。師古注に「壇字或作禮、讀亦曰壇。字加示者、神靈之耳。下言紫壇・嘉壇、其義並同。（壇の字　或いは禮に作り、讀みて亦た壇と曰う。字の「示」を加うる者は、之を神靈にするのみ。下に「紫壇」「嘉壇」と言える、其の義並びに同じ。）」という。「下言紫壇・嘉壇」とは、郊祀歌《天地》（第八）の「爰熙紫壇」、《后皇》（第十四）の「后皇嘉壇」、《五神》（第十六）の「抗嘉壇」をさす。
二句の全體は、師古注によれば「言天神尊者來降中壇、四方之神各承四宇也。（言うこころは天神の尊き者　中壇に來降し、四方の神　各(おのおの)四宇に承くなり。）」といい、神々が降臨する様子と

解釋している。ここではこの師古注に従う。《華燁燁》（第十五）にも、「神之揄、臨壇宇。（神の揄（まね）かる、壇宇に臨む。）」という類似の表現がみえる。

宋の劉攽の『刊誤』（『漢書』明國子監本・清武英殿本〔官本〕に引く）は、この「帝」を天子を指すと解釋している。劉攽は以降の句についても、「制數以五」は武帝が服色を改め黄を上とし、數は五を用いるとしたこと、「后土富媼」はが漢が土德であることなど、一つ一つの句を武帝によって定められた祭祀儀禮と結びつけて注釋する。しかし王念孫『讀書雜志』四にいうように無理があろう。

吳仁傑『兩漢刊誤補遺』は、この後に《青陽》・《朱明》・《西顥》・《玄冥》の四季と四方を祀る四章が續くことから、この章にいう「帝」は顔師古がいうような天帝ではなく、『禮記』月令に「中央土」というところの「下方之帝」とする。しかし月令でも、たとえば中央について「其帝黄帝、其神后土。」というように、天帝と地神をセットで祀っており、「帝」はやはり天帝を指すとすべきだろう。《帝臨》は、前半で中央の天帝を、後半でそれと對應する后土神をたたえる歌と考えられる。

「承宇」は『楚辭』にも見え、九章・涉江「霰雪紛其無垠兮、雲霏霏而承宇。（霰雪は紛として其れ垠り無し、雲は霏霏として宇に承く。）」、哀時命「霧露濛濛其晨降兮、雲依斐而承宇。（霧露は濛濛として其れ晨に降り、雲は依斐として宇に承く。）」など、雲が軒先低くまで垂れ込める様子を表す。ここでは、神々が祭壇の軒先まで降りてくる様子と解釋した。

◎繩繩意變　備得其所

「繩繩」は戒めるさま、慎むさまを言う。應劭注に「繩繩、謹敬更正意也。」孟康注には「衆多也。」とあるが、以下にみる『詩經』毛傳とも合わない。臣瓚は「爾雅曰、繩繩、戒也。」〔釋訓の語。今本は「憴憴」に作る。〕といい、師古注も「瓚說是也。」と、これを支持している。

「繩繩」は『詩經』に見られる語であり、周南・螽斯の「螽斯羽、薨薨兮。宜爾子孫、繩繩兮。（螽斯の羽、薨薨たり。宜（むべ）なり爾の子孫、繩繩たり。）」（毛傳：「薨薨、衆多也。繩繩、戒愼也。」）、大雅・抑の「子孫繩繩、萬民靡不承。（子孫は繩繩たり、萬民の承けざる靡し。）」（鄭箋：「繩繩、戒也。」）がある。

◎清和六合　制數以五

「六合」は天地と四方（東西南北）のこと。『楚辭』哀時命に「衣攝葉以儲與兮、左袪挂於榑桑。右衽拂於不周兮、六合不足以肆行。（衣は攝葉して以て儲與し、左袪は榑桑に挂かる。右衽は不周を拂い、六合以て肆行するに足らず。）」との用例があり、王逸注に「六合謂天地四方也。」という。

「六合」は、先秦の文獻のうちでは『莊子』によく見られ、齊物論「六合之外、聖人存而不論。六合之內、聖人論而不議。（六合の外、聖人は存して論ぜず。六合の內、聖人は論じて議せず。）」、在宥「出入六合、遊乎九州。（六合に出入し、九州に遊ぶ。）」などの例がある。諸子以外では、『史記』六秦始皇本紀に引く刻石

の文に二箇所用いられるのがやや目を引く。始皇二十八年琅邪刻石に「六合之内、皇帝之土。」、同三十七年會稽刻石に「六合之中、被澤無疆。（六合の中、澤を被ること疆無し。）」とある。漢代においては、「天下」と同様の意味で普通にみられる語となる。

ところで「六」という數であるが、郊祀歌においては他にも頻繁に用いられ、特別な意味をもたされている。

・《日出入》（第九）「吾知所樂、獨樂六龍。六龍之調、使我心若。（吾　樂しむ所を知る、獨り六龍を樂しむ。六龍の調べ、我が心をして若がわしむ。）」

・《天門》（第十一）「紛云六幕浮大海。（紛云たる六幕　大海に浮かばん。）」

・《赤蛟》（第十九）「百君禮、六龍位。（百君禮せられ、六龍位す。）」

・同「杳冥冥、塞六合、澤汪濊、輯萬國。（杳として冥冥として、六合を塞ぎ、澤は汪濊として、萬國を輯む。）」

「制數以五」は、この歌が后土神を祀ることに對應する。張晏注に「此后土之歌也。土數五。」王念孫も『禮記』月令「其神后土、其數五。」を引き、張晏注を支持する。

「六―五」という組み合わせでの用例は、郊祀歌において次のものがある。

・《景星》（第十二）「五音六律、依韋饗昭。（五音六律、依韋として饗昭らかなり。）」

・《象載瑜》（第十八）「赤鴈集、六紛員、殊翁雜、五采文。（赤鴈　集うこと、六にして紛員たり、殊なる翁　雜りて、五采の文あり。）」

郊祀歌以外での、次のような例と考え合わせると、「六―五」という組み合わせは、天地・宇宙の全體を象徴するものであったと言えよう。

・『國語』周語下「天六地五、數之常也。」

・『楚辭』九章・惜誦「令五帝以枉中兮、戒六神與嚮服。（五帝に令して以て枉中せしめ、六神を戒め與に嚮服す。）」

・『莊子』天運「天有六極五常、帝王順之則治、逆之則凶。（天に六極五常有り、帝王　之に順えば則ち治まり、之に逆らえば則ち凶なり。）」

◎海内安寧　興文匽武

「匽」は、やめるの意。師古注に「匽、古偃字。」『尚書』周書・武成に「乃偃武修文、歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服。（乃ち武を偃めて文を修め、馬を華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放ち、天下に服せざるを示す。）」という例がある。ただし「武成」は僞古文の篇であり、『禮記』樂記に似た文があるが、「偃武修文」という語は見えない。類似表現としては、『史記』五五留侯世家に「今陛下能偃武行文、不復用兵乎。（今陛下能く武を偃め文を行い、復た兵を用いざるか。）」という例がある。

◎后土富媼　昭明三光

「后土」は中央を司る地神であり、先述の『禮記』をはじめ頻出する名である。

「媼」の字について、張晏注には「媼、老母稱也。坤爲母、故稱媼。海內安定、富媼之功耳。（媼、老母の稱なり。坤は母たり、故に媼と稱す。海內安定するは、富媼の功なるのみ。）」といい、后土を母にたとえたものとしている。一方吳仁傑は、「媼」が「熅」の誤りで、「熅」は「烟熅」すなわち「天地合氣」の意であるといい、沈欽韓『漢書疏證』も「媼」は「熅」の誤りとしているが、ここでは取らない。なお、《惟泰元》（第七）にも「惟泰元尊、媼神蕃釐。（惟れ泰元は尊く、神を媼せば釐蕃し。）」という句があるが、そこでは「媼」を「熅」として解した。當該の項參照。

「昭明」は、あきらか。『詩經』大雅・既醉に「既醉以酒、爾殽既將。君子萬年、介爾昭明。（既に醉うに酒を以てし、爾の殽既に將く。君子は萬年たり、爾を介けて昭明たり。）」という用例がある。

◎穆穆優游　嘉服上黃

「穆穆」は『詩經』に頻出し、特に大雅・文王「穆穆文王、於緝熙敬止。（穆穆たる文王、於緝熙にして敬しむ。）」、周頌・雝「相維辟公、天子穆穆。（相くるは維れ辟公、天子は穆穆たり。）」など、雅・頌で見られる語である。

「優游」は、ゆったりしているさま。『詩經』小雅・白駒に「愼爾優游、勉爾遁思。（爾の優游を愼み、爾の遁思を勉む。）」、大雅・卷阿に「伴奐爾游矣、優游爾休矣。（伴奐として爾游ぶ、優游として爾休む。）」という用例がある。『楚辭』九章・惜往日にも「封介山而爲之禁兮、報大德之優游。（介山を封じて之が爲に禁じ、大德の優游たるに報ゆ。）」という句が見られる。

「嘉服上黃」は、孟康注に「土色上黃也。（土の色は黃を上とす。）」王先謙は「此祀中央黃帝歌。（此れ中央黃帝を祀る歌なり。）」と注釋する。黃、中央は五行の土に配當される。

王念孫は、后土を祀るのに黃を尊んだことが郊祀志にもみえることを指摘する。郊祀志の記述は、『史記』封禪書に基づいたものであるので、該當箇所を『史記』によって掲げる。

・有司與太史公・祠官寬舒議、……后土宜於澤中圜丘爲五壇、壇一黃犢太牢具。已祠盡瘞、而從祠衣上黃。（有司と太史公・祠官寬舒と議し、……后土は宜しく澤中の圜丘に於いて五壇を爲し、壇ごとに一の黃犢太牢を具すべし。已に祠りて盡く瘞む。祠に從うに衣は黃を上とす。）

・丙辰、禪泰山下阯東北肅然山、如祭后土禮。天子皆親拜見、衣上黃而盡用樂焉。（丙辰、泰山の下阯　東北の肅然山に禪す、后土の禮を祭るが如くす。天子皆親ら拜見し、衣は黃を上とし而して盡く樂を用う。）

【餘說】郊祀志（『史記』封禪書）との祭祀體系の相違について

王念孫は、元鼎五年（前一一二）に泰一を祀った際の郊祀志の記述に依據し、「具太一祠壇。（太一の祠壇を具う。）」「五帝壇環居其下。（五帝の壇は其の下に環居す。）」とあるのがこの歌の「帝臨中壇」に、「其下四方地、爲醊。（其の下四方の地、醊を爲

す。)」というのがこの歌の「四方承宇」にあたるとする。ただし郊祀志上（及びそのもととなった『史記』封禪書）の記述では、泰一（太一）の祭壇の周りにそれとは別に五帝の祭壇がおかれ、さらにその外の四方に群神を祀るという三重の構造になっており、この歌が帝と四方との二重構造であるのと齟齬がある。郊祀志・封禪書の記述は、むしろ《五神》（第十六）により適合するようであり、そこには武帝期の祭祀の變化が反映している。《五神》の【餘説】參照。

《青陽》（第三）

青陽開動　青陽開動し
根荄以遂　根荄以て遂ぐ
膏潤并愛　膏潤并せ愛しみ
跂行畢逮　跂行に畢く逮ぶ
霆聲發榮　霆聲　榮を發き
壾處頃聽　壾處に頃聽す
枯槀復產　枯槀復た產まれ
乃成厥命　乃ち厥の命を成す
衆庶熙熙　衆庶熙熙として
施及夭胎　施(ひ)きて夭胎に及ぶ
羣生嘕嘕　羣生嘕嘕として
惟春之祺　惟れ春の祺なり

青陽三　鄒子樂

【押　韻】

遂・逮―脂部　聽・命―耕部　胎・祺―之部

【通　釋】

春が萌え始め
草の根が生長する
豐かな潤いが萬物を廣くいつくしみ
生けるもの全てに恩惠が行き渡る
雷の音に花はつぼみを開き
穴の中で虫たちは耳を澄ます
枯れ草も再び芽吹き
新しい命を授かる
人々は皆樂しく過ごし
こどもや胎兒にも恩惠が及ぶ
人々は滿ち足りて
これこそ春の幸い

【注　釋】

◎青陽開動　根荄以遂

「青陽」は春のこと。青は五行説で春の色。臣瓚注に「春爲青陽。（春を青陽と爲す。）」『爾雅』釋天の文。「青陽」の語は『禮記』月令、『呂氏春秋』十二紀など時令の孟春の條に「天子居青陽左个。（天子は青陽の左个に居る。）」と見える。『國語』晉語四には、黄帝の子の一人として「青陽」の名が見えるが、先秦には他の用例を見ない。

やや近い語として、『楚辭』には、「青春」「陽春」「開春」の例がある。

・大招「青春受歌［王逸注「去也。」］、白日昭只。（青春歌るを受け　白日昭る。）」

・九辯「無衣裘以御冬兮、恐溘死不得見乎陽春。（衣裘の以て冬を御す無し、恐らくは溘死して陽春を見るを得ざらんことを。）」

・九章・思美人「開春發歲兮、白日出之悠悠。（開春發歲、白日出でて悠悠たり。）」

「荄」は師古注に「草根曰荄。荄音該。」

「遂」は成長する意。師古注に「遂者、言皆生出也。（遂は、皆生い出づを言うなり。）」『禮記』月令・孟春の條に「是月也、天氣下降、地氣上騰、天地和同、草木萌動。（是の月や、天氣下降し、地氣上騰し、天地和同し、草木萌動す。）」とある。

◎膏潤并愛　跂行畢逮

「膏潤」は、『詩經』小雅・黍苗の小序に、「不能膏潤天下。（天下を膏潤する能わず。）」と動詞で使った例がある。名詞としては、「膏露」「膏雨」などの類語がある。『禮記』禮運に、「天降膏露、地出醴泉。（天　膏露を降し、地　醴泉を出す。）」

「并」はすべて、ひろく。師古注に「并、兼也。」

「跂行」は足で歩行する動物一般。孟康注に「跂音岐。」師古注に「凡有足而行者、稱跂行也。（凡そ足有りて行く者は、跂行と稱すなり。）」『新語』道基に「跂行喘息、蜎飛蠕動之類、水生陸行、根著葉長之屬。」、『史記』一一〇匈奴列傳に「跂行喙息蠕動之類、莫不就安利而辟危殆。（跂行喙息蠕動の類、安利に就きて危殆を辟けざる莫し。）」

「逮」は師古注に「逮、及也。」

◎霆聲發榮　壧處頃聽

「壧」は晉灼注に「壧、穴也。謂蟄蟲驚聽也。（壧は、穴なり。蟄蟲驚き聽くを謂うなり。）」とあり、穴の意味としている。一方、師古注は「壧與巖同。言靁霆始發、草木舒榮、則蟄蟲處巖崖者、莫不頃聽而起。（壧は巖と同じ。言うこころは、靁霆始めて發し、草木舒榮すれば、則ち蟄蟲の巖崖に處る者、頃聽して起きざるは莫しと。）」といい、「壧」は崖のことであるとする。しかし王念孫もいうように、「巖穴」はしばしば熟語として用いられ、生物は山の崖に冬眠するとも限らない。ここでは穴の意味で譯した。

また、雷が鳴ると虫が動き出すという記述は、『禮記』月令の仲春に「是月也、日夜分、雷乃發聲、始電、蟄蟲咸動、啟戸始出。

（是の月や、日夜分にして、雷乃ち聲を發し、始めて電し、蟄蟲咸な動き、戸を啟きて始めて出づ。）」、『莊子』天運に「蟄蟲始作、吾驚之以雷霆。（蟄蟲始めて作り、吾之を驚かすに雷霆を以てす。）」とある。

「頃聽」は、傾聽に同じ。師古注に、「頃讀曰傾。」

◎枯臺復產　乃成厥命

「枯臺」は枯れた草木。師古注に「枯臺、謂草木經冬零落者也。（枯臺は、草木冬を經て零落する者を謂うなり。）臺、音口老反。」

◎衆庶熙熙　施及夭胎

「熙熙」は、和やかなさま、喜ぶさま。師古注に「熙熙、和樂貌也。」『春秋左氏傳』襄公二十九年に、吳の季札が『詩經』大雅を評して、「廣哉熙熙乎、曲而有直體、其文王之德乎。（廣きかな熙熙乎たるかな、曲にして直體有り、其れ文王の德なるか。）」という。また『老子』二〇に「衆人熙熙、若享太牢、若春登臺。（衆人熙熙として、太牢を享くるがごとし、春に臺に登るがごとし。）」、『史記』一二九貨殖列傳に「天下熙熙、皆爲利來。（天下熙熙として、皆な利の爲に來たる。）」とある。

「施」は師古注に「施、延也。」「施音弋豉反。」とあり、廣がる、ゆきわたるの意味。音はシではなくイ。

「夭胎」は子どもと胎兒。師古注に「少長曰夭、在孕曰胎。夭音烏老反。」

「胎夭」は『禮記』月令・孟春に「毋殺孩蟲胎夭飛鳥。（孩蟲胎夭飛鳥を殺す毋かれ。）」と言う。春は命の生まれる季節という觀念が背景にあるのだろう。

◎羣生嘿嘿　惟春之祺

「嘿嘿」は、服虔注に「嘿音湛湛露斯。」「湛湛露斯」は、『詩經』小雅・湛露の句。釋文に、「湛音直減反。」師古注に「嘿嘿、豐厚之貌也、音徒感反。」滿ち足りたさま、と解釋した。

「祺」は如淳注に「祺、福也。」、師古注に「祺音其。」『詩經』大雅・行葦に「壽考維祺、以介景福。（壽考は維れ祺なり、以て景福を介く。）」とある。

◎鄒子樂

郊祀歌十九章のうち、この歌以下の四章には、「鄒子樂」という注記がつけられている。「鄒子」の指すところについては、前漢景帝から武帝にかけての時期に活躍した鄒陽とする説もあるが、増田清秀氏はそれを否定し、これら四章が四季を歌うものであることから、戰國時代の齊で自然論・宇宙論を說いた鄒衍と結びつけられたものであろうと推測している。なお「鄒子樂」四章に「帝臨」を加えた五章は、後漢になって郊祀歌が全體としては廢れる中でも、中央と四方の五帝を祀る歌として重視され、引き續き用いられた。増田『樂府の歷史的研究』（創文社東洋學叢書、一九七五）參照。

《朱明》（第四）

朱明盛長　朱明は盛長し

旁與萬物	萬物を旁與す
桐生茂豫	桐生は茂豫たり
靡有所詘	詘くる所有る靡し
敷華就實	華を敷き實を就して
既阜既昌	既に阜いなり既に昌んなり
登成甫田	甫田に登成し
百鬼迪嘗	百鬼に迪め嘗す
廣大建祀	廣大に建祀し
肅雍不忘	肅雍して忘れず
神若宥之	神は若しとして之を宥け
傳世無疆	世に傳うること疆無し

朱明四　鄒子樂

【押　韻】

物・詘―質部　昌・嘗・忘・疆―陽部

【通　釋】

夏は成長の季節

萬物を伸び廣がらせる

幼き生命が輝かんばかりに榮え

屈するところがない

華は咲き亂れ　果實を成して

みな大きく　みな盛んである

大いなる田に實り

百神に進め供える

廣く大きく祀りして

謹み調和しおろそかなところがない

神はそれにこたえて惠みをあたえ

いつの世までも續いて果てしない

【注　釋】

◎朱明盛長　旁與萬物

朱は夏の色。臣瓚注に「夏爲朱明。（夏を朱明と爲す。）」『爾雅』釋天の文。春を祀る《青陽》に續いて、夏を祀る歌である。

「旁與」という語に關しては解釋が割れている。顏師古は「旁、古敷字也。旁與、言開舒也。（旁與は、開舒を言うなり。）與、音弋於反。」とし、「與」を平聲で讀んで、伸びやかなさまを表す疊韻の一語とみている（「敷」は中古音虞韻、「與」は魚韻でかなり近く、漢代では同部とみなされる）。一方王先謙は師古の說を否定し、「與」は「字の如し」、すなわち上聲の動詞として讀んで「施」の意とし、また『尙書』皐陶謨の「翕受敷施」が『史記』二夏本紀では「翕受普施」となっている例を擧げて、「敷」を

「普」と同義としている。つまり「甹與」は「普施」であり、一句は陽の氣が盛んになってあまねく萬物に施されるさまと解釋する。

「甹與」と類似した用例としては、時代は下るが、「隴西行」古辭（『玉臺新詠』一）「好婦出迎客、顏色正敷愉。（好婦出でて客を迎え、顏色正に敷愉たり。）」、鮑照「擬行路難十八首」第五首「人生苦多歡樂少、意氣敷腴在盛年。（人生苦しみ多く歡樂少なし、意氣敷腴たるは盛年に在り。）」などがあり、生氣の盛んなさまの形容として用いられている。王先謙の説は迂遠の感を免れず、ここでは師古注に據った。

◎桐生茂豫　靡有所詘

師古注では「桐讀爲通。茂豫、美盛而光悅也。言草木皆通達而生、美悅光澤、各無所詘、皆申遂也。（桐は讀みて通と爲す。茂豫は、美盛にして光悅なり。言うこころは草木皆通達して生じ、美悅光澤、各おの詘する所無く、皆申遂するなり。）詘（クツ）、音丘物反。」としている。

一方劉攽は『法言』學行に「師哉師哉、桐子之命也。（師なる哉　師なる哉、桐子の命なり。）」とあるのを引き、「桐、幼稚也。」という。沈欽韓は同じ箇所の注に「桐、侗也。」とあるとして、「桐」は「侗」に通ずるとする（ただし『法言』李軌注には「桐、洞也。」とあり、宋咸注に「桐當爲侗、字之誤也。」という）。「侗」については、『論語』泰伯に「子曰、狂而不直、侗而不愿、悾悾而不信、吾不知之矣。（子曰く、狂にして直ならざる、侗にして愿（つつ）しまざる、悾悾として信ならざるは、吾　之を知らず。）」という用例があり、何晏の集解に孔安國を引いて「侗、未成器之人、宜謹愿。（侗、未だ器を成さざるの人、宜しく謹愿なるべし。）」とする。ここでは劉攽・沈欽韓に從い、「侗」（幼い）の意で解釋した。

◎敷華就實　旣阜旣昌

師古注に「敷、布也。就、成也。阜、大也。昌、盛也。」

「旣○旣○」は『詩經』に頻出する特徵的な表現であり、多くは褒め稱えるべき狀況を述べる。その大部分は雅・頌に現れ、壽ぎの定型句として用いられたことが推察できる。

・小雅・信南山「益之以霢霂、旣優旣渥。旣霑旣足、生我百穀。（之に益すに霢霂を以てし、旣に優（ゆた）かに旣に渥（あつ）し。旣に霑い旣に足り、我が百穀を生ず。）」

・周頌・執競「旣醉旣飽、福祿來反。（旣に醉い旣に飽く、福祿　來り反らん。）」

◎登成甫田　百鬼迪嘗

師古注では「甫田、大田也。百鬼、百神也。迪、進也。嘗謂歆饗之也。言此粢盛、皆因大田而登成、進於祀所、而爲百神所歆饗也。（甫田は、大田なり。百鬼は、百神なり。迪は、進なり。嘗は之を歆饗するを謂うなり。言うこころは此の粢盛、皆　大田に因りて登成し、祀所に進め、而して百神の歆饗する所と爲るなり。）迪音大歷反。」としている。この廣い田地に實った穀物をもろもろの神靈に供えるというのである。

「百神」が先秦から廣く見られる語であるのに對し、「百鬼」は、武帝期以前の用例を見ない。祭祀體系の整備とともに「神」と「鬼」との序列化が進んでいたこと、「神」だけでなく「鬼」までも祭祀の對象となっていたことがうかがえて興味深い。

「甫田」という題の詩は『詩經』に二首あるが、ここでは小雅・甫田の「倬彼甫田、歲取十千。（倬たる彼の甫田、歲に十千を取る。）」を意識しているだろう。

◎廣大建祀　肅雍不忘

「肅雍」も『詩經』獨特の語である。今本『毛詩』では「肅雝」と表記されている。ここでは特に周頌・清廟「於穆清廟、肅雝顯相。（於（ああ）穆たる清廟、肅雝顯相たり。）」を強く意識しているだろう。そのほか周頌・有瞽に「喤喤厥聲、肅雝和鳴。（喤喤たる厥の聲、肅雝和鳴す。）」、召南・何彼襛矣に「曷不肅雝、王姬之車。（曷ぞ肅雝たらざるや、王姬の車。）」という例が見られ、いずれも「肅、敬。雝、和。」（毛傳）という意味で用いられている。

◎神若宥之　傳世無疆

師古注に「若、善也。宥、祐也。」

「無疆」は、先に擧げた小雅・甫田の結びに「報以介福、萬壽無疆。（報いるに介福を以てし、萬壽無疆たらん。）」とあるのをはじめ、「萬壽無疆」の句が『詩經』に六例ある。周代の金文や漢代の瓦當などにも、壽命や幸福の永く續くことを祈って頻繁に用いられる吉祥語である。

《西顥》（第五）

西顥沆碭
秋氣肅殺
含秀垂穎
續舊不廢
姦僞不萌
祅孽伏息
隅辟越遠
四貉咸服
既畏茲威
惟慕純德
附而不驕
正心翊翊
西顥五　鄒子樂

西顥　沆碭として
秋氣　肅殺たり
秀を含み穎を垂れ
舊を續ぎて廢れず
姦僞　萌さず（きざす）
祅孽　伏息す
隅辟越遠より
四貉　咸な服す
既に茲の威を畏れ
惟だ純德を慕う
附きて驕らず
心を正して翊翊たり

【押　韻】

殺―月部、廢―祭部（合韻）　息・服・德・翊―職部

師古注に「廢、合韻、音發。」「殺」と韻を踏むための處置である。ただし月祭合韻は漢代では普通の現象である。

【通　釋】

西の白い氣が澄み渡り
秋の氣の嚴しさは草木を枯らす
草木に實がなり稻穗が垂れる
自然の流れは繼承されて廢れることはない
邪なことは起こらず
災いは息を潛める
僻地の民は遠くからやって來て
四方の異民族もすべて服從する
彼らはすでにこの威嚴を畏怖して
ただ大いなる德を慕う
皆從って驕ることなく
心を正してつつしむ

【注　釋】

◎西顥沆碭

「西顥」は秋のこと。西は五行說では秋の方角。

韋昭注は「西方少昊也。」といい、少昊を祀るものとする。少昊は、『山海經』西山經に「白帝少昊」として現れる傳說上の王。『禮記』月令にも孟秋・仲秋・季秋みな「其帝少皡」という。「顥」は「昊」と通ずる。

ただし、王念孫がいうように、郊祀歌の靑陽・朱明・西顥・玄冥という排列と、『爾雅』釋天の「春爲靑陽、夏爲朱明、秋爲白藏、冬爲元英。」という記述とを合わせ見れば、「顥」は「白」の意とすべきである。『說文解字』九上頁部に「顥、白皃。」という。「西顥」の語は、『呂氏春秋』有始に「西方曰顥天。」とあるのによったのであり、少昊とは關係なかろう。『讀書雜志』四參照。

「沆碭」は師古注に「沆音胡浪反、碭音蕩。沆碭、白氣之貌也。」とある。疊韻の語。「白」は秋の澄み渡った氣の形容であるとともに、五行では秋に配當される色でもある。

◎秋氣肅殺

秋の氣が滿ち、萬物を衰退させることをいう。

秋と「肅」「殺」については、『禮記』月令・孟秋の條に「天地始肅、不可以贏。（天地始めて肅す、以て贏すべからず。）」、同じく仲秋の條に「殺氣浸盛、陽氣日衰。（殺氣浸く盛んに、陽氣日に衰う。）」などとある。

また『楚辭』九辯に「悲哉秋之爲氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰。（悲しいかな秋の氣たるや、蕭瑟として草木搖落して變衰す。）」、『呂氏春秋』義賞に「春氣至則草木產、秋氣至則草木落。（春氣至れば則ち草木產まれ、秋氣至れば則ち草木落つ。）」、『淮南子』主術に「若春氣之生、秋氣之殺也。（春氣の生じ、秋氣の殺するがごときなり。）」などとあり、秋が萬物を枯れ衰えさせる季節として、認識されていたことがうかがえる。

◎含秀垂穎　續舊不廢

「秀」はイネ科の植物。「穎」は穂先。師古注に「不榮而實曰秀、葉末曰穎。（榮さかずして實るを秀と曰い、葉末を穎と曰う。）」とある。

二句の解釋について、師古は「五穀百草、秀穎成實、皆因舊苗、無廢絶也。（五穀百草、秀穎　實を成す、皆な舊苗に因りて、廢絶する無きなり。）」といい、秋にはすべての植物が實をつけ、それは古い苗を受け繼いで綿々と續く營みであるという。「續舊不廢」の表現について、何焯『義門讀書記』一六は「續猶嗣續也。不曰登新、而曰續舊。善言天地生物之心矣。（續は猶お嗣續のごとし。登新と曰わずして、續舊と曰う。善く天地生物の心を言う。）」と評す。

◎姦僞不萌　祅孽伏息

「姦僞」の例は、『韓非子』六反に「姦僞無益之民六。」、『呂氏春秋』義賞に「姦僞賊亂貪戾之道興。」、『史記』一二二酷吏列傳に「昔天下之網嘗密矣、然姦僞萌起。（昔天下の網　嘗て密なり、然れども姦僞　萌起す。）」とある。「祅孽」の例は、『漢書』四九鼂錯傳の鼂錯の上奏文に「祅孽滅、賊氣息。」とある。ともに戰國末以降の語であり、法治主義の臺頭と關連があろう。

秋は「肅殺」の氣が滿ちる季節であることから、刑罰を嚴正にし、不正や罪を罰する季節と考えられていた。『禮記』月令・孟秋に「是月也、命有司、脩法制、繕囹圄、具桎梏、禁止姦、愼罪邪。（是の月や、有司に命じて、法制を脩め、囹圄を繕い、桎梏を具え、姦を禁止し、罪邪を愼しむ。）」と述べられている。また仲秋の條にも「乃命有司、申嚴百刑、斬殺必當、毋或枉橈。（乃ち有司に命じて、申ねて百刑を嚴にし、斬殺必ず當り、枉橈する或る毋れ。）」という。

◎隅辟越遠　四貉咸服

「隅辟」は僻地のこと。「辟」は師古注に「辟讀曰僻。」

「四貉」は四方の異民族。師古注に「四貉猶言四夷。（四貉は猶お四夷と言うがごとし。）貉音莫客反。」「貉」の例は、『孟子』告子下に「欲輕之於堯舜之道者、大貉小貉也。（之［十分の一税］を堯舜の道より輕くせんと欲する者は、大貉小貉なり。）」、また『史記』一一〇匈奴列傳に「破幷代以臨胡貉。（幷・代を破りて以て胡・貉に臨む。）」『周禮』夏官・職方氏には、各地の異民族を擧げて「四夷・八蠻・七閩・九貉・五戎・六狄」という。「貉」はもとは中國東北の異民族を指す語であって、王先謙は、武帝が朝鮮の地を征服したことを指すとする。「四夷」といわずに「四貉」といったことには、朝鮮への意識があるかも知れないが、それだけに限定することもないと考え、ここでは師古注に據った。

「咸服」は、『孟子』萬章上に「舜流共工于幽州、放驩兜于崇山、殺三苗于三危、殛鯀于羽山、四罪而天下咸服。（舜は共工を幽州に流し、驩兜を崇山に放ち、三苗を三危に殺し、鯀を羽山に殛す、四罪にして天下咸な服す。）」（『尚書』舜典にも同樣の記述がある）「咸服」という語は舜のこの業績と共に記憶されていたであろう。秦の始皇帝が立てた刻石の一つ「碣石門碑文」（『史

記』六秦始皇本紀）にも「武殄暴逆、文復無罪、庶心咸服。（武は暴逆を殄し、文は罪無きを復し、庶心咸服す。）」という。

◎既畏茲威　惟慕純德　附而不驕　正心翊翊

「純德」は大いなる德。師古注に「純、大也。」『詩經』周頌・維天之命に「於乎不顯、文王之德之純。（於不いに顯らかなり、文王の德の純なる。）」、『禮記』孔子閒居に「無服之喪、純德孔明。（無服の喪は、純德孔いに明らかなり。）」、『淮南子』原道に「穆忞隱閔、純德獨存。（穆忞隱閔、純德獨り存す。）」などとある。

「翊翊」は、うやうやしく愼むさま。《華爗爗》（第十五）に、「共翊翊、合所思。（共しく翊翊として、思う所に合う。）」という。同じく《華爗爗》の「神之徠、泛翊翊。（神の徠たる、泛として翊翊たり。）」は意味が異なる。同音の「翼翼」は『詩經』雅頌、特に大雅を中心に十例ある。大雅・文王「世之不顯、厥猶翼翼。（世の不いに顯らかなるに、厥れ猶お翼翼たり。）」、同・大明「維此文王、小心翼翼。（維れ此の文王、小心翼翼たり。）」など。「文王」の毛傳に「翼翼、恭敬。」

なお郊祀歌とともに『漢書』禮樂志に收められる「安世房中歌」十七章の第十一章に「馮馮翼翼、承天之則。（馮馮翼翼として、天の則を承く。）」、第十五章に「令問在舊、孔容翼翼。（令問舊に在り、孔容翼翼たり。）」という。

この四句は、威嚴を畏れて大いなる德に從い、驕ることなく愼んでいる樣をいう。師古注に「言畏威懷德、皆來賓附、無敢驕怠、盡虔敬。（言うこころは威を畏れて德に懷き、皆な來りて賓附し、敢えて驕怠する無く、虔敬を盡くす。）」という。

《玄冥》（第六）

玄冥陵陰　蟄蟲蓋臧　屮木零落　抵冬降霜　易亂除邪　革正異俗　兆民反本　抱素懷樸　條理信義　望禮五嶽　籍斂之時　掩收嘉穀

玄冥　陵陰たり　蟄蟲　蓋臧す　屮木　零落し　冬に抵り霜を降す　亂を易え邪を除き　異俗を革正す　兆民は本に反り　素を抱き樸を懷く　信義を條理し　五嶽を望禮す　籍斂の時　嘉穀を掩收せん

玄冥六　鄒子樂

【押　韻】

臧・霜―陽部　俗・樸・嶽・穀―屋部

【通　釋】

冬は寒々しく暗い
虫たちは土中に冬ごもりする
草木は枯れ落ち
冬に至り霜を降らせる
邪なるものを除き
よからぬ習俗をあらため正す
人民は原初にかえり
素朴たらんと心に思う
信義をととのえて
五岳を望祭する
籍田は收穫の時
惠みの稲を刈りいれよう

【注　釋】

◎玄冥陵陰　蟄蟲蓋臧

師古注に「玄冥、北方之神也。」『禮記』月令には孟冬・仲冬・季冬みな「其帝玄冥」という。『爾雅』釋天には「冬爲元英。（冬を元英と爲す。）」という。「玄冥」と「元英」は音が近い。

「陵陰」は、『詩經』豳風・七月に「二之日鑿冰沖沖、三之日納于凌陰。（二の日は冰を鑿（うが）つこと沖沖たり、三の日は凌陰に納む。）」とあり、毛傳に「凌陰、氷室。」という。ここでは寒く閉塞したイメージの形容詞として解釋した。

◎屮木零落　抵冬降霜

孟康注に「抵、至也、至冬而降霜。（抵、至なり、冬に至りて霜を降らしむ。）音底。」官本には「音底」の二字が無く、宋祁を引いて「抵は底に作る」という。

師古注に「屮、古草字也。」

「屮木零落」という句は『禮記』月令・仲夏に「行秋令、則草木零落、果實早成、民殃於疫。（秋令を行わば、則ち草木零落し、果實は早成し、民は疫に殃す。）」というほか、『楚辭』離騷に「惟草木之零落兮、恐美人之遲暮。（草木の零落を惟い、美人の遲暮を恐る。）」、九辯に「蕭瑟兮草木搖落而變衰。（蕭瑟として草木搖落して變衰す。）」などの類似句が見られる。

◎易亂除邪　革正異俗

師古注に「易、變。革、改也。」

何焯『義門讀書記』では『尚書』にいうところの「朔易」の意であるという。「朔易」は、『尚書』堯典に「申命和叔、宅朔方、曰幽都。平在朔易。日短星昴、以正仲冬。（和叔に申命し、朔方に宅（す）まわしめ、幽都と曰う。朔易を在（み）せしむ。日は短、星は昴。以て仲冬に正す。）」とあるもので、一年の締めくくりである冬に全てを一新することをいう。

◎兆民反本　抱素懷樸

「兆民」は、『尚書』呂刑「一人有慶、兆民賴之、其寧惟永。（一人慶有らば、兆民之を賴り、其れ寧らかなること惟れ永からん。）」をはじめ、『禮記』『尚書』『左傳』『國語』などに頻出するが、詩歌には類例がない。

「反本」は、本來のあるべき姿に立ち返ること。『史記』八四屈原賈生列傳に、「父母者、人之本也。人窮則反本。（父母なる者は、人の本なり。人窮すれば則ち本に反る。）」という。『禮記』禮器「禮也者、反本脩古、不忘其初者也。（禮なる者は、本に反り古を脩め、其の初めを忘れざる者なり。）」、『荀子』大略「制禮反本成末、然後禮也。（禮を制するに本に反り末を成し、然る後に禮なり。）」など、禮と關連づけて用いられることもあるが、『淮南子』原道「肅然應感、殷然反本、則淪於無形矣。（肅然として感に應じ、殷然として本に反れば、則ち無形に淪む。）」のように道家的な意味合いの例もある。

「抱素懷樸」は、『老子』一九「見素抱朴、少私寡欲。（素を見（あらわ）し朴を抱き、私を少くし欲を寡くす。）」、『莊子』馬蹄「同乎無知、其德不離。同乎無欲、是謂素樸。素樸而民性得矣。（同乎として無知、其の德離れず、同乎として無欲、是れを素樸と謂う。素樸にして民の性得らる。）」等、老莊とのつながりをもつ表現である。

◎條理信義　望禮五嶽

師古注に「條、分也、暢也。」「條」「理」ともに「筋道だてる」「ととのえる」という意味を持ち、ここでは動詞として解釋した。

◎籍斂之時　掩收嘉穀

師古注に「籍斂、謂收籍田也。（籍斂は、籍田を收むるを謂うなり。）」籍田とは祭祀のために天子が儀式的に耕す田のことである。

《惟泰元》（第七）

惟泰元尊　惟れ泰元　尊し
媼神蕃釐　神に媼せば　釐蕃（さいわいおお）し
經緯天地　天地を經緯し
作成四時　四時を作成す
精建日月　日月を精建し
星辰度理　星辰　理を度る
陰陽五行　陰陽五行
周而復始　周りて復た始まる
雲風靁電　雲風靁電
降甘露雨　甘き露雨を降らす
百姓蕃滋　百姓は蕃く滋く
咸循厥緒　咸な厥の緒に循う
繼統共勤　統を繼ぎて　共（うやうや）しく勤め

順皇之德　皇の德に順う
鸞路龍鱗　鸞路龍鱗
罔不肸飾　肸飾せざる罔し
嘉籩列陳　嘉籩列陳し
庶幾宴享　宴享を庶幾(こいねが)う
滅除凶災　凶災を滅除し
烈騰八荒　烈は八荒に騰ぐ
鐘鼓竽笙　鐘鼓竽笙
雲舞翔翔　雲舞　翔翔たり
招搖靈旗　招搖の靈旗
九夷賓將　九夷　賓將す

惟泰元七

建始元年丞相匡衡奏罷鸞路龍鱗更定詩曰涓選休成

建始元年、丞相匡衡奏して「鸞路龍鱗」を罷め、更めて詩を定めて「休成を涓選す」と曰う。

【押　韻】

釐・時―之部平聲　理・始―之部上聲　雨・緒―魚部　德・飾―職部　享・荒・翔・將―陽部

「享」は『廣韻』では上聲養韻に屬し、他の三字が平聲であるのと一見合わない。師古注は「享字合韻、宜音鄉。」[「音」はもと「因」に作るが、官本によって改む]といい、平聲に讀むよう指示する。ただ實際には羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』一八二ページ注③に指摘するように、饗・享・養・爽等の字は、漢人はみな平聲の字と押韻している。

【通　釋】

ああ泰元の神は尊く
火を焚いて神を祀れば多くの福を惠んでくれる
天地を治め
四つの季節を作り
日月を精密に創造し
星々は決められたとおり順行する
陰陽五行は
一周めぐってまた始まる
雲風雷電は
惠みの雨露を降らせる
萬民は生まれ增え
皆全てその業に携わる
天子は皇統を引き繼ぎ謹んで勤め
大いなる天の德にしたがう

鸞路の車は龍の鱗のごとく
飾りを鏤めないところなどない
佳きたかつきはずらりと並べられ
神がお受けになることを願う
悪しき災いは取り除かれ
大いなる威厳は天地の外にまで響き渡る
鐘鼓竽笙が演奏され
雲のような舞はしめやかに行われる
招搖星が描かれた旗がひらめき
各地の異民族は服従する

【注　釋】

◎惟泰元尊　媼神蕃釐

「泰元」は、最高神泰一。「媼神」は、煙を焚いて神を祀ること。

李奇注では「元尊、天也。媼神、地也。祭天燔燎、祭地瘞埋也。（元尊は、天なり。媼神は、地なり。天を祭るに燔燎し、地を祭るに瘞埋するなり。）」というが、「元尊」を天とするのでは、「惟泰元」という題に合わない。師古注は「李説非也。泰元、天也。」とした上で、「言天神至尊、而地神多福也。（天神は至尊にして、地神は福多きを言うなり。）」という。《帝臨》（第二）にも「富媼」の語が見え、この世を富ませる母なる地神と理解される（既出）。いずれにせよ舊注では、はじめの二句について天地の二神を指すとする。

しかし吳仁傑『兩漢刊誤補遺』は、「泰元」「媼神」が天と地の神であれば、次の句に「天地を經緯す」というはずはないとして、「泰元」は泰一神、「媼」は「熅」であり、泰一神を祀るため煙を立ち上らせることとする。吳はさらに、郊祀志上（『漢書』二五）には「天子祠三一（天子三一を祠る）、天一・地一・泰一。」、「皇帝敬拜泰一。（皇帝敬して泰一を拜す。）」など、「泰一」を祀るという記述がいくつか現れること、元鼎五年（前一一二）秋、南越を伐つに際して泰一に祈った際に、日・月・北斗・登龍を描いて太一三星を象った「靈旗」を作ったという記述（下文參照）が、この詩に「招搖靈旗、九夷賓將」というのと符合することを指摘する。そのほか、『呂氏春秋』大樂に、太一のはたらきを説く一節（後出）も、この詩の以下の内容と關わるし、「惟泰元」の次の章が「天地」であることも、「泰元」が天地の上に立つ存在であることを思わせる。よってここでは吳仁傑の説に従って解した。

「蕃」は、師古注に「蕃、多也。蕃音扶元反。」「釐」は、「禧」に通ず。さいわい。師古注に「釐、福也。釐讀曰禧。（釐は讀みて禧と爲す。）」

◎經緯天地　作成四時　精建日月　星辰度理　陰陽五行　周而復始

『呂氏春秋』大樂に、この六句に類した記述が見える。

太一出兩儀、兩儀出陰陽。……日月星辰、或疾或徐、日月不

同、以盡其行。四時代興、或暑或寒、或短或長、或柔或剛。萬物所出、造於太一、化於陰陽。

（太一は兩儀を出だし、兩儀は陰陽を出だす。……日月星辰、或いは疾く或いは徐ろに、日月は同じからずして、以て其の行を盡くす。四時は代るがわる興り、或いは暑く或いは寒く、或いは短く或いは長く、或いは柔にして或いは剛なり。萬物の出づる所、太一に造（はじ）まり、陰陽より化す。）

「經緯天地」の用例は、『國語』周語下に「經之以天、緯之以地。（之を經するに天を以てし、之を緯するに地を以てす。）」、『荀子』解蔽に「經緯天地而材官萬物。（天地を經緯して萬物を材官す。）」などとある。

◎雲風靁電　降甘露雨　百姓蕃滋　咸循厥緒

師古注に「蕃、多也。滋、益也。循、順也。緒、業也。」

「甘露」は郊祀歌の他の章にもしばしば詠まれ、《華爗爗》（第十五）に「甘露降、慶雲集。（甘露降り、慶雲集う。）」《象載瑜》（第十八）「食甘露、飲榮泉。（甘露を食し、榮泉を飲む。）」とある。

◎繼統共勤　順皇之德

「共」は恭しい様。師古注に「共讀曰恭。（共は讀みて恭と曰う。）」

「皇」は師古注に「皇、皇天也。」

二句の解釋について師古は、「此言天子繼承祖統、恭勤爲心而順天也。（此れ言うこころは天子祖統を繼承し、恭勤もて心と爲して天に順うなり。）」という。

◎鸞路龍鱗　罔不肸飾

「鸞路」は、天子の用いる車の美稱。『禮記』月令・孟春に「乘鸞路、駕倉龍。（鸞路に乘り、倉龍に駕す。）」、鄭玄注に「鸞路、有虞氏之車。」有虞氏は舜をさす。また『漢書』九九上王莽傳上「鸞路乘馬」の師古注には「鸞路、路車之施鸞者也。（鸞路は、路車の鸞を施す者なり。）」といい、「鸞」（鈴）をつけた「路車」（天子の車）とする。

「龍鱗」は、龍の鱗のようにきらびやかな様をいう。司馬相如「天子遊獵賦（子虛賦）」に「其土則丹青赭堊、雌黃白坿、錫碧金銀。衆色炫燿、照爛龍鱗。（其の土は則ち丹青赭堊、雌黃白坿、錫碧金銀。衆色炫燿して、照爛すること龍鱗のごとし。）」とある。

「罔」は師古注に「罔、無也。」

「肸」は、蘇林注に「肸音堅塗之堅。堅、飾也。（肸は音堅塗の堅（キ）。堅は、飾なり。）」、師古注では「肸、振也。謂皆振整而飾之也。（肸は、振なり。謂うこころは皆な振整して之を飾るなり。）肸音許乙反。」蘇林は「肸」も「飾」も「かざる」の意とするが、師古は「整え飾る」と二字を別々に釋している。

◎嘉籩列陳　庶幾宴享

「嘉籩」は、祭祀に使用するタカツキで竹製のもの。師古注に「嘉籩、謂祭祀之籩實也。木曰豆、竹曰籩。（嘉籩は、祭祀の籩實を謂うなり。木は豆と曰い、竹は籩と曰う。）」とある。『爾雅』釋器には「木豆謂之豆、竹豆謂之籩。」という。

◎滅除凶災　烈騰八荒

「烈騰八荒」は、泰元の威信が世界の果てまで響き渡ること。師古注は「言威烈之盛、踰於八荒。（言うこころは威烈の盛、八荒を踰ゆ。）」という。本文の「烈」は「列」とするものがあるが、官本は師古注に「威烈」としているのによって訂正している。

「八荒」は、賈誼「過秦論」に「有席巻天下、包擧宇内、囊括四海之意、幷吞八荒之心。（天下を席巻し、宇内を包擧し、四海を囊括するの意、八荒を幷吞するの心有り。）」（『史記』六秦始皇本紀贊引）という例がある。

◎鐘鼓竽笙　雲舞翠翔

「雲舞」については、「雲門」（黄帝の世のものと傳えられる舞）を舞って天神を迎えることとする推測もある（狩野直禎・西脇常記『漢書郊祀志』［平凡社東洋文庫、一九八七］二二八ページ注（7））。「雲門」は、『周禮』春官・大司樂に、天神を祀る舞として見え、鄭玄注は黄帝の舞という。しかし、ここでは「雲」は舞の形容として譯出した。

「翠翔」は莊嚴でゆったりしたさま。『禮記』玉藻に「凡行容愓愓、廟中齊齊、朝廷濟濟翠翔。（凡そ行容は愓愓、廟中は齊齊、朝廷は濟濟翠翔。）」、鄭玄注に「莊敬貌也。」という。少儀にも「言語之美穆穆皇皇、朝廷之美濟濟翠翔。」とある。また『楚辭』七諫・謬諫に「衆鳥皆有行列兮、鳳獨翠翔而無所薄。（衆鳥皆な行列有り、鳳獨り翠翔として薄（せま）る所無し。）」、時代が下るが韋玄成「自劾詩」（『漢書』七三韋玄成傳）に「朝宗商邑、四牡翠翔。（商邑に朝宗し、四牡翠翔たり。）」、師古注に「翠翔、安舒貌。」とある。『禮記』の例と合わせ考えれば、莊重でゆったりしたさまをさすものであろう。

◎招搖靈旗　九夷賓將

「招搖」とは北斗七星の柄の端近くに位置する星の名。『漢書』二六天文志に、「杓端有兩星、一内爲矛、招搖。（杓端に兩星有り、一の内なるを矛と爲す、招搖なり。）」

「靈旗」は、招搖星が描かれ、討伐の際に用いる旗のこと。師古注に「畫招搖於旗以征伐、故稱靈旗。（招搖を旗に畫きて以て征伐す、故に靈旗と稱す。）」とある。また『史記』封禪書（『史記』一二孝武本紀・『漢書』郊祀志上もほぼ同文）に「以牡荆畫幡日月北斗登龍、以象太一三星、爲泰一鋒、命曰靈旗。（牡荆を以て幡に日・月・北斗・登龍を畫き、以て太一三星に象り、泰一の鋒と爲し、命づけて靈旗と曰う。）」という記述があり、孝武本紀の該當箇所の正義に李奇を引いて、「畫旗樹泰一壇上。（旗に畫きて泰一の壇上に樹つ。）」という。

「賓將」については師古注に「將猶從也。（將は猶お從のごときなり。）」といい、「賓從」すなわち服從の意で解している。ただし王先謙は、上に引いた封禪書の續きに、「爲兵禱、則太史奉以指所伐國。（兵の禱りを爲せば、則ち太史奉りて以て伐つ所の國を指す。）」とあるのをふまえ、「賓、導也。將、送也。」という。「靈旗」が異民族のいる方角を指し示し導く、といった意味であろうか。顔師古の「將猶從也。」という訓詁が他に類例を見ない

のに對し、王先謙の訓詁は、『爾雅』や經書の注に見えるものであるが、句全體の解釋にやや不安を殘すため、しばらく師古注による。

◎建始元年、丞相匡衡奏罷「鸞路龍鱗」、更定詩曰「涓選休成」

『漢書』郊祀志下によれば、成帝が卽位すると、匡衡は祭祠における奢侈を改めるべく、一連の上奏を行い裁可されているが、その中で「紫壇有文章采鏤黼黻之飾及玉・女樂・石壇・僊人祠、瘞鸞路・騂駒・寓龍馬、不能得其象於古。（紫壇に文章采鏤黼黻の飾、及び玉・女樂・石壇・僊人祠有り、鸞路・騂駒・寓龍馬を瘞（うず）むるは、其の象を古（いにしえ）に得る能わず。）」といい、それらをやめるよう進言している。この詩の「鸞路龍鱗」の句と、つづく《天地》（第八）の「黼繡周張」の句は、この匡衡の議に抵觸するため、それぞれ「涓選休成」「肅若舊典」と差し替えられたのである（《天地》については下文參照）。

◎涓選休成

よきものを選りすぐるの意。

臣瓚は「涓、除也。除惡選取美成者也。（涓は、除なり。惡を除きて美成なる者を選取するなり。）」とする。一方、沈欽韓は「涓、絜也。瓚說非。」と言い、「涓」は除くの意味ではなく、淸めるの意であるとする。ここでは沈說に從った。

【餘說】匡衡の上奏による詩句改訂の記事についての誤解

「建始元年」以下の記事につき、明代までの版本は、「更定詩曰」の下で改行し、本來《惟泰元》の改訂後の歌詞である「涓選休成」四字が、次の《天地》の冒頭に續けられていた。同樣に匡衡の上奏によって改訂された《天地》の「肅若舊典」四字も、その次の《日出入》（第九）に續けられていた。

元の馬端臨の『文獻通考』七一に引く宋の陳薦の發言（元豐六年＝一〇八三）では、漢郊祀歌を引いて「涓選休成、天地並況。」といっており、北宋本では旣に「涓選休成」が《天地》の冒頭におかれていたことになる。このことは錢大昕『二十二史考異』七に指摘がある。

明の淩稚隆『漢書評林』に引く明の茅坤の評でも、《惟泰元》の改作について「匡衡此詩亦屬侈欲導諛之詞耳。（匡衡の此の詩も亦た侈欲もて導諛するの詞に屬するのみ。）」、《天地》の改作について「此詩亦眇而幻。（此の詩も亦た眇にして幻。）」といっているが、これも誤って改行した版本により、《天地》《日出入》の全體を匡衡の上奏による改訂と誤解したものであろう。

《天地》（第八）

天地並況　　天地は並びに況（たま）う
惟予有慕　　惟（われ）れ予　慕うこと有り
爰熙紫壇　　爰（ここ）に紫壇を熙（おこ）し
思求厥路　　厥の路を思求せん

恭承禋祀
緼豫爲紛
黼繡周張
承神至尊
千童羅舞成八溢
合好效歡虞泰一
九歌畢奏斐然殊
鳴琴竽瑟會軒朱
璆磬金鼓
靈其有喜
百官濟濟
各敬厥事
盛牲實俎進聞膏
神奄留
臨須搖
長麗前掞光燿明

恭しく承けて禋祀すれば
緼豫として紛たり
黼繡周く張り
神の至尊なるを承く
千童　羅舞して八溢を成し
合好して歡を效し泰一を虞します
九歌　畢く奏すれば斐然として殊なり
鳴琴　竽瑟　軒朱を會す
璆の磬　金の鼓
靈は其れ喜び有り
百官濟濟として
各おの厥の事を敬しむ
牲を盛り俎を實たし進めて膏を聞かしむ
神は奄留し
臨むこと須搖たり
長麗は前に掞として　光燿　明らかなり

寒暑不忒況皇章
展詩應律鋗玉鳴
函宮吐角激徵清
發梁揚羽申以商
造茲新音永久長
聲氣遠條鳳鳥鵜
神夕奄虞蓋孔享

寒暑は忒わず皇に況いて章らかにす
詩を展べ律に應じ鋗として玉鳴り
宮を函み角を吐し激徵清し
梁を發り羽を揚げ申ぬるに商を以てし
茲の新音を造れば永久にして長し
聲氣は遠きに條し鳳鳥鵜く
神は夕べに奄として虞しみ蓋し孔いに享けたり

天地八

丞相匡衡奏罷黼繡周張更定詩曰肅若舊典

丞相匡衡　奏して「黼繡周張す」を罷め、更めて詩を定め「舊典を肅い若う」と曰う。

【押　韻】

慕・路―魚部　紛・尊―眞部　溢・一―質部　殊・朱―魚部
喜・事―之部　膏・搖―宵部　明・章―陽部　鳴・清―耕部
商・長・鵜・享―陽部

「喜」は普通上聲であるが、顏師古は「喜、合韻。音許吏反。」とし、去聲で讀んで「事」と韻を合わせようとする。江有誥『唐

韻四聲正』に、先秦の例を多く擧げ、古くは去聲の音があったことを記す。

「享」も後世において上聲であるが、その前の韻字はみな平聲であり、師古も「享、合韻、音鄉。」という。「享」が漢代には平聲で押韻していたことは、上文《惟泰元》（第七）參照。

【通　釋】

天地の神靈はあまねく惠み
我々は神靈をお慕いする
ここに紫壇をもうけ
神靈のおいでになる路を思い求めよう
恭しくお迎えし柴を焚いておまつりすれば
氣は立ち上りにぎにぎしい
あやぎぬを張りめぐらせ
いとも尊き神靈をお承けしたてまつる
千人の童（わらべ）がならび舞って八列を成し
むつまじく宴して泰一神をもてなす
九歌が奏で終われば　美しさはことさらであり
鳴琴や竽琵を奏で　軒轅・朱襄を一同に會す
美玉の磬　黃金の鼓
神靈はお喜びになり
百官は嚴かに整列し
各々のつとめを肅々と行う
いけにえを俎上に滿たし　あぶらの香りをたてまつれば
神靈は留まって
しばしくつろぎ過ごされる
靈鳥が來臨し　光り輝くこと　眩（まばゆ）く
四季は正しく巡り　皇德を明らかにする
詩をうたい音律にあわせ　玉が鳴り響き
宮聲をふくみ角聲をあらわし　徵聲の清き音を高らかにする
梁をめぐり　羽聲をさかんにし　商聲をも重ねて奏で
この新たな音樂を造れば永久不滅のものである
聲音は遠くまで達し　鳳凰が飛翔して
神靈は今宵おおいに樂しまれ　きっと滿ち足りたことであろう

【注　釋】

◎天地並況　惟豫有慕

師古注に「況、賜也。」

王先謙は、天一、地一、泰一の「三一」を祠るという郊祀志上の記述（《惟泰元》（第七）に既出）を引いて、ここに言う「天地」が天一神・地一神のことを指すと解釋している（泰一は下文に見える）。

◎爰熙紫壇　思求厥路

師古注に「熙、興也。」また「紫壇、壇紫色也。思求降神之路也。（紫壇は、壇の紫色なるものなり。神を降すの路を思求するなり。）」

王先謙は、郊祀志下に引く匡衡の語に「甘泉泰畤紫壇、八觚宣通、象八方。（甘泉の泰畤紫壇、八觚宣通するは、八方に象る。）」とあるのが、『史記』封禪書で繆忌が泰一を祀る作法を述べて「爲壇開八通之鬼道。（壇を爲りて八通の鬼道を開く。）」というのと一致することを指摘し、この二句は、三一を祀る紫壇が八角形をなし、鬼神が降臨する路を八方に開いていることによると解している。

◎恭承禋祀　緼豫爲紛

「禋祀」は煙を立ち上らせて神を祀ることで、『詩經』に、小雅・大田の「來方禋祀、以其騂黑、與其黍稷。（來りて禋祀するに方りて、其の騂黑と、其の黍稷とを以てす。）」、大雅・生民の「克禋克祀、以弗無子。（克く禋し克く祀り、以て子無きを弗う。）」などの例がある。

「緼豫」は用例をみない語である。舊注では、孟康を引いて「積聚脩飾、爲此紛華也。（積聚し脩飾して、此の紛華を爲すなり。）」と、祭壇を華々しく裝飾した樣子と解釋する。一方、王先謙は「緼卽絪緼。……豫、悅豫也。緼豫、神享其祀而和悅也。（緼は卽ち絪緼なり。……豫は、悅豫なり。緼豫は、神　其の祀を享け和悅するなり。）」と「緼」「豫」を分けて解釋する。「絪緼（烟熅）」は、『周易』繫辭下「天地絪緼、萬物化醇。（天地絪緼として、萬物化醇す。）」など、氣の盛んに立ち上るさまをいう。「豫」は喜ぶの意で、一句は祀りを受けた神の喜びが盛んな樣子とする。ここでは「緼豫」で一語として、氣の立ち上るさまと解した。また「緼」と「紛」との結びつきは、『楚辭』九章・橘頌に「紛緼宜脩、姱而不醜兮。（紛緼として宜脩にして、姱にして醜くからず。）」とあり、王逸の章句では「紛緼、盛貌。」とする。なお「紛緼」は疊韻の語。師古注に「緼音於粉反。」

◎黼黻周張　承神至尊

「黼黻」は、白黑で斧の形の模樣を刺繡した布。禮服に用いる。師古注に、「白與黑畫爲斧形、謂之黼。（白と黑と畫きて斧形を爲す、之を黼と謂う。）」

「周」は、あまねく、ひろくの意。「張」は、祭壇などを設けること。王先謙補注に、「周張、謂周徧張設於壇上。（周張は周徧壇上に張設するを謂う。）」

◎千童羅舞成八溢

「八溢」は、「八佾」と同じ。八人の列を八列並ばせ、六十四人で舞うことで、天子の儀禮のみに許された。師古注に「溢與佾同。佾、列也。（溢は佾と同じ。佾は、列なり。）」また、『論語』八佾の何晏集解に馬融を引いて、「天子八佾、諸侯六、卿大夫四、士二。八人爲列、八八六十四人。」

王先謙は「千童」を誇張とするが、「八佾」もまた實際に八人八列であったわけではなく、多數の舞童が整然と舞うさまを、皇帝の祭祀であることによせてこういったのであろう。

◎合好效歡虞泰一

師古注に「虞與娛同。（虞は娛と同じ。）」

◎九歌畢奏斐然殊

「九歌」は夏王朝の古樂という。『左傳』文公七年の郤缺の語に、「夏書曰、戒之用休、董之用威、勸之以九歌、勿使壞。九功之德皆可歌也、謂之九歌。（夏書に曰く、之を戒むるに休を用い、之を董すに威を用い、之を勸むるに九歌を以てし、壞れしむる勿かれと。九功の德は皆歌うべきなり、之を九歌と謂う。）」『楚辭』離騷には「啓九辯與九歌兮、夏康娛以自縱。（啓は九辯と九歌とをもてし、夏康［啓の子の太康、異說もある］は娛しみて以て自ら縱にす。）」、天問には「啓棘賓商、九辯九歌。（啓は夢に帝に賓し［この句は異讀が多い。いま劉永濟の說による］、九辯九歌あり。）」とあり、禹の子の啓の樂とする。『山海經』大荒西經では「開上三嬪于天、得九辯與九歌以下。（開［＝啓］は上りて三たび天に嬪［＝賓］となり、九辯と九歌とを得て以て下る。）」といい、啓が天上からもたらした樂とする。

◎鳴琴竽琵會軒朱

「軒朱」について、顏師古は「軒朱卽朱軒也。言總合音樂、會於軒檻之前。（軒朱は卽ち朱軒なり。言うこころは音樂を總合し、軒檻の前に會す。）」とし、「軒朱」は朱い軒であり、朱塗りの欄干の前で音樂を奏でたのだと解釋している。一方、王先謙は「軒朱、謂軒轅・朱襄二帝會集也。（軒朱は、軒轅・朱襄二帝の會集するを謂うなり。）」とし、軒轅（黃帝）・朱襄の倂稱とする。ともに樂と關わりの深い古代の王である。

黃帝については、『史記』封禪書に「太帝使素女鼓五十弦瑟、悲、帝禁不止、故破其瑟、爲二十五弦。（太帝素女をして五十弦の瑟を鼓せしむるに、悲しくして、帝禁ずるも止まず。故に其の瑟を破りて二十五弦と爲す。）」という話がある。この話は『史記』一二孝武本紀・『漢書』郊祀志上にも引くが、『史記』孝武本紀索隱・正義、『漢書』師古注ともに、太帝（泰帝）は太昊（伏羲）とする。ただ、『世本』（『通典』一四四所引）には「黃帝使素女鼓瑟、哀不自勝、乃破爲二十五絃。（黃帝　素女をして瑟を鼓さしむるに、哀しみて自ら勝えず、乃ち破りて二十五絃と爲す。）」とあるほか、黃帝と樂との結びつきは『韓非子』十過などにみえることから、二十五絃の瑟は黃帝と結びつけられていたと見てよい（『漢書』郊祀志王先謙補注參照）。

朱襄については、『呂氏春秋』古樂に「昔古朱襄氏治天下也、多風而陽氣蓄積、萬物散解、果實不成。故士達作爲五弦瑟、以來陰氣、以定羣生。（昔古朱襄氏の天下を治むるや、風多くして陽氣蓄積し、萬物散解して、果實成らず。故に士達　五弦の瑟を作爲し、以て陰氣を來らしめ、以て羣生を定む。）」という傳說がある。

なお王先謙も指摘するように、『南齊書』一一樂志に載せる北郊歌辭「隸幽之樂」に「篚冪周序、軒朱凝會。（篚冪　周く序べ、軒朱　凝會す。）」というのは、この句を承けたものであろう。さらに、時代が下るが、南宋の「高宗郊祀前朝享太廟三十首（高宗前朝を郊祀し太廟に享く三十首）」（『宋史』一三四樂志九）第六首に「騰歌臚歡、會于軒朱。（歌を騰げ歡びを臚ね、軒朱を會す。）」、「虞主回京四首」（『宋史』一四〇樂志一五）第四首に「帝德協唐

虞、九歌畢奏斐然殊、會軒朱。（帝德は唐虞に協い、九歌畢く奏して斐然として殊たり、軒朱を會す。）」というのも、明らかにここを意識した表現であり、盛大に音樂を奏するさまをいう。以上を總合し、先謙説をとった。

◎瑤磬金鼓　靈其有喜

「瑤」は、玉の名。「磬」は、「へ」の字型をした大小の石材や金屬片をつり下げて打ち鳴らす樂器。師古注に「瑤、美玉名、以爲磬也。（瑤、美玉の名、以て磬を爲るなり。）」

◎百官濟濟　各敬厥事

「濟濟」は『詩經』で九篇に用いられるが、うち八篇は雅・頌で、「濟濟多士」が三例、「濟濟蹌蹌」「蹌蹌濟濟」が各一例である。士大夫の威儀を表す用例が多い。『禮記』曲禮下にも「天子穆穆、諸侯皇皇、大夫濟濟、士蹌蹌。」という。

・大雅・文王「濟濟多士、文王以寧。（濟濟たる多士、文王以て寧んず。）」［傳：濟濟、多威儀也。（濟濟は威儀多きなり。）］

・大雅・公劉「篤公劉、于京斯依。蹌蹌濟濟、俾筵俾几。（篤公劉、京に于いて斯に依る。蹌蹌濟濟として、筵せしめ几せしむ。）」［箋：蹌蹌濟濟、士大夫之威儀也。］

官本に引く北宋の宋祁の校語に、「邵本厥作其。（邵本は「厥」、「其」に作る。）」ところが明の南監本に擧げる宋祁の參照した諸本に「邵本」にあたるものはなく、南宋の慶元年間（一一九五―一二〇〇）に建安の劉之問が、宋祁本に基づき他の一四家と校合したうちに、「邵文伯本」が含まれる。何らかの混亂があると思われる。

◎盛牲實俎進聞膏

師古は「言以牲實俎、以蕭焫脂、則其芬馨、達於神所。故曰、盛牲實俎進聞膏。（言うこころは牲を以て俎を實たし、蕭を以て脂を焫かば、則ち其の芬馨　神所に達すなり。故に「牲を盛り俎を實たし進めて膏を聞かしむ」と曰う。）」と説く。

◎神奄留　臨須搖

「奄留」は「淹留」と同じ。師古注に「奄讀曰淹。（奄は讀みて淹と曰う。）」じっととどまるさま。『楚辭』にしばしばみられ、離騷に「時繽紛其變易兮、又何可以淹留。（時は繽紛として其れ變易す、又た何ぞ以て淹留すべき。）」、九辯に「時亹亹而過中兮、蹇淹留而無成。（時は亹亹として中ばを過ぐるに、蹇淹留して成す無し。）」、招隱士に「猨狖群嘯兮虎豹嗥、攀援桂枝兮聊淹留。（猨狖群れ嘯きて虎豹嗥え、桂枝を攀援して聊か淹留す。）」などの例がある。

「須搖」は「須臾」と同じ。晉灼注に「須搖、須臾也。」錢大昭は、「搖臾聲相近。（搖・臾は、聲　相近し。）」と指摘する。「須臾」は母音を同じくする疊韻の語。『禮記』中庸「道也者不可須臾離也。（道なる者は須臾として離るべからざるなり。）」のように、短い時間を示すのが最も普通の用法だが、『儀禮』燕禮「寡君有不腆之酒、以請吾子之與寡君須臾焉。（寡君に腆ならざるの酒有り、以て吾子の寡君と須臾にせんことを請う。）」のよう

に、ゆったりくつろぐさまを示す場合もある。『楚辭』離騷「折若木以拂日兮、聊逍遙以相羊。（若木を折りて以て日を拂い、聊か逍遙して以て相羊す。）」の下の句を、『文選』三二で「聊須臾以相羊」に作るのも、「須臾」が「逍遙」と同様、ゆったりしたさまを示すことの證左であろう。ここも神靈がくつろぐさまを表すと考えられる。ただし、「須臾」が安樂のさまを示す場合も、それらは永く續くものとしてとらえられてはいないようであり、短い時間を示す用法と全く無緣とも言い切れない。

ここでは三言の二句が、前後の七言句の中に插入されているが、王先謙はこの點について、「此留下當有兮字、而班氏刪之。（此の「留」の下に當に「兮」字有るべし、而るに班氏之を刪す。）」という。本來「神奄留兮臨須搖」という七言句であったものが、班固によって「兮」字が削られて三言二句になったものとするのであり、先謙はさらに同樣の例として「天馬歌」と司馬相如傳を擧げる。「天馬歌」は《天馬》（第十、下文參照）。司馬相如傳というのは王先謙の思い違いで、賈誼傳所收の「鵩鳥賦」を擧げるべきである。この賦は、『史記』八四屈原賈生列傳に引かれる形では「〇〇〇〇兮、〇〇〇〇」となっているのに對し、『漢書』四八賈誼傳の引用では「兮」字が省かれ、四言體となっている。

◎長麗前掞光燿明

「長麗」は想像上の靈妙な鳥。孟康は、「欲令神宿留。言日雖暮、長更星［官本は「長庚星」に作る］在前扶助、常有光明也。掞或作扶。（神をして宿留させしめんと欲す。言うこころは日暮ると雖も、長更星　前に在りて扶助し、常に光明有るなり。「掞」或いは「扶」に作る。）」といい、「長麗」を長庚星（宵の明星。宵の口に西の空に輝く金星。）とし、「掞」は「扶」とするテキストに從って扶助の意で解する。しかし晉灼は「掞卽光炎字也。」とし、臣瓚は「長麗、靈鳥也。故相如賦曰、前長麗而後喬皇。舊說云、鸞也。張衡思玄賦亦曰、前長麗使拂羽。（長麗、靈鳥なり。故に相如賦に曰く、「長麗を前にし喬皇を後にす」と。舊說に云う、鸞なりと。張衡「思玄賦」にも亦た曰く、「長麗を前にして羽を拂わしむ」と。）」として、靈鳥が眼前に現れまばゆい光を放つさまと解する。師古も「晉瓚二說是也。（晉・瓚の二說は是なり。）麗音離。掞音豔。」といい、後說を支持する。

臣瓚の擧げる「相如賦」は、『漢書』五七下司馬相如傳下に引く「大人賦」に「左玄冥而右黔雷兮、前長離而後喬皇。」（『史記』一一七司馬相如列傳は「陸離」に作る）と、張衡「思玄賦」は『文選』一五に「前長離使拂羽兮、後委衡乎玄冥。」とみえる。ただし通行本ではともに「長麗」を「長離」に作る。

◎寒暑不忒況皇章

「寒暑不忒」は、寒暖の變化が順調であること。臣瓚注に「忒、差也。寒暑不差、言陰陽和也。（忒は、差なり。「寒暑差わず」とは、陰陽和するを言うなり。）」「況皇章」は、天より皇帝に自然の調和が賜られ、帝德が明らかにされること。晉灼注に「況、賜也。皇、君也。章、明也。」、臣瓚注に「以此賜君、章賢德也。（此を以て君に賜い、賢德を章らかにするなり。）」

なお晉灼は、「言長更星終始不改其光、神永以此明賜君也。（言うこころは長更星　終始其の光を改めず、神は永く此の明を以て君に賜うなり。）」といい、「寒暑不忒」を宵の明星の輝きが季節を問わず不變であるさまをいうと解するが、顔師古はこれを退け「瓚説是也。」という。

◎展詩應律鋗玉鳴

「展詩」は、詩を誦すること。王先謙は「展謂展誦之。（展は之を展誦するを謂う。）」という。『楚辭』九歌・東君に「翾飛兮翠曾、展詩兮會舞。（翾飛して翠曾し、詩を展べて會舞す。）」という例がある。

「鋗」は、玉の鳴る音。晉灼注に「鋗、鳴玉聲也。」、師古注に「鋗（ケン）、音火玄反。」

◎函宮吐角激徵清　發梁揚羽申以商

宮・商・角・徵・羽という五聲（五音）の音名を詠み込んで、音樂が奏される様子を描く。「發梁」について、晉灼は「下有梁黄鼓員四人、似新造音樂者姓名也。（下に「梁黄鼓員四人」有り、新たに音樂を造る者の姓名に似たるなり。）」といい、禮樂志の下文にみえる樂師の記事と結びつけ、樂師の名稱と解釋しているようである。これに對し師古は「晉説非也。自函宮吐角以下、總言五聲之備耳。申、重也。發梁、歌聲繞梁也。函與含同。（晉説非なり。「函宮吐角」より以下、總て五聲の備わるを言うのみ。申は、重なり。「發梁」は、歌聲の梁を繞るなり。函は含と同じ。）」とし、「發梁」は音樂が建物に響き渡るさまをいうとする。

漢郊祀歌十九章譯注（横山・西川・谷口）

◎造茲新音永久長

官本は「久」を「缺」に作り、宋祁を引いて「缺當作久。」という。

◎聲氣遠條鳳鳥鵜

師古注に「條、達也。鵜、古翔字也。」なお「遠條」は、『詩經』唐風・椒聊に「椒聊且、遠條且。」（「且」は助詞）という例があり、毛傳に「條、長也。」という。

◎神夕奄虞蓋孔享

師古注に「虞、樂也。蓋、語辭也。孔、甚也。」

◎丞相匡衡奏罷「黼繡周張」、更定詩曰「肅若舊典。」

師古注に「肅、敬也。若、順也。」

「黼」は舊本では「黻」に作ったが、上文と合わない。官本は「黼」に作り、王先謙もそれに贊成する。

この一文がかつては誤って次の《日出入》（第九）の冒頭におかれていたことは、《惟泰元》（第七）參照。

【餘説】郊祀歌の雜言體について

これまでの章が三言または四言の齊言體であったのに對し、この《天地》以降、長短句の錯綜した章が續く。王先謙は、『南齊書』一一樂志に漢の郊廟歌辭の特色を説いて「又尋漢世歌篇、多少無定、皆稱事立文、並多八句、然後轉韻。時有兩三韻而轉、其例甚寡。（又漢世の歌篇を尋ぬるに、多少　定まり無く、皆　事に稱いて文を立て、並びに八句にして、然る後に轉韻すること多

し。時に兩三韻にして轉ずる有るも、其の例は甚だ寡し。)」(永明二年の尚書殿中曹の上奏)というのについて、これ以下の章を意識したものだろうという。また『隋書』一三音樂志上に「武帝裁音律之響、定郊丘之祭、頗雜謳謠、非全雅什。(武帝　音律の響きを裁き、郊丘の祭を定むるに、頗る謳謠を雜じえ、全く雅什なるには非ず。)」と、武帝の郊祀歌における俗樂の要素を指摘するのも、これら長短句の錯綜したものを指すと想定している。

《日出入》(第九)

日出入安窮　　日の出入　安んぞ窮まらんや
時世不與人同　　時世は人と同じからず
故春非我春　　故に春は我が春に非ず
夏非我夏　　夏は我が夏に非ず
秋非我秋　　秋は我が秋に非ず
冬非我冬　　冬は我が冬に非ず
泊如四海之池　　泊たること四海の池の如く
徧觀是邪謂何　　徧く觀て是や謂何せん
吾知所樂　　吾　樂しむ所を知る
獨樂六龍　　獨り六龍を樂しむ
六龍之調　　六龍の調べ
使我心若　　我が心をして若わしむ
訾黃其何不徠下　　訾黃　其れ何ぞ徠り下らざる

日出入九

【押　韻】

窮―冬部、同―東部、冬―冬部、龍―東部(冬東合韻)　池・何―歌部　若―鐸部、下―魚部(鐸魚合韻)

＊「若」は「兩漢詩文韻譜」では「苦」に作り、魚部の韻字とするが、『漢書』のテキストはもとより、注釋もすべて「若」で解釋しており、鐸魚合韻とみるべきである。

【通　釋】

太陽が昇り沈む循環は絶えることがあるだろうか
時の流れは人生と同じではない
ゆえに春は私の春ではなく
夏は私の夏ではなく
秋は私の秋ではなく
冬は私の冬ではない
時の巡りはゆったりとして四海のようで
それを見渡すにつけ人生の短さをどうしたらよかろう
私は自らの樂しみごとを知っている

ただ六龍を樂しむ
六龍の行く調子に　私は心惹かれる
乘黄よ　なぜ降りてこないのか

【注　釋】

◎日出入安窮　時世不與人同

太陽の循環が無限であるのと對比して、人の壽命の有限を嘆く。晉灼注に「日月無窮、而人命有終、世長而壽短。（日月は窮り無くして、而れども人命には終り有り、世は長く壽は短し。）」という。

王先謙は『漢書』郊祀志上の「天子始郊拜泰一。朝朝日、夕夕月、則揖。（天子始めて郊して泰一を拜す。朝に日に朝し、夕に月に夕し、則ち揖す。）」を引き、この《日出入》は太陽神を祀るための歌であると説く。

◎故春非我春　夏非我夏　秋非我秋　冬非我冬

前の二句の、四季の巡りに終りはないが、人の壽命は短いという內容をうけ、有限の人生における四季と、宇宙の無限の營みとしての四季とは同じではない、と解釋した。王先謙は「言日所歷四時無紀極、而人壽不過百年、無以齊之。（言うこころは日の歷する所の四時に紀極無く、而れども人壽は百年を過ぎず、以て之を齊しくする無し。）」という。

◎泊如四海之池　徧觀是邪謂何

「泊」は、水のゆったりとしたさま。師古注に「泊、水貌也。音步各反、又音魄（ハク）。」また、司馬相如「天子遊獵賦（子虛賦）」（『漢書』司馬相如傳）に、「於是楚王乃登陽雲之臺、泊乎無爲、澹乎自持。（是に於いて楚王乃ち陽雲の臺に登り、泊乎として爲す無し、澹乎として自ら持す。）」、師古注に「泊、澹、皆安靜意也。」（『文選』は「泊」を「怕」に作る）

「泊」は、『楚辭』では九辯に「泊莽莽」の形で二例現れ、水の形容ではないが、廣大な樣子を表す。「願徼幸而有待兮、泊莽莽與壅草同死。（幸を徼めて待有らんことを願えども、泊莽莽として壅草と同じく死せん。）」、「蹇充倔而無端兮、泊莽莽而無垠。（蹇（あ）　充倔して端無し、泊莽莽として垠無し。）」

「如」は、ここでは比喩の用法とみて、上に述べられた永遠無限の時間を、「四海」という廣大無邊の空間にたとえたものと解した。ただし、これを接尾辭として、「泊如たる（ゆったりとした）四海」と解することもできよう。「泊如」の用例としては、やや時代が下るが、『漢書』八七下揚雄傳下に「時雄方草太玄、有以自守、泊如也。（時に雄　方に太玄を草し、以て自ら守る有り、泊如たり。）」とある。なお王先謙は、「日出入四海、徧觀此世。（日　四海に出入し、徧く此の世を觀る。）」といい、この句以下の主體を太陽と解釋している。その場合、「如」は動詞として、「泊として四海の池を如（ゆ）く」と理解されているとも考えられる。

「四海之池」は、「四海」と同義。「池」が「海」を表す例は、『史記』一二七日者列傳「地不足東南、以海爲池。（地は東南に

足らず、海を以て池と爲す。)」、『漢書』五一枚乘傳「游曲臺、臨上路、不如朝夕之池。(曲臺に游び、上路に臨むは、朝夕の池に如かず。)」がある。この「池」は韻の關係上付け加えられたものか。官本考證に引く張照は、四海が太陽、池が人の比喩だとするが、王先謙は否定している。

「徧觀是邪謂何」は、人が廣大な海に代表される無窮の世界を見渡し、自らの命の短さを顧みてどうしたらいいのか、と嘆く趣旨。晉灼注に「言人壽不能安固如四海、徧觀是、乃知命甚促。謂何、當如之何也。(言うこころは人壽　安固たること四海の如くなること能わず、是を徧觀すれば、乃ち命の甚だ促たるを知る。謂何とは、當に之を如何すべきなり。)」という。一方、張照は、「日行於天、出東入西、徧觀居此世者、其謂之何。作問之辭、以起下文欲仙之意。(日　天を行き、東より出で西に入る、徧く此の世に居る者を觀るも、其れ之を謂何せん。問いを作すの辭、以て下文の仙を欲するの意を起こす。)」といい、太陽が海を渡る途上でこの世の様子を見て問いかけたものとする。この二句からは換韻しており、主體が「人」から「太陽」へ變わることも考えられるが、ここでは人の立場から生の短さを嘆き、仙を求める下句へと續くと考える。

◎吾知所樂　獨樂六龍　六龍之調　使我心若

「六龍」とは六頭立ての龍およびそれが牽く車のこと。應劭注に「易曰、時乘六龍、以御天。(易に曰く、時に六龍に乘り、以て天を御す。)[『周易』乾の彖辭]」とあり、「六龍」に乘って天上を巡ることが述べられる。また『初學記』一所引『淮南子』に「爰止羲和、爰息六螭、是謂懸車。(爰に羲和を止め、爰に六螭を息わす、是れ懸車と謂う。)」というが、「羲和」は太陽の御者、「螭」は龍の類であり、これも天上を行く者が六頭の龍を操るという傳承である(ただし現行本『淮南子』天文では「爰止其女、爰息其馬」に作る)。

「若」は良いと思う、滿足して樂しむこと。『爾雅』釋詁上に「若、善也。」『春秋左氏傳』宣公三年に「故民入川澤山林、不逢不若。(故に民　川澤山林に入りて、若からざるに逢わず。)」、杜預注に「若、順也。」

四句全體については、應劭注に「武帝願乘六龍、仙而升天、曰、吾所樂獨乘六龍然、御六龍得其調、使我心若。(武帝　六龍に乘り、仙となりて升天せんことを願い、曰く「吾の樂しむ所は獨り六龍に乘るがごとく然り、六龍を御して其の調べを得、我が心をして若わしむ」と。)」といい、武帝が自ら六龍に乘って仙遊することを願ってこう言ったと解する。一方、王先謙によれば、前半二句は前の續きで主體は天界にあり、太陽の御者が「六龍」を操るのを自ら樂しむのであり、後半二句に至って、地上の「我」が御者の腕前の素晴らしさに滿足すると解している。

◎訾黃其何不徠下

「訾黃」は、「乘黃」「飛黃」ともいう。瑞祥とされる、馬に似た動物のこと。應劭注に「訾黃一名乘黃、龍翼而馬身、黃帝乘之而仙。(訾黃は一名乘黃、龍翼にして馬身、黃帝　之に乘りて仙

となる。)」という。師古は「訾、嗟歎之辭也。黄、乘黄也。訾、音咨。」といい、「訾」は嘆聲で、「黄」が「乘黄」を指すとする。

「訾黄」は他に用例が見あたらず、「乘黄」の例は『墨子』非攻下「河出綠圖、地出乘黄。(河　綠圖を出し、地　乘黄を出す。)」、また「飛黄」の例は『淮南子』覽冥「鳳凰翔於庭、麒麟游於郊、青龍進駕、飛黄伏皁。(鳳凰　庭に翔け、麒麟　郊に游び、青龍　駕を進め、飛黄　皁に伏す。)」とある。後者の高誘注には「飛黄、乘黄也、出西方、狀如狐、背上有角、壽千歲。(飛黄は、乘黄なり、西方に出づ、狀は狐の如し、背上に角有り、壽は千歲。)」と説かれる。

「訾黄其何不徠下」について、應劭注には、「武帝意欲得之、曰何不來邪。(武帝　意に之を得んと欲し、曰く「何ぞ來らざるや。」と。)」とあり、武帝が登仙を求めて乘黄に向って到來を呼びかけた言葉とする。顔師古は「歎乘黄不來下也。(乘黄の來り下らざるを嘆くなり。)」といい、乘黄が降りてこないことに對する嘆きの言葉だとする。ここでは、武帝の求仙とは結びつけずに、人を仙界に導く乘黄への呼びかけとして解釋した。

【餘説】古樂府との類似

前半で太陽の運行と對比して述べられる人生短促の嘆きも、後半で龍に託して歌われる仙界への志向も、ともに古樂府のモティーフとしてよく見られるものである。長短の句が錯雜するさまも、樂府との關連を思わせる。「春非我春、夏非我夏、秋非我秋、冬非我冬」という表現は、素朴な繰り返しではあるが、世界の永遠と人生の有限を對比する發想は『詩經』には見られないものである。一方、『楚辭』に比べると言葉遣いが卑近で、民間の諺に類するようにも感じられる。語彙のレベルでは、古樂府や漢鏡銘文などと直接の關連を見いだすことはできないが、樂府詩の成立を考えるにあたって注目すべき作品であろう。

《天馬》(第十)

【一】

太一況　天馬下
霑赤汗　沫流赭
志俶儻　精權奇
籥浮雲　晻上馳
體容與　迣萬里
今安匹　龍爲友

太一況(たまわ)りて　天馬下る
赤汗に霑い　流赭に沫(すす)ぐ
志は俶儻たり　精は權奇たり
浮雲を籥(ふ)み　晻として上馳す
體は容與として　萬里を迣(こ)ゆ
今安くにか匹たらんや　龍を友と爲す

元狩三年馬生渥洼水中作

元狩三年、馬　渥洼水中に生じて作る。

【押　韻】

下・赭―魚部　奇・馳―歌部　里・友―之部

【通　釋】

太一神の賜られた　天馬が降りてくる
血のように赤い汗にその身をうるおしながら
志は高く　たましいは非凡であり
浮雲を踏み　にわかに驅け上がる
その姿はゆったりとして　萬里を超えてゆく
この世に匹敵するものはなく　龍を友とする

【注　釋】

◎太一況　天馬下

『史記』一二三大宛列傳に「多善馬、馬汗血、其先天馬子也。（善馬多く、馬は汗血にて、其の先は天馬子なり。）」といい、西域の馬は血のように赤い汗を流し、天馬の子孫であるとする傳承があった。同じく大宛列傳には「初、天子發書易、云神馬當從西北來。得烏孫馬好、名曰天馬。及得大宛汗血馬、益莊、更名烏孫馬曰西極、名大宛馬曰天馬云。（初め、天子　易書［會注考證の說により改む］を發（ひら）くに、云えらく「神馬當に西北より來るべし」と。烏孫の馬の好きを得、名づけて「天馬」と曰う。大宛の汗血馬を得るに及び、益ます莊にて、更めて烏孫の馬に名づけて「西極」と曰い、大宛の馬に名づけて「天馬」と曰うと云えり。）」ともあり、西域から得た馬に「天馬」と名付けた例も確認できる。

「太一（泰一）」は、《惟泰元》（第七）に既出。「況」は、賜う。顏師古注に「言此天馬乃太一所賜、故來下也。（言うこころは此の天馬　乃ち太一の賜う所、故に來たり下るなり。）」

なお『史記』二四樂書には、「太一之歌」として「太一貢兮天馬下、霑赤汗兮沫流赭。騁容與兮跇萬里、今安匹兮龍與友。」という歌詞を載せる。沈欽韓は、『史記』は概略を載せたとする。なお、『史記』にあった「兮」字が『漢書』に無いことに關しては、《天地》（第八）參照。

◎霑赤汗　沫流赭

「沫」字について、李奇注は「沫音靧面之靧。（沫、音は靧面の靧（カイ）。）」、晉灼注は「沫、古靧字也。」といい、ともに「あらう」の意とするが、應劭注は「大宛馬汗血霑濡也、流沫如赭也。（大宛馬は汗血霑濡なり、流沫は赭の如きなり。）」とし、「しぶき」すなわち「沫」字として解しており、『史記』樂書も「沫」に作る。顏師古は「沫・沫、兩通。沫者、言被面如頮也、字從水傍午未之未、音呼內反。沫者、言汗流沫出也、字從水傍本末之末、音亦如之。然今書字多作沫面之沫也。（沫・沫、兩つながら通ず。沫は、面を被うこと頮の如きを言うなり、字は水に從い午未の未を傍とす、音は呼內の反。沫は、汗流れ沫（しぶき）出づるを言うなり、字は水に從い本末の末を傍とす、音亦た之の如し。然れども今書の字　多く沫面の沫に作るなり。）」といい、「沫」「沫」いずれでも意味は通じるとし、また轉寫の過程において文字が紛れていた

ことを指摘する。ここでは『漢書』のテキスト及び李奇・晉灼注に従って解釋した。

なお「沬」「沫」の混用は、他にもしばしば見られる。『左傳』に見える人名曹劌は、『史記』八六刺客列傳では諸本とも「曹沬」に作るが、音からすれば曹沬に作るべきところである。また、蜀の川の名である沬水は、『說文解字』一一上水部に「沬、水。出蜀西南徼外、東南入江。（沬は、水なり。蜀の西南の徼外より出で、東南して江に入る。）」とあり、「沬」に作るのが本來であるが、『漢書』五七下司馬相如傳下などでは「沫水」とする。

◎志俶儻　精權奇

前の一聯が天馬の外見の特徴を述べているのに對し、ここで述べるのは天馬の內面的特徴である。「志俶儻」「精權奇」ともに精神性の非凡であることを表している。

「俶儻」は、非凡であるさま。『史記』八三魯仲連鄒陽列傳に「好奇偉俶儻之畫策、而不肯仕宦任職、好持高節。（奇偉俶儻の畫策を好み、而るに仕宦任職を肯ぜず、高節を持するを好む。）」「權奇」は他に用例を見ないが、同じ方向の語であろう。右に引いた『史記』の例でも「奇偉俶儻」といい、「奇」と「俶儻」がともに用いられていた。ちなみに「權」と「奇」は子音が共通する双聲の關係。

◎籲浮雲　晻上馳

天より下ってきた天馬が、ふたたび天へと驅け上がる様子である。蘇林注に「籲音躡。言天馬上躡浮雲也。（籲、音は躡。言うこころは天馬上りて浮雲を躡むなり。）」

「晻」について顏師古は「晻音烏感反。言晻然而上馳。（晻、音は烏感の反。晻然として上馳するを言う。）」というにとどまる。王先謙は、「晻」の本義である「くらい」という解釋と、「奄」の假借とみて「にわかに」とする解釋とを示し、いずれでも通ずるとする。前者の根據は、『說文解字』七上日部に「晻、不明也。」後者の例は、『隸釋』六「敦煌長史武斑碑」に「昊天上帝降茲鞠凶、晻忽徂逝□□□□（昊天の上帝　茲の鞠凶を降す、晻忽として徂逝し［以下闕字］）」とあり、「奄」については、『方言』二に「奄、遽也。」とある。ここでは後者によった。なお《朝隴首》（第十七）で、「掩回轅、鬣長馳。（掩ちに轅を回らし　鬣として長く馳す。）」と、「掩」が「にわかに」の意で用いられるのも參考になる。

「浮雲」は『詩經』には現れない一方、『楚辭』にはしばしば現れる。中でも「遠遊」の「載營魄而登霞兮、掩浮雲而上征。（營魄を載せて霞に登り、浮雲を掩めて上征す。）」は、雲を足場として驅け上がろうとする様子がこの箇所と共通している。

◎體容與　迣萬里

ここでの「體」は體そのものというより天に昇る様子を指していると解釋すべきであろう。「容與」はゆったりとした様子。『楚辭』に頻出する。《練時日》（第一）に既出。

「迣」字について、孟康は「迣音逝。」、如淳は「迣、超踰也。」、晉灼は「古迣字。」としている。これに對し顏師古は「孟音非也。

泄讀與厲同、言能厲渡萬里也。（孟音は非なり。泄は讀みて厲（レイ）と同じく、言うこころは能く萬里を厲渡するなり。）」という。晉灼の說は、『說文解字』二上辵部に「泄、迲也。」とあるのに近いが、『說文』にはまた「迲、遮也。」ともいい、錢大昕が指摘するように、「さえぎる」の意はこの文脈には當てはまりにくいであろう。錢は、『大戴禮記』夏小正の九月の條にいう「遰鴻雁。遰、往也。」の「遰（テイ）」とし、孟・如二說が近いという。孟康の「ゆく」、如淳の「こえる」、顏師古の「わたる」という語釋はともに同じ方向の理解である。

◎今安匹　龍爲友

「匹」は匹敵の意。顏師古は「言今更無與匹者、唯龍可爲之友耳。（言うこころは今更に與に匹する者無く、唯だ龍のみ之が友と爲すべきのみ。）」といい、天馬と對等なものは同じく靈妙な存在である龍だけだということである。『周禮』夏官・庾人に「馬八尺以上爲龍。」とあり、優れた馬はしばしば龍になぞらえられる。

◎元狩三年馬生渥洼水中作

『漢書』武帝紀元狩三年（前一二〇）條にはこのような記事はなく、元鼎四年（前一一三）に「六月、得寶鼎后土祠旁。秋、馬生渥洼水中。作寶鼎・天馬之歌。（六月、寶鼎を后土祠の旁にて得。秋、馬　渥洼水中に生ず。寶鼎・天馬の歌を作る。）」という記述がある。

【二】

天馬徠　從西極　　天馬徠れり　西の極より
涉流沙　九夷服　　流沙を涉り　九夷は服す
天馬徠　出泉水　　天馬徠れり　泉水に出でて
虎脊兩　化若鬼　　虎の脊兩つ　化すること鬼の若し
天馬徠　歷無草　　天馬徠れり　無草を歷（へ）
徑千里　循東道　　千里を徑（わた）り　東道に循（よ）る
天馬徠　執徐時　　天馬徠れり　執徐の時
將搖擧　誰與期　　將に搖擧せんとす　誰か與期せん
天馬徠　開遠門　　天馬徠れり　遠門を開き
竦予身　逝昆侖　　予が身を竦（のぼ）らせ　昆侖に逝く
天馬徠　龍之媒　　天馬徠れり　龍の媒（なかだち）
游閶闔　觀玉臺　　閶闔に游び　玉臺を觀る

太初四年誅宛王獲宛馬作

太初四年、宛王を誅し宛馬を獲て作る。

天馬十

【押　韻】

極・服―職部　水・鬼―脂部　草・道―幽部　時・期―之部
門・侖―眞部　媒・臺―之部

【通　釋】

天馬がやって來る　西の果てより
流沙の地を越えて　異民族は服屬する
天馬がやって來る　泉より生じて
虎の背のような模様が身體の兩側にあり　變化することは鬼神のよう
天馬がやって來る　草も生えぬ地をこえ
千里を眞っ直ぐ突き進み　東への道を走る
天馬がやって來る　辰の時
今にも驅け上がろうとしている　その動きを誰が豫想できようか
天馬がやって來る　遠き門を開き
わが身を高くかかげ　崑崙山をゆく
天馬がやって來る　龍の導き手
天門にあそび　天帝のおわす玉臺を觀る

【注　釋】

◎天馬徠　從西極　涉流沙　九夷服

「徠」は「來」と同じ。師古注に「徠、古往來字也。」

流沙は西方邊境の地名。『國語』齊語に「懸車束馬、踰太行與辟耳之谿拘夏、西服流沙・西吳。（車を懸け馬を束ね、太行と辟耳の谿拘夏とを踰え、西のかた流沙・西吳を服せしむ。）」とある。また「流れる沙」という名のとおり、過酷な砂漠地帶という意を含む。『楚辭』招魂に「魂兮歸來、西方之害、流沙千里些。（魂よ歸り來れ、西方の害、流沙は千里たり。）」とある。

顏師古は「言九夷皆服、故此馬遠來也。（言うこころは九夷皆服し、故に此の馬遠來するなり。）」といい、異民族を征服したために天馬が到來したとして解釋している。

◎天馬徠　出泉水　虎脊兩　化若鬼

「出泉水」については、前の歌（「太一況、天馬下」）にも「馬渥洼水中に生ず」との注記があったように、天馬は水から生じると考えられていたようだ。

「虎脊兩」は應劭注に「馬毛色如虎脊者有兩也。（馬の毛色　虎脊の如き者　兩つ有るなり。）」といい、虎のような筋模様が身體の兩側にあると解釋した。あるいは、虎のように二色混じっているとも解しうる。なお、應劭注の「者」字は、官本が補ったもの。

「化若鬼」は、天馬が一種の神獸であり、その姿を變化させることもできることをいう。顏師古注に「言其變化若鬼神。（言うこころは其の變化すること鬼神の若し。）」

◎天馬徠　歷無草　徑千里　循東道

張晏注に「馬從西而來東也。（馬　西より東に來るなり。）」

顏師古注に「言馬從西來、經行磧鹵之地無草者、凡千里而至東道。（言うこころは馬　西より來り、磧鹵の地の無草なる者を經

行し、凡そ千里にして東道に至る。)」

師古注の「凡」は、もと「幾」に作ったが、官本では改め、王先謙もそれを支持する。

◎天馬徠　執徐時

天馬を得たのが辰年であったことをいう。應劭注に「太歲在辰曰執徐。言得天馬時歲在辰也。(太歲　辰に在るを執徐と曰う。言うこころは天馬を得し時　歲　辰に在るなり。)」「(太歲)在辰曰執徐」は、『漢書』二六天文志の文。「太歲」は、十二年で天の黄道を一周すると考えられた天體。天文志の晉灼注に「太歲……十二歲而周天。(太歲……十二歲にして天を周る。)」とある。『左傳』『國語』などでは、歲星(木星)が十二年で天を一周することを利用して年を表す(歲星紀年法)。ただその動きは黄道を逆行することになるため、前漢頃からは、實際の木星の對稱點に太歲という架空の天體を想定し、それを紀年に用いた(太歲紀年法)。この太歲が辰の方位にある年を執徐という。ちなみにこの歌が作られた太初四年は庚辰にあたる。

孟康は天馬が東へ向かっていること、また龍と結びつけられることから、『易』の記述を踏まえて「東方震爲龍、又青龍宿。言以其方來也。(東方震は龍たり、又た青龍宿なり。其の方を以て來るを言うなり。)」と注しているものの、附會であろう。顏師古も「應說是也。」という。

◎將搖擧　誰與期

天馬が天上へ驅け上がろうとしている樣である。如淳は「遙、遠也。搖或作遙。(遙、遠なり。搖は或いは遙に作る。)」というが、これに對し顏師古は「如說非也。言當奮搖高擧、不可與期也。(如說は非なり。言うこころは奮搖高擧するに當たりて、與期すべからざるなり。)」とする。ここでは師古注を取った。

「誰與期」については『楚辭』哀時命に「往者不可扳援兮、徠者不可與期。(往者は扳援すべからず、徠者は與期すべからず。)」という用例がある。

◎天馬徠　開遠門　竦予身　逝昆侖

天へと驅け上がった天馬が、天に至る門を開く。

應劭は「言天馬雖去人遠、當豫開門以待之也。(言うこころは天馬　人を去ること遠しと雖も、當に豫め門を開き以て之を待つべきなり。)」として、天馬は人の世とは一線を畫した存在でありつつも人が天へ上ってくるのを待っているのだと解釋している。一方で文穎は武帝が仙界にあこがれていたことと絡め、「言武帝好仙、常庶幾天馬來、當乘之往發昆侖也。(言うこころは武帝仙を好み、常に庶幾(こいねが)わくは　天馬來りて、當に之に乘りて往きて昆侖に發すべしと。)」と解釋し、顏師古も「文說是也。」という。

◎天馬徠　龍之媒

天馬が龍と結びつけられているのは、前の歌と同樣。應劭は「言天馬者乃神龍之類、今天馬已來、此龍必至之效也。(言うこころは天馬なる者乃ち神龍の類にて、今　天馬已に來るは、此れ龍必ず至るの效なり。)」として、天馬を龍が現れる豫兆と解釋する。

◎游閶闔　觀玉臺

「閶闔」は、天界の門。應劭注に「閶闔、天門。玉臺、上帝之所居。（閶闔は、天門なり。玉臺は、上帝の居る所なり。）」『楚辭』離騷に「吾令帝閽開關兮、倚閶闔而望予。（吾　帝をして關を閽開せしむるも、閶闔に倚りて予を望む。）」、遠遊に「命天閽其開關兮、排閶闔而望予。（天閽に命じて其れ關を開かしむれば、閶闔を排して予を望む。）」といった用例がある。ちなみに『史記』二五律書には「閶闔風居西方。（閶闔風は西方に居り。）」といい、西方とも結びつく語である。

◎太初四年誅宛王獲宛馬作

太初四年は、前一〇一年。このときのことは、『漢書』六武帝紀に、「四年春、貳師將軍廣利斬大宛王首、獲汗血馬來。作西極天馬之歌。（〔太初〕四年春、貳師將軍廣利　大宛王の首を斬り、汗血馬を獲て來る。西極天馬の歌を作る。）」とある。

なお『史記』二四樂書には、この歌に關連する次のような話を載せる。

後伐大宛得千里馬。馬名「蒲梢」。次作以爲歌曰、「天馬來兮從西極、經萬里兮歸有德。承靈威兮降外國、涉流沙兮四夷服。」中尉汲黯進曰、「凡王者作樂、上以承祖宗、下以化兆民。今陛下得馬、詩以爲歌、協於宗廟、先帝百姓豈能知其音邪。」上默然不說。丞相公孫弘曰、「黯誹謗聖制、當族。」

後に大宛を伐ち千里馬を得。馬に「蒲梢」と名づく。次ぎて作るに以て歌を爲して曰く、「天馬來れり西の極より、萬里を經て有德に歸す。靈威を承けて外國を降し、流沙を涉りて四夷服す。」と。中尉汲黯進みて曰く、「凡そ王者　樂を作るは、上は以て祖宗を承け、下は以て兆民を化す。今陛下馬を得て、詩　以て歌を爲し、宗廟に協すも、先帝百姓　豈に能く其の音を知らんや。」と。上　默然として說ばず。丞相公孫弘曰く「黯　聖制を誹謗す、當に族すべし。」と。

これについて、王先謙は、歌詞が郊祀歌のものと異なる上に、元狩二年（前一二一）に沒した公孫弘が太初年間の大宛馬の事を知るはずがないとして、後人の附會であることを辯じている。

また『水經注』二河水にも、この歌に關連する後世の傳說を載せる。

城之西南二十許里水西、有馬蹏谷。漢武帝聞大宛有天馬、遣李廣利伐之、始得此馬、有角爲奇。故漢武帝天馬之歌曰、天馬來兮歷無草、逕千里兮循東道。胡馬感北風之思、遂頓羈絕絆、驤首而馳。晨發京城、夕至敦煌、北塞外長鳴而去。因名其處曰候馬亭。

〔廣武〕城の西南二十許里の水の西に、馬蹏谷有り。漢武帝大宛に天馬有るを聞き、李廣利を遣わして之を伐ち、始めて此の馬を得、角有るを奇と爲す。故に漢武帝天馬の歌に曰く、「天馬來りて無草を歷、千里を逕て東道に循る。」と。「胡馬　北風に感ず」（〔古詩十九首〕の語）の思いあり、遂に羈を頓り絆を絕ち、首を驤げて馳す。晨に京城を發し、夕に敦煌に至り、北塞の外に長鳴して去る。因りて其の處に名

づけて候馬亭と曰う。

《天門》（第十一）

天門開　詄蕩蕩　　天門開き　詄として蕩蕩たり
穆並騁　以臨饗　　穆として並び騁せ　以て饗に臨む
光夜燭　德信著　　光は夜に燭らし　德信著わる
靈瀀鴻　長生豫　　靈の瀀く鴻いにして　長生豫らかなり
大朱涂廣　　大いに朱にして涂は廣く
夷石爲堂　　石を夷らにして堂を爲す
飾玉梢以舞歌　　玉梢を飾りて以て舞歌し
體招搖若永望　　體は招搖として永く望むがごとし
星留兪　塞隕光　　星は留めて兪え　塞たすに光を隕とす
照紫幄　珠熉黃　　紫幄を照らし　珠は熉として黃なり
幡比被回集　　幡として被を比べて回り集まり
貳雙飛常羊　　貳雙飛びて常羊たり
月穆穆以金波　　月は穆穆として以て金波のごとく
日華燿以宣明　　日は華燿にして以て宣明す
假清風軋忽　　清風を假りて軋忽たり
激長至重觴　　激しく長く至りて重觴す
神裴回若留放　　神裴回すること留まり放つが若く
殪冀親以肆章　　殪えて冀わくは親しく以て肆ね章らかにせんことを
函蒙祉福常若期　　祉福を函蒙すること常に期するが若く
寂漻上天知厥時　　寂漻たる上天　厥の時を知る
泛泛滇滇從高斿　　泛泛滇滇として高斿に從い
殷勤此路臚所求　　此の路を殷勤して求むる所を臚ぶ
佻正嘉吉弘以昌　　正を佻び吉を嘉し弘く以て昌んなり
休嘉砰隱溢四方　　休嘉は砰隱にして四方に溢る
專精厲意逝九閡　　精を專らにし意を厲げて九閡に逝き
紛云六幕浮大海　　紛云たる六幕　大海に浮かばん

天門十一

【押　韻】

蕩・饗―陽部　著・豫―魚部　堂・望・光・黃・羊・明・觴・章―陽部　期・時―之部　斿・求―幽部　昌・方―陽部　閡・海―之部

師古注に「望、合韻音亡。」といい、去聲の「望」を平聲に讀

み替える。ただし「望」はもともと平聲であり、漢代はもとより唐詩にもその例證は多い。

師古注に「閎、合韻音改、又音亥。」「閎」は『廣韻』では去聲代韻だが、『集韻』には上聲海韻（下改反）をも載せ、師古の「又音」と合う。

【通　釋】

天の門が開かれて　天は廣々と果てしない
神々は謹んで並び來て　祭りの席につく
光が夜の間照り續け　德と信とが顯れる
神の力はさらに大きく　長生を得て心が安らかになる
神の通る道は朱を塗って廣く
石を平らに敷き詰めて堂を建てる
玉を飾った竿を持って舞い歌い
その體はゆらゆらとしてずっと神を待ち望んでいるかのようだ
星は留まって答え　落ちてくる光が一面に滿ちている
光が神を迎える紫の天幕を照らし　珠は黄色に輝く
舞う人の翻って舞うさまは鳥が羽を並べて飛び回り集まって
またたくさんのつがいがゆうゆうと飛ぶようである
月は美しく莊嚴でその輝きは水面に映って金の波になり
太陽は燦燦と輝いて一面を明るくする
神は清らかな風に乘って遙かな道のりを越えてくる
速くやってきて長い間留まって酒杯を重ねる
神はふらふらとさまよって去っていくようでまた留まるようである
神にまみえて近づき自らの氣持ちを陳べて明らかにしたく思う
あまねく幸いを受けることは常に時節通りであり
ひっそりと遠くにある天は祭りの時を知っている
神々が浮かび上がりにぎにぎしく旗を高く掲げてやって來る
行く道を丁寧に案内して求める不老不死のことを陳べる
正しく良きことを樂しみたたえること大いにして盛んであり
幸福は四方に滿ち溢れるほどに知れ渡っている
心と氣持ちを研ぎ澄まして九天の上まで行き
盛んに萬物を生み出す六合　大海に浮かんで仙人を探しに行こう

【注　釋】

◎天門開　詄蕩蕩

「天門」は天の門。神が天界から出るところ。『楚辭』九歌・大司命に「廣開兮天門、紛吾乘兮玄雲。（廣く天門を開き、紛として吾　玄雲に乘る。）」の例があり、『莊子』庚桑楚には「天門者、无有也、萬物出乎无有。（天門なる者は、无有なり、萬物は无有より出づ。）」という。

「詄蕩蕩」は天の茫洋として果てしないさま。師古注に、「詄（テツ）音大結反。」『說文解字』三上言部に「詄、忘也。」また『論語』泰伯「大哉堯之爲君也……蕩蕩乎民無能名焉。（大なるかな堯の君たるや……蕩蕩乎として民能く名づくる無し。）」の皇侃『義

疏』に「蕩蕩、無形無名之稱也。（蕩蕩は、無形無名の稱なり。）」王先謙は「訣蕩蕩」について「天體廣遠、言象俱忘。（天體　廣遠にして、言・象　俱に忘る。）」と説明する。一方舊注では、如淳が「訣讀如迭。訣蕩蕩、天體堅清之狀也。（訣は讀みて迭の如し。訣蕩蕩は、天體堅清の狀なり。）」というがここでは取らなかった。また、小竹武夫『漢書』、狩野直禎・西脇常記『漢書郊祀志』とも、この句を神の出遊のさまと解するが、それもとらない。

「蕩蕩」の用例としては、先に擧げた『論語』のほか、『詩經』大雅・蕩に「蕩蕩上帝、下民之辟。（蕩蕩たる上帝、下民の辟なり。）」、『尙書』洪範に「無偏無黨、王道蕩蕩。（偏り無く黨する無くんば、王道は蕩蕩たり。）」『莊子』天地に「蕩蕩乎、忽然出、勃然動、而萬物從之乎、此謂王德之人。（蕩蕩乎たるかな、忽然として出で、勃然として動き、而も萬物　之に從うか、此れ王德の人と謂う。）」などがあり、通常の人智を越えたものの大いなるさまを形容する語といえる。司馬相如「天子游獵賦（上林賦）」に「蕩蕩兮八川分流、相背而異態。（蕩蕩として八川　分流し、相い背きて態を異にす。）」というのも、川の流れの果てしない廣がりを表す例である。

◎穆並騁　以臨饗

「穆」は恭しい樣。『楚辭』九歌・東皇太一に「吉日兮辰良、穆將愉兮上皇。（吉日にして辰　良し、穆として將に上皇を愉しませんとす。）」、王逸注に「穆、敬也。」

二句全體については師古注に「言神穆然方駕馳騁而臨祠祭。（言うこころは神　穆然として方び駕して馳騁して祠祭に臨む。）」という。

「並馳」の用例では、『楚辭』にしばしば見られる天上遊行の場面に、「離騷」の「屯余車其千乘兮、齊玉軑而並馳。（余が車其れ千乘を屯し、玉軑を齊しくして並び馳す。）」、「遠遊」の「屯余車之萬乘兮、紛溶與而並馳。（余が車の萬乘を屯し、紛溶與として並び馳す。）」などがある。

◎光夜燭　德信著

神の輝かしさは夜の闇をも照らし、神に捧げた人間の德と信とが示されることをいう。師古注に「神光夜照、應誠而來、是德信著明。（神光　夜に照り、誠に應じて來る、是れ德信　著明なり。）」

なお王先謙は、この句を、武帝の封禪に際して夜に光るものが現れたという郊祀志の記事と關連させて解している。【餘說二】參照。

◎靈淩鴻　長生豫

神靈の德はますます大きく、人は長生を得られて安らかになる、という意。師古注に「神靈德澤所浸、溥博無私、其福甚大、故我得長生之道而安豫也。（神靈の德澤の浸す所、溥博　無私にして、其の福　甚だ大なり、故に我　長生の道を得て安豫たるなり。）」とある。ただし「淩」の字を師古は「ひたす」（德澤が及ぶ）と解するが、王先謙の「靈淩鴻者、靈益大也。（「靈淩鴻」なる者は、靈益ます大いなるなり。）」という解釋にここでは從うこととし、

「ようやく」と訓讀した。

なおこの句はもと「靈瀁平而鴻長生豫」に作っていたが、王先謙は顔注に「平」に對する訓詁がないことから「平而」二字を衍字とする。從うべきであろう。

◎大朱涂廣　夷石爲堂

「朱」は朱色で飾ることを表す。「涂」は道のこと。師古注に「涂、道路也。」

「夷」は平らなさま。師古注に「夷、平也。」

二句の解釋について、師古は「言通神之路、飾以朱丹、又甚廣大。平夷密石、累以爲堂。（言うこころは神を通ずるの路、飾るに朱丹を以てし、又た甚だ廣大なり。平夷にして石を密にし、累ねて以て堂を爲す。）」といい、神を迎えるための道路は、朱色で飾られ廣大であり、神を迎える堂は石を敷き詰めて平らにして造られたという。また司馬相如「天子游獵賦（上林賦）」にも「夷㝢築堂、纍臺增成。（㝢を夷らにし堂を築く、臺を纍ねて增成す。）」（「㝢」は山名。）という表現がある。

◎飾玉梢以舞歌　體招搖若永望

「玉梢」は、舞をする人が持つ玉で飾られた竿のこと。師古注に「梢、竿也、舞者所持。玉梢、以玉飾之也。（梢は、竿なり、舞者の持つ所なり。玉梢は、玉を以て之を飾るなり。）梢音所交反。」

「招搖」は搖れ動くさま。「逍遙」と同じ。ここでは舞う人の體がゆらゆらと搖れること。師古注に「招搖、申動之貌。招音韶。」

先謙は「招搖」を郊祀志に見える祭祀に使われたとされる旗《《惟泰元》（第七）「招搖靈旗」の條參照）のこととし、「體招搖」は招搖星が旗に描かれているという意味で、「永望」はその旗を見ることであるという。しかし司馬相如「天子游獵賦（上林賦）」に「招搖乎襄羊、降集乎北紘。（招搖として襄羊、北紘に降集す。）」、同「大人賦」に「掉指橋以偃蹇兮、又旖旎以招搖。（掉いて指橋して以て偃蹇す、又た旖旎として以て招搖たり。）」など、「招搖」を疊韻語として用いた例がある。

「逍遙」という表記であれば、ゆったりとたゆたうさまを示す語としてごく普通に見られるが、『詩經』では鄭風・清人「二矛重喬、河上乎逍遙。（二矛重喬し、河上に逍遙す。）」のほかあと二例ある。また『楚辭』には八例あり、そのうち「離騷」の「折若木以拂日兮、聊逍遙以相羊。（若木を折りて以て日を拂い、聊か逍遙として以て相羊す。）」、九歌・湘君「眴不可兮再得、聊逍遙兮容與。（眴は再び得べからず、聊か逍遙として容與す。）」などは、ここと同樣、神を待ち望む者の行きつ戻りつするさまである。

「永」は長い間。師古注に「永、長也。」

◎星留兪　塞隕光

「兪」は答える。肯定、同意の返答。師古注に「兪、答也。兪音踰。」また『尙書』堯典に「帝曰兪、予聞、如何。（帝曰く「兪り、予も聞けり、如何」と。）」僞孔傳に「兪、然也。」

二句について、師古注に「言衆星留神、答我饗薦、降其光燿、四面充塞也。（言うこころは衆星　神を留め、我が饗薦に答うるに、其の光燿を降し、四面充塞するなり。）」といい、星が神靈を留め、人の祭祀の宴を享けることの返答として光を四方に降らせたと解する。

◎照紫幄　珠煩黄

「紫幄」は神を迎える幄のこと。師古注に「紫幄、饗神之幄也。」祭祀に紫を用いることに關しては、『楚辭』九歌・湘夫人の「蓀壁兮紫壇、罔芳椒兮成堂。（蓀の壁に紫の壇、芳椒を罔しきて堂を成す。）」、同じく河伯の「魚鱗屋兮龍堂、紫貝闕兮朱宮。（魚鱗もて龍堂に屋し、紫貝もて朱宮に闕す。）」、また《天地》（第八）の「爰熙紫壇、思求厥路。」（既出）など隨所に見られる。「幄」は方形の骨組みに沿って垂れ幕を掛けたテントのこと。師古注に「帳上四下而覆曰幄。（帳の上より四もに下りて覆うを幄と曰う。）」

「煩」は黄色いさま。如淳注に「煩音殞（ヰン）、黄貌也。」師古注に「煩音云（ウン）。」

この二句の解釋については師古注に「言光照紫幄、故其珠色煩然而黄也。（言うこころは光　紫幄を照らし、故に其の珠の色煩然として黄なり。）」とするのに從った。

◎幡比狄回集　貳雙飛常羊

「幡比狄回集」は、文穎注の「舞者骨騰肉飛、如鳥之回翅而雙集也。（舞う者　骨騰がり肉飛び、鳥の翅を回らして雙集するが如きなり。）」によって、舞う人の舞うさまを鳥が羽をはばたかせて集まるのに比喩したと解釋する。王先謙は、封禪の祭祀の際、鳥や動物などを放したという『漢書』郊祀志の記事【餘説二】參照）を根據に、この表現を實景とするが、とらなかった。

「常羊」は「逍遙」と同じ疊韻語であり、ゆらゆらゆれるさま。師古注に「常羊、猶逍遙也。」「常羊」という表記は、次の《景星》（第十二）にも見える。上述の「招搖」の條に引く「招搖乎襄羊」（司馬相如「天子遊獵賦」）や「聊逍遙以相羊」（『楚辭』離騷）なども類似の表現と考えられる。

「貳雙」は、鳥に見立てられる舞者が鳥のつがいのようにペアになって踊ることと考える。「貳」は、そのペアが一つにとどまらず多數あるということか。王先謙は、「貳謂不一也。（貳は一ならざるを謂うなり。）」とする。

◎月穆穆以金波　日華燿以宣明

「穆穆」は、『詩經』雅頌で君主の威容を表す語として用いられる。《帝臨》（第二）參照。ここでは、月のゆったりした美しさを形容する語として解した。

「月穆穆以金波」について、師古注に「言月光穆穆、若金之波流也。（言うこころは月光穆穆として、金の波流の若し。）」とあり、美しい月光は金の波が流れるようである、と解釋した。「金波」は月光の形容というより、實景として水面に映った月と解釋することも可能ではないかと考える。

「宣」は周り一帶に。師古注に「宣、徧也。」

先謙はこの二句について「言自夜達旦光景。（夜より旦に達する光景を言う。）」という。祭祀が夜を徹して行われたことは、禮樂志にも、「作十九章之歌、……使童男女七十人俱歌、昏祠至明。（十九章の歌を作り、……童男女七十人をして俱に歌わしめ、昏に祠り明に至る。）」とある。

◎假清風軋忽　激長至重觴

「假」は借りて、～によって。手段を表す。先謙補注に「假、借也。」

「清風」については、『詩經』大雅・烝民に「吉甫作誦、穆如清風。（吉甫　誦を作る、穆として清風の如し。）」とある。また『楚辭』九歌・大司命には「高飛兮安翔、乘清氣兮御陰陽。（高く飛びて安らかに翔け、清氣に乘りて陰陽を御す。）」といい、神が「清氣」に乘るとする。『莊子』逍遙遊に「夫列子御風而行。（夫れ列子は風を御して行く。）」とあるのも想起される。

「軋忽」は遠いさま。師古注に「軋忽、長遠之貌也。」他の用例としては、司馬相如「天子游獵賦（上林賦）」に「於是乎周覽泛觀、瞋盼軋沕、芒芒恍忽、視之無端、察之無崖。（是に於いて周覽泛觀し、瞋盼軋沕、芒芒恍忽、之を視るに端無く、之を察するに崖無し。）」（『漢書』では「軋芴」）とあり、『史記』集解に引く郭璞は「皆不可分貌。」、『漢書』注に引く孟康は「緻密也。」と釋する。賦の原文と照らし合わせると、一つ一つのものが小さくて見分けられないほど遠くにあるさまをいうのであろう。他には、『楚辭』九章・悲回風の「軋洋洋之無從兮、馳委移之焉止。（軋洋洋として從う無く、馳せて委移として焉くにか止まらん。）」が、「軋」一字のみではあるが、ここと類似した表現である。

「重觴」は何度も杯をやりとりすること。師古注に「重觴、謂累獻也。（重觴は、獻を累ぬるを謂うなり。）」

二句の解釋について、先謙は「神借清風而來、其至激疾而長、若重疊觴饗也。（神　清風に借りて來り、其の至るや激疾にして長し、觴饗を重疊するがごときなり。）」といい、神が清い風に乘ってやってきて、そのやってくる様子が早く、長く、それは宴で酒を酌み交わすようである、という。「激長」は理解しづらいが、速くやってきて長くとどまると譯出した。また先謙は「重觴」を神がやってくるさまの比喩であるとするが、ここでは實際の行動と解釋した。

◎神裴回若留放　殪蘘親以肆章

「裴回」は徘徊と同じで、ぶらぶら歩くこと。同じ表記を使った例としては、司馬相如「天子游獵賦（子虛賦）」に「於是楚王乃弭節裴回、翺翔容與。（是に於いて楚王　乃ち節を弭めて裴回し、翺翔として容與たり。）」（『漢書』は「徘徊」に作る）がある。

「放」について、先謙は『淮南子』兵略「放乎九天之上。（九天の上に放す。）」の許愼注「放、寄也。」を引いて、「留放」で神がその場にとどまることを指すとする。しかしここでは、「放」は外側へと去っていくことと解し、「留」と「放」とが一對の動作として、神の徘徊するさまを表現していると解釋する。

「殪」は「覬」の假借。孟康注に、「殪音覬。」

二句の解釋について、師古注に「言神靈裴回、留而不去、故我得覯見、冀以親附而陳誠意、遂章明之。（言うこころは神靈　裴回し、留りて去らず、故に我　覯見するを得、以て親附して誠意を陳べ、遂に之を章明せんことを冀う。）」とあり、神がゆったりして立ち去らず、それでお目見えすることができたので、神への誠意を明らかにしたいという。

◎函蒙祉福常若期

「函蒙」は包み覆うこと。師古注に「函、包也。蒙、被也。」

「祉福」は天や高貴な人から與えられる恩寵、幸福。『詩經』周頌・烈文に「烈文辟公、錫茲祉福。（烈文の辟公、茲の祉福を錫う。）」、『史記』三三魯周公世家に「天降祉福、唐叔得禾、異母同穎、獻之成王。（天　祉福を降し、唐叔　禾を得て、異母同穎たり、之を成王に獻ず。）」などがあり、郊祀歌でも《后皇》（第十四）・《象載瑜》（第十八）に見える。

この句の解釋について、師古注には「言爲神所饗、故能包函蒙被祉福、應誠而至、有常期也。（言うこころは神の饗する所と爲りて、故に能く包函して祉福を蒙被し、誠に應じて至る、常期有るなり。）」といい、前の句の「誠意」が神に受け入れられた結果とする。

◎寂漻上天知厥時

「寂漻」は無音で空虛なさま。同じ字を用いた例は司馬相如「天子游獵賦（上林賦）」に「汨急漂疾、悠遠長懷、寂漻無聲、肆乎永歸。（汨急漂疾として、悠遠として長く懷き、寂漻として聲無く、肆乎として永く歸る。）」（『史記』『漢書』とも同文）、『漢書』の該當箇所の師古注に「言長流安靜。（長流の安靜なるを言う。）」とあり、水の流れが穩やかで靜かなさま。別の字を用いた例では、『楚辭』九辯に「泬寥兮天高而氣清、寂寥兮收潦而水清。（泬寥として天　高く氣　清し、寂寥として潦を收めて水清し。）」、王逸注に「源瀆順流、漠無聲也。（源瀆　流れに順い、漠として無聲なり。）」といい、同じく水の流れの靜かで音のないさまを表す。

この句の解釋については、應劭注に「言天雖寂漻高遠、而知我饗薦之時也。（言うこころは天　寂漻高遠なると雖も、而るに我が饗薦の時を知るなり。）漻音來朝反。」とあるのに從い、神は音もしないとても遠い天にいるけれども、祭祀を催す時期を悟ることができる、と解釋した。

◎泛泛滇滇從高斿

「泛泛」は上に浮かび上がるさま。應劭注に「泛泛、上浮之意也。」『莊子』秋水に「泛泛乎其若四方之无窮、其无所畛域。（泛泛乎として其れ四方の无窮なる若し、其れ畛域する所无し。）」といい、果てしない廣がりを表す語と考えられる。

「滇滇」は盛んなさま。應劭注に「滇滇、盛貌也。」師古注に「音徒千反。」また晉灼は「滇音『振旅闐闐（テンテン）』。」といい、「滇」が「闐」と通じることを指摘する。『詩經』小雅・采芑の「伐鼓淵淵、振旅闐闐。（伐鼓　淵淵たり、振旅　闐闐たり。）」は、軍隊が出陣する樣子の形容である。また『楚辭』九歌・山鬼では、

「靁塡塡兮雨冥冥、猨啾啾兮又夜鳴。（靁　塡塡として雨　冥冥、猨　啾啾として又た夜鳴く。）」と雷の轟音を表現しており、「滇滇」の語は大きな音を伴う盛んな様子を表すと捉えられる。

「從高斿」は、「斿」を「游」の假借として、神が天高く昇って遊ぶのに人も從うとも解釋できる。しかしここでは「斿」の原義「旗」によって、神が旗を伴ってやってくると解釋した。

◎殷勤此路臚所求

「殷勤」は親切で丁寧なさま。ここでは丁寧に道案内をする、と解釋した。

「臚」は陳べる。應劭注に「臚、陳也。」師古注に「臚音力於反。」

この句の解釋について、應劭注に「言所以殷勤此路、乃欲陳所求也。（言うこころは此の道を殷勤する所以は、乃ち求める所を陳べんと欲するなり。）」といい、道案内をしたのは求めることを神に申し上げるためだとする。先謙は「所求」の內容について「長生不死」のことであるという。

◎佻正嘉吉弘以昌

「佻」は、樂しむ。如淳は「佻讀曰肇。肇、始也。（佻は讀みて肇と曰う。肇は、始なり。）」といい、「始め」とするが、王先謙が引く『說文解字』八上人部の「佻、愉也。」によった。全體も王先謙の以下の解釋に從う。「言所愉悅嘉美者至正且吉、故大以昌也。（言うこころは愉悅嘉美する所の者は至りて正にして且つ吉なり、故に大にして以て昌んなり。）」

◎休嘉砰隱溢四方

「休」は美しいさま。師古注に「休、美也。」

「嘉」はよろこび。師古注に「嘉、慶也。」

「砰隱」は盛んなさま。師古注に「砰音普萌反。砰隱、盛意。」司馬相如「天子游獵賦（上林賦）」の「湛湛隱隱、砰磅訇礚。」には、「砰」と「隱」が同時に現れる。水の流れの激しいさまを描寫する一節である。「隱隱」は『文選』八司馬相如「上林賦」の李善注に「盛貌也。」先謙は潘岳「籍田賦」（『文選』七）「簫管嘲哳以啾嘈兮、鼓鞞砉隱以砰礚。（簫管　嘲哳にして以て啾嘈、鼓鞞　砉隱にして以て砰礚。）」の李善注引『字書』に「砰、大聲也。」とあり、また「隱」は「殷」と同義であって、「砰」「隱」二字ともに音の大きなさまとする。また『漢書』郊祀志下には、「音聲砰隱、野雞皆雊。（音聲　砰隱として、野雞　皆な雊く。）」の例があり、これも音の形容である。

◎專精厲意逝九閡

「九閡」は天の果て、「九陔」に同じ。如淳注に「閡亦陔也。淮南子曰、若士者謂盧敖曰、吾與汗漫期乎九陔之上。陔、重也。謂九天之上也。（閡も亦た陔なり。『淮南子』に曰く、「若の士なる者　盧敖に謂ひて曰く、吾　汗漫と九陔の上に期す」と。陔は、重なり。九天の上を謂うなり。）」如淳が引用する部分は、『淮南子』道應に見える。今本は「上」を「外」に作る。

◎紛云六幕浮大海

「紛云」は沸き起こるさま。師古注に「紛云、興作之貌。」『楚

辭』九章・橘頌に「紛縕宜脩、姱而不醜兮。（紛縕として宜しく脩むべし、姱にして醜からず。）」、王逸注に「紛縕、盛貌。」、盛んな様子を表す語。表記が同じ例は、司馬相如「難蜀父老」（『漢書』司馬相如傳下）に「漢興七十有八載、德茂存乎六世、威武紛云、湛恩汪濊。（漢興りて七十有八載、德茂りて六世に存し、威武　紛云として、湛恩　汪濊たり。）」（『史記』では「紛紜」に作る）とある。

「六幕」は天地東西南北の宇宙空間、また天下。「六合」と同義。師古注に「六幕、猶言六合也。（六幕は、猶六合と言うがごときなり。）」「六合」は、《帝臨》（第二）參照。

先謙は上の句と照らし合わせて、上の句の「九閡」は天を言い、この句の「六幕」は地を言うと解釋している。また句の全體については、天地を遍くめぐり、海に浮かんで、蓬萊の仙人と仲間になろうとする、と解釋しており、ここでもおおむねその線に從った。

【餘說一】《天門》の句型について

《天門》は、三字句から七字句までにわたる多様な句型を取り混ぜて作られており、音樂もおそらく多様な曲調をつき混ぜた複雜な構成のものであったと想像される。王先謙は『楚辭』の句型から類推して、もともとあった「兮」字を班固が削除したと考え、復元を試みている。三字・四字・六字の句では、對になる二句のうち奇數句目の後に「兮」があったとする。また五字句は三文字目の後に「兮」字のある「○○○兮○○」、七字句では四文字目の後に「兮」がある「○○○○兮○○○」という形を想定する。ただし後者については、「「○○○○、○○○兮」という形（『楚辭』では九章・橘頌にみえる）も考えられる。なお「兮」字を班固が削除した可能性については、《天馬》（第十）參照。

【餘說二】《天門》と封禪について

先謙は、《天門》には封禪のことが歌われていると考えていたようで、補注においてしばしばこの詩を『漢書』郊祀志の封禪の記事と結びつける。たとえば「光夜燭、德信著。」は、「封禪祠、其夜若有光、晝有白雲出封中。（封禪の祠、其の夜　光有るが若し、晝に白雲有り封中に出づ。）」と關連し、封禪の夜に光があるかのように明るかったことを表すという。また「星留兪、塞隕光。」は、封禪の後に「德星」が出現したこと（《景星》（第十二）の「景星顯見、信星彪列」の注釋を參照）を指すという。「幡比翡回集、貳雙飛常羊。」は、封禪の際に奇獸や鳥を放したという「縱遠方奇獸飛禽及白雉諸物、頗以加祠。（遠方の奇獸・飛禽及び白雉の諸物を縱ち、頗る以て祠を加う。）」の記事と結びつけて考えている。そして「臚所求」「浮大海」などの表現には、武帝の不老長壽への願いと仙界への憧れが現れているというのである。本稿でもその解釋を參考にしたところがあるが、歌の全體を封禪や求仙と結びつけることはしなかった。

《景星》（第十二）

景星顯見　景星　顯らかに見れ
信星彪列　信星　彪ありて列ぶ
象載昭庭　象載　庭に昭らかにして
日親以察　日親しく以て察らかなり
參侔開闔　開闔に參侔し
爰推本紀　爰に本紀を推す
汾脽出鼎　汾脽　鼎を出だす
皇祜元始　皇祜の元始なり
五音六律　五音六律
依韋饗昭　依韋として饗昭らかにして
雜變並會　雜り變じ並びに會し
雅聲遠姚　雅聲は遠姚たり
空桑琴瑟結信成　空桑の琴瑟　結び信びて成り
四興遞代八風生　四もに興りて遞代し　八風生ず
殷殷鐘石羽籥鳴　殷殷たる鐘石　羽籥は鳴りて
河龍供鯉醇犧牲　河龍　鯉を供え　醇たる犧牲あり
百末旨酒布蘭生　百末の旨酒　布きて蘭の生ずるがごとし
泰尊柘漿析朝酲　泰尊の柘漿　朝酲を析く
微感心攸通修名　微かに感じ心攸として修名を通ぜん
周流常羊思所幷　周流し常羊して幷さる所を思う
穰穰復正直往甯　穰穰として正に復り　往甯に當る
馮蠵切和疏寫平　馮蠵　切に和して疏寫して平らかならんことを
上天布施后土成　上天布施して后土成す
穰穰豐年四時榮　穰穰たる豐年　四時榮えんことを

景星十二

元鼎五年得鼎汾陰作

元鼎五年、鼎を汾陰に得て作る。

【押　韻】

列・察―月部　紀・始―之部　昭・姚―宵部　成・生・鳴・牲・生・酲・名・幷・甯・平・成・榮―耕部

師古注に「甯合韻音寧。」というが、「甯」と「寧」は同字。師古は「甯、願也。」と訓じるため去聲となるが、押韻のため「や

すらか」の意の平聲に讀み替えた。ただ漢代の韻文では常に平聲の字と押韻する。

【通　釋】

景星がひかり輝いて現れ
信星は模様のように列をなしている
星の神祕がこの宮殿の庭において明らかになり
日ごとに近づいてきて鮮明になる
天地にまじわり
ここに瑞祥の由來をたずねて紀元をもとむ
汾脽の丘より鼎が出た
大いなるさいわいの始まりである
五音六律は
調和して響きは明るく
まじりあい　調子を變え　さらに一つになって
正統な音樂は遙か彼方まで聞こえる
空桑の琴瑟の音は結ぼれまた伸びゆきて樂となり
四方に懸けられた鐘が入れ替わり立ち替わり鳴らされ八風の調べを生ず
高らかに響く鐘と磬　羽もちて舞い籥(ふえ)は鳴り
河龍が鯉を供え　見目良く五體揃ったいけにえの牛や羊
さまざまな草花の粉末で作った美酒　その香りは廣がって蘭の花のよう
いにしえの樽につがれた柏(やまがわ)の汁を飲めば二日醉いをさます
目に見えぬ神に感應し　心は悠々とし　正しきほまれを御許へ通じようとする
周く心のままに行き　神の道に合わさるところを思う
福多く正道に歸し　往年の願いに當たる
どうか馮夷と觜蠵とが和し　河川を切り開いて水が穩やかに流れますよう
上天がめぐみをもたらし　后土神が成す
みのりも豐かに　四季に榮えますよう

【注　釋】

◎景星顯見　信星彪列

瑞祥の星である景星・信星の出現をうたう。

これらの星は如淳注に「景星者、德星也、見無常、常出有道之國。鎭星爲信星、居國益地。（景星は、德星なり。見ゆること常無く、常に有道の國に出ず。鎭星は信星たり、國に居れば地を益す。）」とあり、また『漢書』二六天文志にも「景星者、德星也、其狀無常、常出於有道之國。（景星は、德星なり、其の狀　常無し、常に有道の國に出ず。）」、「塡星曰中央季夏土、信也、思心也。仁義禮智以信爲主、貌言視聽以心爲正、故四星皆失、塡星乃爲之動。塡星所居、國吉。（塡星　中央季夏の土と曰い、信なり、思心なり。仁義禮智　信を以て主と爲し、貌言視聽　心を以て正と爲す。故に四星皆失せば、塡星乃ち之が爲に動く。塡星居る所、

國吉なり。)」等の記述がある。

ちなみに「信星(塡星)」は土星のこと。「景星」が具體的にどの星を指すかはつまびらかではないが、『晉書』一二天文志中には以下のように記述される。

景星、如半月、生於晦朔、助月爲明。或曰、星大而中空。或曰、有三星、在赤方氣、與青方氣相連、黄星在赤方氣中。亦名德星。(景星は、半月の如く、晦朔に生じ、月を助けて明を爲す。或いは曰く、星は大にして中空なりと。或いは曰く、三星有り、赤方の氣に在りて、青方の氣と相連なり、黄星赤方の氣の中に在ると。亦た德星と名づく。)

なお「景星」「德星」に關しては、『史記』封禪書に以下のような記述がある。

其秋、有星茀于東井。後十餘日、有星茀于三能。望氣王朔言、候獨見塡星出如瓜、食頃復入焉。有司皆曰、陛下建漢家封禪、天其報德星云。

其の秋、星有りて東井に茀(はい)す[彗星が現れた]。後十餘日、星有りて三能に茀す。望氣の王朔言えらく、「候するに獨り塡星の出でて瓜の如く、食頃にして復た入るを見る。」と。有司皆曰く、「陛下 漢家の封禪を建つるに、天其れ德星をもて報ゆ。」と云えり。

其來年冬、郊雍五帝。還、拜祝祠太一。贊饗曰、德星昭衍、厥維休祥。壽星仍出、淵耀光明。信星昭見、皇帝敬拜太祝之享。

其の來年冬、雍の五帝に郊す。還りて、拜して太一に祝祠す。贊饗して曰く、「德星昭衍たり、厥れ維れ休祥たり。壽星仍りて出で、淵(ふか)く光明を燿かす。信星 昭らかに見え、皇帝敬しみて太祝の享を拜す。」と。

前段の星の出現を述べた記事は、元封元年(前一一〇)、封禪を行ったあとのこと。ただしこの歌には、これ以外の瑞祥も歌い込まれており、制作年代については最後に改めてふれる。

「顯見」「彪列」については、顔師古注に「謂彰著而爲行列也。(彰著にして行列を爲すを謂うなり。)」

◎象載昭庭　日親以察

師古は「象謂縣象也。載、事也。縣象祕事、昭顯於庭、日來親近、甚明察也。(象は縣象を謂うなり。載、事なり。縣象の祕事、庭に昭顯し、日び來りて親近し、甚だ明察なり。)」とし、「象」は懸象、すなわち星のことであるとする。景星・信星の出現という神祕がこの場において顯在し、それらの星が日に日に地上に近づいてくるように鮮明に見えるようになる様子を歌っているという解釋である。ここでは師古の説を採った。

「象載」という語は、《象載瑜》(第十八)にもみえる。劉攽は、《象載瑜》での例から、「象載」を瑞應の車とするが、王先謙もいうように無理であろう。

◎參侔開闔　爰推本紀

「參侔開闔」句の解釋については説が分かれている。

應劭注では「參、三也。言景星光明開闔、乃三於日月也。(參

は、三なり。言うこころは景星の光明　開闔すること、乃ち日月に三なり。)」といい、この句は景星の光の明滅が日月に並ぶものであることをいうとする。

晉灼は「侔、等也。開闔、猶開闢也。言今之鼎瑞、參等於上世。(侔は、等なり。開闔は、猶お開闢のごときなり。言うこころは今の鼎瑞、上世に參等せり。)」とし、「開闔(ひらく、とざす)」を「開闢(ひらく)」の意として、鼎の出現という瑞祥によって天地開闢の時代と參わることがかなったのだ、という意に解釋している。顏師古も「晉說是也。」とこの說を支持する。

王先謙は晉說を否定し、『周易』繁辭上の「闔戶謂之坤、闢戶謂之乾。(闔戶　之を坤と謂い、闢戶　之を乾と謂う。)」、阮籍「通易論」(本集卷上)の「乾以一爲開、坤以二爲闔。(乾　一を以て開と爲し、坤　二を以て闔と爲す。)」、『楚辭』天問・洪興祖補注(先謙は王逸注と誤る)の「陰闔而晦、陽開而明。(陰　闔ざして晦く、陽　開きて明るし。)」といった用例を示し、「開闔」は「乾坤陰陽」すなわち天地の意であって、「開闔に參侔す」とは「天地に參わる」ことであると解釋する。ここではこの說に從った。はじめの四句で瑞星の出現を述べたのに續き、換韻したこの句からは、天地の祭祀を「人」の代表として執り行う皇帝について述べるとみるのである。

「爰推本紀」は、瑞祥の出現の意義を考えて改元することをいう。王先謙補注に、「爰推本紀、推本瑞應以紀元也。(「爰に本紀を推す」とは、瑞應を推本して以て紀元するなり。)」武帝以前には元號がなかったが、文帝や景帝は在位中に改元し、元年が複數存した(「前元年」「後元年」などとよんで區別する)。武帝もはじめその制によったが、改元が何度も繰り返されたため、そのときの瑞祥によって名をつけることが提案された。これが元號の起こりである。『史記』封禪書に、「有司言元宜以天瑞命、不宜以一二數。一元曰建、二元以長星曰光、三元以郊得一角獸曰狩云。(有司言えらく、元は宜しく天瑞を以て命(なづ)くべく、宜しく一二の數を以てすべからずと。一元を建と曰い、二元は長星を以て光と曰い、三元は郊して一角獸を得るを以て狩と曰うと云えり。)」こうして、「建元」にはじまり、彗星にちなんだ「元光」、瑞獸にちなんだ「元狩」などの元號が定められ、以後も瑞祥にちなんで元號がつけられることになる。

◎汾脽出鼎　皇祐元始

「汾」は汾水。今の山西省を南西に流れ、黃河に注ぐ。「脽」は小高い丘。「皇祐」は大いなる福。師古注に「皇、大也。祐、福也。」また「脽音誰。祐音怙(コ)。」

鼎の出現について、『漢書』六武帝紀には、元鼎元年に「得鼎汾水上。(鼎を汾水の上(ほとり)に得。)」、同四年に「六月、得寶鼎后土祠旁。……作寶鼎天馬之歌。(六月、寶鼎を后土の祠の旁らに得。……寶鼎・天馬の歌を作る。)」という二つの記事がある。しかし郊祀志上には前者に相當する記述が見えず、後者についてのみ「其夏六月、汾陰巫錦爲民祠魏脽后土營旁、見地如鉤狀、掊視得鼎。(其の夏六月、汾陰の巫の錦、民の爲に魏脽の后土營の旁ら

に祠るに、地の鉤狀の如きを見、掊きて視て鼎を得。」などと詳しい顚末を述べる。また『史記』封禪書には、封禪のあとのできごととして「有司言寶鼎出爲元鼎、以今年爲元封元年。（有司言えらく、寶鼎出づるを元鼎と爲し、今年を以て元封元年と爲さんと。）」という（ただしこの文は『漢書』郊祀志にはみえない）。『資治通鑑』はこれらの點から、元年の記事は誤りとして載せず、元鼎の元號ははじめからあったものではなく、四年の寶鼎出土にちなんで後からつけられたものとする（「考異」參照）。元鼎四年は、前一一三年。

◎五音六律　依韋饗昭

再び換韻し、祭祀の場における音樂についてうたう。

五音は宮・商・角・徵・羽、六律は黃鍾・大蔟・姑洗・蕤賓・夷則・無射（以上『周禮』春官・大師）。但し『周禮』では「五音」を「五聲」としており、『尙書』『禮記』『左傳』『莊子』等の用例を見ても「五聲六律（六律五聲）」とする例が壓倒的に多い。「五音六律」としている用例としては、『孟子』離婁上「孟子曰、師曠之聰、不以六律、不能正五音。（孟子曰く、「師曠の聰も、六律を以てせざれば、五音を正す能わず。」と。）」や、『淮南子』泰族「別淸濁五音六律相生之數。（淸濁・五音・六律相生の數を別つ。）」及び「夔之初作樂也、皆合六律而調五音、以通八風。（夔の初めて樂を作るや、皆　六律に合わせ五音を調え、以て八風に通ず。）」が擧げられる。

「依韋」について、師古は「依韋、諧和不相乖離也。（依韋、諧和して相い乖離せざるなり。）」とし、周壽昌は「依違」の音通とする。「依違」は、『漢書』など漢代にいくつか用例が見え、ぐずぐずと決斷できないさまを表す疊韻の語であるが、「饗昭」との繫がりから考え、ここでは師古說によって譯した。「饗昭」は、音樂の響きが明らかなこと。師古注に「饗讀曰響。昭、明也、言聲響之明也。（饗は讀みて響と曰う。昭は、明なり、聲響の明らかなるを言うなり。）」

◎雜變並會　雅聲遠姚

「姚」について、師古注には「姚、僄姚、言飛揚也。（姚は、僄姚なり、飛揚するを言うなり。）」という。「僄姚」は「剽姚（ヘウエウ）」と同じで、すばしこいさまをいう疊韻の語。『史記』一一一衞將軍驃騎列傳に、霍去病が十八歲で「剽姚校尉」に任じられたことを記す。『漢書』五五霍去病傳は「票姚」に作り、師古注に「票姚、勁疾之貌也。」

王念孫は『荀子』榮辱の「其功盛姚遠矣。（其の功　盛んにして姚遠たり。）」［楊倞注「姚、與遙同。」］を例に擧げ、「姚」は「遙（エウ）」の音通で、「遠」「姚」二字とも遠いさまとする。師古注は疊韻語の一部だけを用いて解する點に難があり、王念孫に從った。

◎空桑琴瑟結信成

「空桑」は、傳說上の山の名。琴の材料となる木を產するという。張晏注に、「傳曰、空桑爲瑟、一彈三歎、祭天質故也。（傳に曰く「空桑もて瑟を爲（つく）れば、一たび彈きて三たび歎ず。」と。天を祭ること質なるの故なり。）」とある。ただしそこに引く「傳」

は出典未詳。また師古注には「空桑、地名也、出善木、可爲琴瑟也。（空桑は、地名なり、善木を出だし、琴瑟を爲るべきなり。）」という。「空桑」と樂との關わりは、『周禮』春官・大司樂に「靈鼓靈鼗、孫竹之管、空桑之琴瑟、咸池之舞、夏日至、於澤中之方丘奏之。若樂八變、則地示皆出、可得而禮矣。（靈鼓・靈鼗、孫竹の管、空桑の琴瑟、咸池の舞、夏日至り、澤中の方丘に於いて之を奏す。若し樂　八變せば、則ち地示　皆出で、得て禮すべし。）」とあり、祭祀に用いられる琴瑟の產地として示される。なお『山海經』東山經にも「空桑之山」がみえるが、そこには樂に關する特別の傳承は記されない。

「結信成」は、「信」を「伸」とみて、琴の音が絡み合ったり廣がったりしながら音樂を織りなしてゆくさまと解した。「信を結びて成る」と讀み、音樂を通じて儀禮の參加者の間に信頼關係が成立すると解することもできそうだが（小竹武夫『漢書』の譯はその方向で解する）、「樂」が「信」をもたらすという言說が確認できなかったので、今はとらない。

◎四興遞代八風生

應劭は「四時遞代成陰陽、八風以生也。（四時　遞代して陰陽を成し、八風　以て生ずるなり。）」と注する。「四」は四季、「八風」は文字通り八方位からの風と解している。

臣瓚は「舞者四縣代奏也。左氏傳曰、夫舞者、所以節八音而行八風也。（舞者の四縣代わるがわる奏するなり。『左氏傳』曰く、「夫の舞なる者は、八音を節し八風を行う所以」と。）」という。「四縣」は、儀禮の際四方に懸けられた編鐘（大小の鐘を組み合わせた樂器）。『漢書』禮樂志の「安世房中歌」に「高張四縣、樂充宮庭。（高く四縣を張り、樂は宮庭に充つ。）」とあり、晉灼注に「四縣、樂四縣也、天子宮縣。（四縣は、樂の四縣なり、天子の宮縣なり。）」、師古注に「謂設宮縣而高張之。縣、古懸字。（宮縣を設けて高く之を張るを謂う。縣、古の懸の字。）」と。「八風」は音樂をいう。臣瓚の引く『左氏傳』は、隱公五年に見える。同樣の例は他にも『淮南子』泰族の「夔之初作樂也、皆合六律而調五音、以通八風。」（既出。「五音六律」句の注參照）、同じく『淮南子』俶眞「目數千羊之羣、耳分八風之調。（目は千羊の羣を數え、耳は八風の調べを分かつ。）」など多數ある。ここでも前後の句の內容に照らして、臣瓚說に從った。

師古は「瓚說是也。」と臣瓚を支持する一方で、「八風」については、八方の風の名稱を擧げて次のようにいう。「八方之風、謂東北曰條風、東方曰明庶風、東南曰清明風、南方曰景風、西南曰涼風、西方曰閶闔風、西北曰不周風、北方曰廣莫風。」これは『易緯通卦驗』（『春秋左氏傳』昭公二十年疏所引）とは一致するが、『左傳』隱公五年釋文、『淮南子』墜形などは異なる名を擧げている。

◎殷殷鐘石羽籥鳴

「殷殷」は、音の盛んなさま。師古注に「殷殷、聲盛也。殷音隱。（殷殷は、聲の盛んなるなり。殷　音は隱。）」『詩經』召南・殷其雷に、「殷其雷、在南山之陽。（殷たり其の雷、南山の陽に在

り。)」とあり、この詩についても『經典釋文』は「殷音隱。」と記す。通常の平聲ではなく、上聲に發音される。

「鐘石」の「石」は磬。大小さまざまな「へ」の字型の金屬片または陶片をつり下げ、音階を奏する打樂器。師古注に「石、謂磬也。(石は、磬を謂うなり。)」

「羽籥」は、舞を舞う者がもつ羽根飾りと笛。師古注には「羽籥、韶舞所持者也。(羽籥は、韶舞の持つ所の者なり。)」という。韶は、舜のものと傳えられる古代の樂舞。『尚書』益稷に「簫韶九成、鳳凰來儀。(簫韶　九たび成り、鳳凰　來儀す。)」また『論語』述而には「子在齊聞韶、三月不知肉味。(子　齊に在りて韶を聞き、三月肉の味を知らず。)」という有名な話がある。ただしここでの舞を韶に限定することはなかろう。舞に際して「羽籥」を持つことについては、『周禮』春官・籥師「祭祀則鼓羽籥之舞。(祭祀には則ち羽籥の舞を鼓す。)」という記述がある。『詩經』邶風・簡兮には「左手執籥、右手秉翟。(左手に籥を執り、右手に翟を秉る。)」という。

◎河龍供鯉醇犧牲

鯉や生け贄の牛羊を祭壇に供える情景であるが、ここに現れる「河龍」が何者であるかは判然としない。晉灼は「河龍、夏之所賜者也。(河龍は、夏の賜る所の者なり。)」としているが、先秦の文獻にそのような故事を見つけることはできず、沈欽韓もこの點は否定している。

晉灼はさらに「供鯉、給廚祭也。(鯉を供うるは、廚祭に給するなり。)」とし、沈欽韓も「謂河龍出鯉以供祀。(河龍　鯉を出だし以て祀に供するを謂う。)」というが、龍が鯉を供えるということの典據も明らかではない。沈欽韓は、「古豔歌」の「天公出美酒、河伯出鯉魚。(天公　美酒を出だし、河伯　鯉魚を出だす。)」を擧げるが、この句は『樂府詩集』など通常の古樂府の集には收められず、『太平御覽』五三九に「古豔詩」として引かれ、詩の全體は、明の張之象の『古詩類苑』三三などに見られるもの。狩野・西脇『漢書郊祀志』は「鯉を供えて河伯を祭る」とするが、これとて典據があるわけではない。

「醇犧牲」は、毛色が一色でそろい、體に傷のない上等の生贄。師古注に、「醇謂色不雜也。犧牲、牛羊全體者也。(醇は、色の雜らざるを謂うなり。犧牲は、牛羊の體を全うする者なり。)」という。

◎百末旨酒布蘭生

「百末旨酒」は、多くの香草を粉末にして香りをつけた酒。張晏注は「百末、末作之末也。(百末は、末作の末なり。)」という。「末作」は農業が「本」であるのに對して商工業をいい、「百末」でもろもろの商工業の意か。晉灼注は「百日之末酒也。」とする。百日熟成させた酒の意であろう。しかしここでは、師古注に「百末、百草華之末也。旨、美也。以百草華末雜酒、故香且美也。事見春秋繁露。(百末は、百草華の末なり。旨は、美なり。百草華末を以て酒に雜え、故に香しく且つ美なり。事は『春秋繁露』に見ゆ。)」とあるのに從った。

『春秋繁露』執贄には、祭祀で用いる「鬯」（香り酒）の製法を述べて、「凡執贄、天子用暢。……暢、亦取百香之心、獨末之、合之爲一、而達其臭氣、氣暢于天。（凡そ贄を執るに、天子は暢を用う。……暢は、亦た百香の心を取り、獨り之を末し、之を合わせて一と爲し、而して其の臭氣を達すれば、氣は天に暢ぶ。）」という。「暢」は「鬯」に同じ。また『說文解字』五下鬯部に「鬱、芳艸也。……一曰、鬱鬯。百草之華。遠方鬱人所貢芳艸。合釀之以降神。（鬱は、芳艸なり。……一に曰く鬱鬯と。百草の華なり。遠方の鬱人　貢ぐ所の芳艸なり。之を合釀して以て神を降す。）」とある。

「布蘭生」は、香りが蘭の植わっているように廣がるさま。晉灼注に「芬香布列、若蘭之生也。（芬香　布列し、蘭の生ずるが若きなり。）」

◎泰尊柘漿析朝酲

香り酒をうたった句に續き、醉い覺ましについてうたう句である。

「泰尊」は、太古の土器の樽で、舜の時代のものともいう。『周禮』春官・司尊彝に「凡四時之閒祀、追享朝享、……其朝踐用兩大尊。（凡そ四時の閒祀、追享・朝享には、……其の朝踐は兩大尊を用う。）」とあり、注に鄭司農を引いて「大尊、太古之瓦尊。（太尊、太古の瓦尊なり。）」『經典釋文』に、「大、音太。」とある。また、『禮記』明堂位に「泰、有虞氏之尊也。」

「柘漿」は、やまぐわの果汁。あるいは、さとうきびの汁ともいう。應劭注に「柘漿、取甘柘汁以爲飲也。酲、病酒也。析、解也。言柘漿可以解朝酲也。（柘漿は、甘柘の汁を取りて以て飲と爲すなり。酲は、酒に病むなり。析は、解なり。言うこころは柘漿　以て朝酲を解くべきなり。）」『楚辭』招魂に「胹鼈炮羔、有柘漿些。（鼈を胹にて羔を炮き、柘漿有り。）」とある。

◎微感心攸通修名

顏師古はこの句の主體を神として、「言精微所應、其心攸遠、故得通達成長久之名。（言うこころは精微　應ずる所、其の心攸遠にして、故に通達して長久の名を成すを得。）」とし、精微なる神が應えたのは、祭祀する帝王の深遠な心であり、それによって神が後世まで帝王の高名を傳え殘すという方向で解釋している。

一方王先謙は「帝欲使精修之名上通冥漠也。攸與悠同。（帝精修の名をして上は冥漠に通ぜしめんと欲するなり。攸は悠と同じ。）」とし、帝王が天上に正しき行いを修めたということを傳えようとするという方向で解釋している。ここでは先謙の解釋を取った。

◎周流常羊思所幷

「周流」は、あちこちへめぐること。師古注に「周流、猶周行也。（周流は、猶お周行のごときなり。）」『詩經』には見えず、『楚辭』に頻出して、しばしば天上や神話の世界と結びつく。離騷に「覽相觀於四極兮、周流乎天余乃下。（覽て四極を相觀し、天を周流して余　乃ち下る。）」、また「遭吾道夫崑崙兮、路脩遠以周流。（吾が道を夫の崑崙に遭らせば、路は脩遠にして以て周

流す。」などとある。『楚辭』以外では、『周易』繫辭下「爲道也屢遷、變動不居、周流六虛。（「易の」道たるや屢しば遷り、變動して居らず、六虛を周流す。）」のような例もあるが、多くは『荀子』賦「周流四海、曾不崇日。（四海を周流し、曾ち日を崇（すなわ）えず。）」、『呂氏春秋』介立「今晉文公出亡、周流天下。（今　晉文公　出亡し、天下を周流す。）」のように、「天下」もしくはその類義語とともに用いられる。

「常羊」は、師古注に「常羊、猶逍遙也。」《天門》（第十一）に既出。「逍遙」もやはり『楚辭』に頻出する。

「思所并」は、師古注に「思所并、思與神道合也、下言合所思、是也。（并さる所を思うとは、神道と合わんことを思うなり。下に『合所思』と言えるは是れなり。）」「合所思」は、《華爗爗》（第十五）に「神安坐、鵜吉時、共翊翊、合所思。」とあるのをさす。

◎穰穰復正直往甯

「穰穰」は、多いさま。師古注に「穰穰、多也。」『詩經』周頌・執競に「鐘鼓喤喤、磬筦將將、降福穰穰。」［毛傳に「穰穰、衆也」］、同じく商頌・烈祖に「自天降康、豐年穰穰。（天より康を降し、豐年穰穰たり。）」とある。

「復正」は、正道に歸ること。師古注に「復、猶歸也。復音扶目反。（復は、猶お歸のごときなり。復、音は扶目の反。）」「復」は「また」という副詞の場合上聲だが（日本語音では「フ」。この場合「フク」と讀むのは慣用音）、ここは動詞として入聲に讀む（「フク」）。

「直往甯」は、師古注に「直、當也。甯、願也。言獲福既多、歸於正道、克當往日所願也。（直は、當たるなり。甯は、願うなり。言うこころは福を獲ること既に多く、正道に歸し、克く往日の願う所に當るなり。）」という。

◎馮蟡切和疏寫平

「馮蟡」は、晉灼注に「馮、馮夷、河伯也。蟡、觜蟡、龜屬也。（馮は、馮夷、河伯なり。蟡は、觜蟡、龜の屬なり。）」

馮夷は、河伯（黄河の神）となった人物の姓名とされる。『莊子』大宗師に「馮夷得之、以遊大川。（馮夷　之を得て、以て大川に遊ぶ。）」とあり、釋文に晉の司馬彪を引いて「清泠傳曰、馮夷、華陰潼鄉隄首人也。服八石、得水仙。是爲河伯。一云、以八月庚子浴於河而溺死。一云、渡河溺死。（『清泠傳』に曰く、馮夷、華陰潼鄉隄首の人なり。八石を服し、水仙たるを得。是れ河伯たり。一に云えらく、八月庚子を以て河に浴して溺死すと。一に云えらく、河を渡りて溺死すと。）」、唐の成玄英の疏に「姓馮、名夷、……天帝錫馮夷爲河伯。（姓は馮、名は夷、……天帝、馮夷に錫（たま）いて河伯と爲す。）」という。一説に、河伯の姓名は呂公子であり、馮夷はその妻であるともいう。『莊子』秋水に「於是焉河伯欣然自喜。（是に於いて河伯　欣然として自ら喜ぶ。）」、釋文に「一云、姓呂、名公子、馮夷是公子之妻。」

なお『山海經』海內北經には北の果てに住む「冰夷」として現れ、「從極之淵、深三百仞、維冰夷恆都焉。冰夷人面、乘兩龍。（從極の淵、深さ三百仞、維れ冰夷の恆都たり。冰夷は人面にし

て、兩龍に乘る。)」という。そのほか『楚辭』遠遊「使湘靈鼓瑟兮、令海若舞馮夷。(湘靈をして瑟を鼓せしめ、海若に令して馮夷を舞わしむ。)」、『淮南子』齊俗「昔者馮夷得道、以潛大川。(昔者馮夷　道を得、以て大川に潛る。)」など、むしろ楚系文獻に現れることが多く、本來は黃河と關係ない水神の名であったものと思われる。

蟡は、卜占にも用いられた甲羅の文樣の美しい大龜。『爾雅』釋魚の「靈龜」の郭璞注に、「涪陵郡出大龜、甲可以卜、緣中文似蝳蝐、俗呼爲靈龜。卽今背蟡龜、一名靈蟡、能鳴。(涪陵郡大龜を出だす、甲は以てトすべし、緣中の文　蝳蝐に似たり、俗に呼びて靈龜と爲す。卽ち今の背蟡龜、一に靈蟡と名づく、能く鳴く。)」という。

河伯と龜との關わりは、『楚辭』九歌・河伯にも「靈何爲兮水中、乘白黿兮逐文魚。(靈は何すれぞ水中にありて、白黿に乘りて文魚を逐う。)」とうたわれる。

句の全體については、師古注に「言馮夷命靈蟡、使切厲諧和水神、令之疏導川潦、寫散平均、無災害也。(言うこころは馮夷靈蟡に命じ、切に厲みて水神に諧和せしめ、之に令して川潦を疏導し、寫散平均し、災害無からしむるなり。)蟡音弋隨反、又音攜。」という。河の神と大龜とが和合して河の流れが平定されることを願う文句であろうと考えられる。

なお王先謙は、大龜が土に穴を開けて堤防を崩すので、馮夷と和することを願ったのであると解釋し、瓠子での黃河決壞(下文參照)と關連づけようとする。しかし蟡はさきにみたように靈妙なものであり、人に害をもたらすとする記述は見られない。

◎上天布施后土成

「后土」は地神。《帝臨》(第二)を參照。

◎穰穰豐年四時榮

「穰穰豐年」は、既に引いた『詩經』商頌・烈祖に「豐年穰穰」とある。「豐年」は、他にも小雅・無羊の「衆維魚矣、實維豐年。(衆と維れ魚、實に維れ豐年ならん。)」、周頌・豐年の「豐年多黍多稌。(豐年　黍多く稌多し。)」など、『詩』に用例がある。

王先謙は、前の《天門》(第十一)同樣、この歌にも各句の第四字の下に「兮」字があったとする。しかしながら、特に七言句に關しては「兮」字が句末にあった可能性もある。

◎元鼎五年得鼎汾陰作

元鼎五年は、前一一二年。ただし、武帝紀や郊祀志によれば、鼎の出土はその前の年であり(「汾脽出鼎」の注釋參照)、王先謙もいうように「五」は「四」とすべきである。

ただ、既に見たように、景星・德星の出現はそれより後の元封元年(前一一〇)のこと(「景星顯見　信星彪列」の注釋參照)。また、後半には「河龍供鯉」「馮蟡切和」など河神との關わりを示す語が見えるが、王先謙はそれらを、武帝が黃河の決壞を憂えて湛祠(祭具を水に沈める祭り)を執り行った元封二年(前一〇九)のできごとと結びつける。「五音六律」以下の音樂の描寫も、湛祠の際のものとみなすのである。

武帝はこの年、山東方面に行幸し、泰山で祭禮を行った歸りに、かつて黄河が大決壞を起こした瓠子（河南省）に立ち寄り、河神を祀って息災を祈った。そのことは、『史記』二九河渠書に「還自臨決河、沈白馬玉璧于河、令羣臣從官自將軍已下皆負薪竇決河。（還りて自ら決河に臨み、白馬玉璧を河に沈め、羣臣從官に令して將軍より已下皆薪を負うて決河を竇がしむ。）」、封禪書に「還至瓠子、自臨塞決河、留二日、沈祠而去。（還りて瓠子に至るに、自ら決河を塞ぐに臨み、留まること二日、沈祠して去る。）」［『漢書』郊祀志上は「沈」を「湛」に作る］とある。また河渠書には武帝が作ったという「瓠子之歌」二首を引くが、その第一首には「爲我謂河伯兮何不仁、泛濫不止兮愁吾人。（我が爲に河伯に謂え　何ぞ不仁なる、泛濫　止まずして吾人を愁えしむ。）」と、河伯に訴えかける語がある。

【餘説】《景星》の成立をめぐる問題點

この歌が湛祠の際のものであるかどうかはひとまず措くとしても、元鼎年間の作と標示されているにもかかわらず、明らかにそれより後の景星・德星の出現が、それも冒頭に歌い込まれているのは、その成り立ちを考える上で無視できない。武帝紀元鼎四年條に「寶鼎・天馬の歌を作る」という記事［《天馬》（第十）參照］があったことを考え合わせると、もとは元鼎年間に寶鼎の出土を記念して「寶鼎」の歌が作られたのを、のちにそれ以降のできごとを含めて改作したことも考えられる。ただし汾水の寶鼎はあとの《后皇》（第十四）にもふれられるから、武帝紀にいう「寶鼎」の歌は《后皇》を指すのかもしれず、さらにはここにつけられた詞書は本來《后皇》につくべきものだった可能性もある。

《齊房》（第十三）

齊房產草　齊房　草を產み
九莖連葉　九莖　葉を連ぬ
宮童效異　宮童　異を效せば
披圖案諜　圖を披き諜を案ず
玄氣之精　玄氣の精は
回復此都　此の都に回(めぐ)り復る
蔓蔓日茂　蔓蔓として日に茂り
芝成靈華　芝は靈華を成さん

齊房十三

元封二年芝生甘泉齊房作

元封二年、芝　甘泉の齊房に生えて作る。

【押　韻】

葉・諜―盍部　都・華―魚部

【通　釋】

潔齋をする部屋に草が生えた
九本の莖があり葉がすべて繋がっている
宮中の童子たちがこの異瑞を獻上したので
圖をひらき文書をめくってその系譜を調べる
天の氣の精髓が
邊りを回ってこの都に歸ってくる
どこまでも日に日に茂り
芝は靈妙な花を咲かせるだろう

【注　釋】

◎齊房產草　九莖連葉

「齊房」は潔齋をする部屋。師古注に「齊讀曰齋。其下並同。（齊　讀みて齋と曰う。其の下並びに同じ。）」

「草」は、靈芝を指す。キノコの一種で、和名マンネンタケ、またはヒジリタケ。

このときのことについては、『漢書』六武帝紀の元封二年（前一〇九）六月の詔に「甘泉宮內中產芝、九莖連葉。……作芝房之歌。（甘泉宮內中に芝を產す、九莖連葉なり。……「芝房之歌」を作る。）」とある。「內中」とは、師古注に「內中、謂後庭之室也。（內中は、後庭の室を謂うなり。）」といい、宮殿の裏庭に面した部屋で、それがこの詩にいう「齊房」である。また「芝」について、應劭注に「芝、芝草也、其葉相連。（芝は、芝草なり、其の葉　相い連なる。）」とあり、如淳注には「瑞應圖、王者敬事耆老、不失舊故、則芝草生。（『瑞應圖』に、王者　耆老に敬事し、舊故を失わざれば、則ち芝草　生ず。）」といい、王が老人を敬い傳統に背かなければ生えてくるものだという。

同じことは『史記』封禪書にもみえるが、そこでは、公孫卿の進言によって甘泉宮を擴充し、仙人を招くための建物を整備したことに續いて述べられている。

公孫卿曰、……今陛下可爲觀、如緱城、置脯棗、神人宜可致也。……於是甘泉更置前殿、始廣諸宮室。夏、有芝生殿房內中。（公孫卿曰く、……今陛下觀を爲り、緱城のごとくし、脯棗を置くべし、神人宜しく致すべきなりと。……是に於いて甘泉に更に前殿を置き、始めて諸宮室を廣む。夏、芝の殿房內中に生うる有り。）

甘泉宮は、公孫卿が引く申公の言によれば、黃帝が諸神に面會したところであり（封禪書）、漢室の祭祀において重要な場所であった。

「九莖連葉」は、さきに引いた武帝紀應劭注にも、「芝、芝草也、其葉相連。」とあった。キノコの叢生する樣子を、九本の莖から生じた葉が相連なっていると見て、瑞祥としたのであろう。なお後世では、宣帝の神爵元年（前六一）の詔にも、その前年の元康四年に「金芝九莖」が現れたという（『漢書』八宣帝紀）。

◎宮童效異　披圖案諜

「宮童」は宮廷にいるこどもたち。「效異」は不思議な瑞祥を

◎蔓蔓日茂　芝成靈華

獻上すること。臣瓚注に「宮之童豎致此異瑞也。（宮の童豎　此の異瑞を致すなり。）」

「諜」は系譜が述べられた書。蘇林注に「諜、譜弟也。（諜は、譜弟なり。）」「譜弟」は「譜第」と同じ。もとは「弟」の下に「之」字があったが、宋祁の説によって削る。

◎玄氣之精　回復此都

「玄氣」は天の氣。「回復」は周りをめぐって歸ってくること。師古注に「玄、天也。言天氣之精、回旋反復於此。（玄は、天なり。言うこころは天氣の精、此に回旋反復す。）」「玄氣」の例は他に未見であるが、『周易』坤の文言傳に「天玄而地黄」とあるように、天は玄（黒）の色を持つと考えられてきた。

「此都」は、甘泉宮に近接する雲陽縣の縣城を指す。師古注に「雲陽之都、謂甘泉也。（雲陽の都は、甘泉を謂うなり。）」雲陽を都と稱するのは、『漢書』六武帝紀元封二年六月の詔（「齊房產草」の注釋參照）に靈芝の出現を述べた後、「賜雲陽都百戶牛酒。（雲陽都の百戶ごとに牛酒を賜う。）」という記述を承けたもの。その晉灼注には「武帝常以避暑、有宮觀、故稱都也。（武帝常に以て避暑し、宮觀有り、故に都と稱するなり。）」というが、師古はそれを否定して「都謂縣之所居在宮側者耳。賜不徧其境內、故指稱其都。（都は、縣の居る所　宮側に在る者を謂うのみ。賜うこと其の境內に徧ねからず、故に其の都を指稱す。）」といい、雲陽縣の全域ではなく、甘泉宮に近接していた縣城を指すとする。

「蔓蔓」は、果てしないさま。師古注に「蔓蔓、言其長久、日以茂盛也。（蔓蔓は、其の長久なるを言う、日に以て茂盛するなり。）」とあり、いつまでも續くさまと解しているようである。「蔓蔓」には「藐蔓蔓之不可量兮、縹緜緜之不可紆。（藐蔓蔓として量るべからず、縹緜緜として紆（めぐ）らすべからず。）」（『楚辭』九章・悲回風）のように、果てしない廣がりを表す例がある。「曼曼」という表記ならば、「終長夜之曼曼兮、掩此哀而不去。（長夜の曼曼たるを終うるまで、此の哀しみを掩えども去らず。）」（同上）のように、長く續く時間を表すこともある。しかし、ここで植物が歌われ、「茂」という動詞が續くことからすると、「采三秀兮於山間、石磊磊兮葛蔓蔓。（三秀を山間に采る、石　磊磊として葛　蔓蔓たり。）」（九歌・山鬼）と同様、芝草が繁茂していく様子の形容とも考えられる。

「芝」の花という表現については、司馬相如「大人賦」に「呼吸沆瀣兮餐朝霞、噍咀芝英兮嚼瓊華。（沆瀣を呼吸し朝霞を餐す、芝英を噍咀して瓊華を嚼う。）」とあり、仙人が霞とともに、芝の花を食べるという描寫がある。

《后皇》（第十四）

后皇嘉壇　　后皇の嘉壇
立玄黃服　　玄黃の服もて立つ

物發冀州　物　冀州に發し
兆蒙祉福　兆　祉福を蒙る
沇沇四塞　四塞に沇沇（えんえん）とし
徦狄合處　徦狄　合處せり
經營萬億　萬億を經營し
咸遂厥宇　咸　厥の宇を遂げん

后皇十四

【押　韻】

服・福―職部　處・宇―魚部

【通　釋】

后土・皇天のめでたき祭壇
天地の色の祭服を着て立つ
瑞物は冀州にいでて
兆民は福をこうむる
その福は邊境まで流れ込み
遠き夷狄は服從する
萬億の事物を統治し
みな有るべき場所を得んことを

【注　釋】

◎后皇嘉壇　立玄黃服

后（后土）と皇（皇天）とを祭壇にて祀る歌である。

師古注に「壇、祭壇也。服、祭服也。」「立玄黃服」については「祭服を着て立つ」という方向で解釋したが、祭服の制度を確立したと解釋することも可能であろう。

王先謙は『漢書』六武帝紀元鼎四年（前一一三）十一月甲子の條に「立后土祠于汾陰脽上。（后土祠を汾陰脽上に立つ。）」とあるのをを擧げ、この后土祠に關連して作られた歌であろうと推測する。

「后皇」の用例としては『楚辭』九章・橘頌の「后皇嘉樹、橘徠服兮。（后皇の嘉樹、橘　徠りて服す。）」［王逸の章句に、「后、后土也。皇、皇天也。」］」が擧げられる。

「嘉壇」の用例としては、郊祀歌の《五神》（第十六）に「扢嘉壇、椒蘭芳。（嘉壇を扢（くんが）きて、椒蘭　芳し。）」とあるほか、祭壇は「中壇（《帝臨》第二）」「紫壇（《天地》第八）」など郊祀歌にたびたび登場する。

「玄黃」は、天の色である玄（黑）と、地の色である黃。『周易』坤の文言傳に「夫玄黃者天地之雜也。天玄而地黃。（夫れ玄黃なる者は天地の雜わりなり。天は玄にして地は黃なり。）」とある。

◎物發冀州　兆蒙祉福

「物」は、元鼎四年六月に后土祠のそばから出土した寶鼎を指

す。晉灼注に「得寶鼎於汾陰也。（寶鼎を汾陰に得るなり。）」《景星》（第十二）に「汾脽出鼎」とあったのを參照。

「冀州」は、臣瓚注に「汾陰屬冀州。（汾陰は冀州に屬す。）」『尚書』禹貢で中國を九州に分けたうちの一つ。今の山西省から河北省・河南省にまたがっていた。漢代には、冀州は河北・河南兩省にほぼ限られ、今の山西省に屬する汾陰の地は幷州に屬していたが、ここは古い呼び方によっている。『漢書』六武帝紀元鼎四年の詔でも「祭地冀州、瞻望河洛、巡省豫州、觀于周室、邈而無祀。（地を冀州に祭り、河洛を瞻望し、豫州を巡省し、周室を觀るに、邈かに祀無し。）」という。

「兆」は兆民、多くの人民。《玄冥》（第六）に「兆民反本、抱素懷樸。（兆民本に反り、素を抱き樸を懷く。）」

「祉福」の用例については《天門》（第十一）を參照。

◎沇沇四塞　假狄合處

「沇沇」は、水が流れるように廣まるさま。孟康注に「沇、音兗。」、師古注に「沇沇、流行之貌也。」

『說文解字』一一上水部にあるように、「沇」は河川の名として用いられるのが通常である。「流れる」という義での用例としては、司馬相如「天子遊獵賦（上林賦）」に溪流が平地に流れ出るところを描いて「沇溶淫鬻、散渙夷陸。（沇溶とし淫鬻として、夷陸に散渙す。）」というのがおそらく初出である。

「四塞」は、四方の要害。戰國期には、『史記』六九蘇秦列傳の「秦四塞之國。（秦は四塞の國なり。）」というように、四方を天然の要害で圍まれた秦の關中を指した。『史記』七項羽本紀の「關中阻山河四塞。（關中は山河四塞に阻まる。）」もそれを承けたもの。しかしここでは漢の天下統一を反映し、四方の邊境の地を指す。司馬相如の「封禪文」にも「大漢之德、逢涌原泉、沕潏漫衍、旁魄四塞、雲專霧散、上暢九垓、下泝八埏。（大漢の德、逢涌すること原泉のごとく、沕潏として漫衍し、四塞に旁魄し、雲專し霧散して、上りて九垓に暢び、下りて八埏に泝る。）」（『史記』司馬相如列傳）という例がある。

「假狄」は、遠方の異民族。師古注に、「假狄、遠夷也。合處、內附也。假卽遐字耳、其字從彳。彳音丑益反。（假狄は、遠夷なり。合處は、內に附くなり。假は卽ち遐字なるのみ、其の字　彳に從う。彳、音は丑益の反。）」なお王先謙は『詩經』大雅・瞻卬の「舍爾介狄、維予胥忌。（爾きを舍て狄きを介いにす、維れ予と胥忌む。）」の毛傳に「狄、遠。」とあるのを根據に、「狄」は「逖」の假借であって、「假狄」二字ともに遠方と解すべきとするが、とらなかった。

◎經營萬億　咸遂厥宇

「經營」の用例は『詩經』『楚辭』ともに確認できるが、兩書でその意味を異にする。『詩經』では、小雅・北山「旅力方剛、經營四方。（旅力　方に剛たり、四方を經營せん。）」、大雅・江漢「經營四方、告成于王。（四方を經營し、成を王に告ぐ。）」など、「統治する」という方向で用いている。他方、『楚辭』では、遠遊「經營四荒兮、周流六漠。（四荒を經營し、六漠を周流す。）」

のように、「さまよう」という方向で用いている。司馬相如の賦でも、「天子游獵賦（上林賦）」の「酆鄗潦潏、紆餘委蛇、經營乎其內。（酆・鄗［川の名］潦潏し、紆餘委蛇として、其の內を經營す。）」、「大人賦」の「經營炎火而浮弱水兮、杭絕浮渚而涉流沙。（炎火を經營して弱水に浮かび、浮渚に杭絕して流沙を涉る。）」など、いずれも『楚辭』の用法を踏襲している。ここでは郊祀歌の性質や「萬億」という目的語、「四塞」「假狄」といった語が用いられていることから、『詩經』での用いられ方に據って「統治」の方向で解釋した。

「咸遂厥宇」は、みなが各々の居るべき場に安住していること。師古注に、「宇、居也。言我經營萬方億兆、故得咸遂其居。（宇は、居なり。言うこころは我　萬方億兆を經營し、故に咸　其の居を遂ぐるを得るなり。）」

《華爗爗》（第十五）

華爗爗　固靈根　　華は爗爗たり　靈根を固とす
神之斿　過天門　　神の斿ぶ　天門を過ぎ
車千乘　敦昆侖　　車千乘　昆侖に敦む
神之出　排玉房　　神の出づる　玉房を排し
周流雜　拔蘭堂　　周流して雜り　蘭堂に拔る

神之行　旌容容　　神の行ける　旌は容容
騎沓沓　般縱縱　　騎は沓沓　般として縱縱たり
神之徠　泛翊翊　　神の徠たる　泛として翊翊たり
甘露降　慶雲集　　甘露は降り　慶雲は集う
神之揄　臨壇宇　　神の揄かる　壇宇に臨み
九疑賓　夔龍舞　　九疑は賓たりて　夔龍は舞う
神安坐　鶉吉時　　神は安坐し　吉時に鶉け
共翊翊　合所思　　共、しく翊翊として　思う所に合う
神嘉虞　申貳觴　　神は嘉虞し　貳觴を申ね
福滂洋　邁延長　　福は滂洋とし　邁として延長す
沛施祐　汾之阿　　沛として祐を施せり　汾の阿
揚金光　橫泰河　　金光を揚げ　泰河に橫れ
莽若雲　增陽波　　莽たること雲の若く　波を增陽す
徧臚驩　騰天歌　　徧く驩びを臚べ　天に歌を騰らす

華爗爗十五

【押　韻】

根・門・侖―眞部　房・堂―陽部　容・縱―東部　翊―職部、集―緝部（合韻）　宇・舞―魚部　時・思―之部　觴・洋・長―陽

部　阿・河・波・歌―歌部

【通　釋】

金根車の華蓋はまばゆくかがやき　靈妙なる金の支柱に支えられる
神靈の遊ぶや　天門を過ぎ
車は千臺　昆侖山にあつまる
神靈の現れるや　玉房の扉を押し開け
めぐり出入りし　蘭堂にやどられる
神靈の行くところ　旌はあまたはためき
騎兵はきびきびと動き　どこまでも連なっている
神靈の來たるや　そのさまはただよい浮遊し
めぐみの雨が降り　慶雲が集う
神靈が招かれて　祭壇に降臨すれば
九疑山より帝舜が賓客として至り　夔や龍が舞う
神靈は安坐して　よき時に翔けあがられ
（私は）うやうやしく　神靈と一つになる
神靈はたのしまれ　さかずきを重ね
福はゆたかに廣がり　とめどなく延びゆく
沛然と汾水の阿（くま）にめぐみを施され
（めぐみは）金色の光をあげて大河にあふれ
莽々とまるで雲のように　波を増してゆく
あまねくよろこびを申し上げ　天に歌をたてまつる

【注　釋】

◎華爛爛　固靈根

「華」は神靈の乘る車の華蓋。王先謙は「此謂靈之車也。華與上金支秀華同義。（此れ靈の車を謂うなり。「華」は上の「金支秀華」と同義なり。）」という。「金支秀華」は、禮樂志で郊祀歌の前に載せる「安世房中歌」十七章の第一章「金支秀華、庶旄翠旌。」を指し、その臣瓚注に、「以黃金爲支、其首敷散、若草木之秀華也。（黃金を以て支［＝枝］と爲し、其の首　敷散し、草木の秀華のごときなり。）」と説かれる。車の中心に柱が立ち、そこから金の枝が伸び、花が咲いたようになった天蓋のこと。

「固靈根」について、先謙は「金華下有根莖、故云固靈根。（金華は下に根莖有り、故に「靈根を固にす」と云う。）」といい、華蓋を支える柱を根莖にたとえたと説き、それを『後漢書』志二九輿服志上にみえる「金根車」と結びつける。

金根車については、『後漢書』輿服志上に「乘輿・金根・安車・立車……羽蓋華蚤。」、「太皇太后・皇太后法駕、皆御金根。」などとある。前者の徐廣注には「金華施橑末、有二十八枚。（金華は橑末に施し、二十八枚有り。）」、後者の李賢注には「金根、重翟羽蓋者也。（金根は、重翟の羽蓋なる者なり。）」といい、屋根は雉の羽で覆われ、たるきの先には花の形の金飾りのついた豪華な車であった。

「爛爛」の用例としては、『詩經』小雅・十月之交の「爛爛震電、不寧不令。（爛爛たる震電、寧からず令（よ）からず。）」が擧げら

れる。

◎神之斿　過天門　車千乘　敦昆侖

師古注に「敦讀曰屯。屯、聚也。（敦は讀みて屯と曰う。屯、聚なり。）」「天門」については《天門》（第十一）を、「昆侖」については《天馬》（第十）をそれぞれ參照。

『楚辭』離騷で主人公が天をゆくさまを描く「屯余車其千乘兮、齊玉軑而並馳。（余が車を屯むること其れ千乘、玉軑を齊しくして並び馳す。）」という句も思い合わされる。

◎神之出　排玉房　周流雜　拔蘭堂

「玉房」は、《練時日》（第一）に「瑤堂」、《天馬》（第十）の第二首に「玉臺」といった類語がある。

「周流」は《景星》（第十二）に既出。

「拔」は、師古注に、「拔、舍止也、音步曷反。（拔は、舍止なり、音は步曷の反。）」といい、「やどる」の意。「拔」に通常「やどる」の意はなく、官本の考證では、「案如顏注、則本文拔字應作召伯所茇之茇。（案ずるに顏注のごとくなれば、則ち本文の「拔」字　應に「召伯所茇（召伯の茇る所）」の「茇」に作るべし。）」といい、文字を改めるべきとする。「召伯所茇」は、『詩經』召南・甘棠の「蔽芾甘棠、勿翦勿伐、召伯所茇。（蔽芾たる甘棠、翦るなかれ伐るなかれ、召伯の茇る所なり。）」を指す。ただし王先謙は、『漢書』二三刑法志に「春振旅以搜、夏拔舍以苗。（春は振旅して以て搜し、夏は拔舍して以て苗す。）」とあるのを引き、「拔」は「茇」の假借であり、改める必要はないとする（先謙の引用で「秋拔舍以苗」とするのは誤り）。

「蘭堂」は、『楚辭』九歌・湘夫人に「桂棟兮蘭橑、辛夷楣兮葯房。（桂の棟に蘭の橑（たるき）、辛夷の楣（まぐさ）に葯の房。）」とある。

◎神之行　旌容容　騎沓沓　般縱縱

神靈の隊列が、旗をたなびかせ、騎を連ねてゆくさまである。

「容容」は、師古注に「容容、飛揚之貌。」また「容音勇。一曰、容讀如本字。（容は音、勇なり。一に曰く、容は讀みて本字の如し。）」といい、上聲と平聲の二音を示す。

「容容」は『楚辭』に用例が多い。それらに照らせば、單に飛ぶさまというのみならず、多くのものが集まるさまであるようだ。

・九歌・山鬼「表獨立兮山之上、雲容容兮而在下。（表として獨り立つ山の上、雲　容容として下に在り。）」

・九章・悲回風「紛容容之無經兮、罔芒芒之無紀。（紛として容容として經無く、罔として芒芒として紀無し。）」

・九辯「載雲旗之委蛇兮、扈屯騎之容容。（雲旗の委蛇たるを載せ、屯騎の容容たるを扈（したが）う。）」

なお王先謙は、『文選』張衡「東京賦」の「紛焱悠以容裔。（紛として焱悠として以て容裔たり。）」を擧げ、「容裔」（薛綜注に「容裔、高低之貌。」）を重ねて言えば「容容裔裔」となるのであって、「容容」は《練時日》（第一）に見えた「裔裔」と同義であると論じる。《練時日》の「先以雨、般裔裔。」の句も、神靈の隊列の盛んなさまをいうものであった。當該の項を參照。

「沓沓」は、師古注に「沓沓、疾行也。」『孟子』離婁上に、

『詩經』大雅・板の「天之方蹶、無然泄泄。（天の方に蹶くに、然く泄泄たること無かれ。）」の句を説いて、「泄泄、猶沓沓也。事君無義、進退無禮、言則非先王之道者、猶沓沓也。（泄泄は、猶お沓沓のごときなり。君に事うるに義無く、進退に禮無く、言は則ち先王の道に非ざる者は、猶お沓沓のごときなり。）」という。ちなみに『說文』二上口部には同じ詩を引いて「呰呰」に作り、「呰、多言也。」と說き、五上曰部でも「沓、語多沓沓也。（沓は、語の多きこと沓沓たるなり。）」という。ここの「沓沓」も、單に移動速度の速さのみをいうのではなく、數の多さが含意され、多くの騎兵が機敏に動くさまを言っているのではなかろうか。

「般」は、連なるさま。師古注に、「般、相連也。（般は、相い連なるなり。）」《練時日》にも「般裔裔」とあるのはさきにふれた。

「縱縱」は、多いさま。師古注に「縱縱、衆也。」音は「ソウソウ」。孟康注に「縱音總。」、晉灼注に「音人相縱勇作惡。（音人　相い縱勇して惡を作す。）」、師古注に「縱音總。縱音才公反。」ちなみに晉灼注の「縱勇」は、「慫慂」に通じ、人をそそのかすことであるが、その「縱」のように讀むという指示である。

「縱縱」を「ソウソウ」と讀む例としては、『禮記』檀弓上「喪事欲其縱縱爾。（喪事は其の縱縱爾たらんことを欲す。）」の鄭玄注に「縱讀如總領之總。（縱は讀みて總領の總の如し。）」という。ただしこれは「趨事貌」すなわち急いで事にあたるさまであり、意味は異なる。或いは「總總」とも作り、『楚辭』離騷に「紛總總其離合兮、斑陸離其上下。［王逸注：總總猶僔僔。聚貌。］（紛として總總として其れ離合し、斑として陸離として其れ上下す。）［王逸注：總總、猶お僔僔のごとし。聚まる貌なり。］」、『楚辭』九歌・大司命に「紛總總兮九州、何壽夭兮在予。（紛として總總たる九州、何ぞ壽夭　予に在らんや。）［王逸注：總總、衆貌。］」といった用例がある。

◎神之徠　泛翊翊　甘露降　慶雲集

「翊翊」には師古が「翊音弋入反、又音立。（翊、音は弋入の反、又は音、立なり。）」と、通常の「ヨク」とは異なる音を指示するが、單に下句の「集」と韻を合わせたもの。先謙は『說文解字』四上羽部を引いて「翊、飛皃。（翊、飛ぶ皃なり。）」と注している。「翼翼」とも作り、「翼翼」は『詩經』『楚辭』においてたびたび用いられる。この語はこの歌において二度用いられているが、同じ意味とは考えにくく、ここでは『詩經』小雅・采薇の「四牡翼翼、象弭魚服。（四牡翼翼たり、象弭　魚服あり。）［毛傳：翼翼、閑也。］」や采芑の「方叔率止、乘其四騏、四騏翼翼。（方叔　率い、其の四騏に乘り、四騏翼翼たり。）［鄭箋：翼翼、莊健貌。］」、或いは『楚辭』離騷の「鳳皇翼其承旂兮、高翱翔之翼翼。（鳳皇　翼しみて其れ旂を承け、高く翱翔して翼翼たり。）［王逸注：翼翼、和貌。］」と同様の、ゆったりとしたさまであろう。とりわけ「離騷」の、高く天空を驅けめぐるイメージに近い。

「慶雲」には如淳が『漢書』二六天文志を引き「若烟非烟、若雲非雲、郁郁紛紛、是謂慶雲。」（烟の若く烟に非ず、雲の若く雲

に非ず、郁郁紛紛とす、是れ慶雲と謂う。)」と注している(天文志の原文には、「郁郁紛紛」のあとに「蕭索輪囷」の一句がある)。

「甘露」は《惟泰元》(第七)參照。

◎神之揄　臨壇宇

師古注に「揄、引也。壇宇、謂祭祠壇場及宮室。言神引來降臨之也。(揄は、引なり。壇宇は、祭祠の壇場及び宮室を謂う。言うこころは神　引かれて來たり之に降臨するなり。)揄音踰。」天より降ってきた神靈を祭壇に招くことをいう。「壇」は郊祀歌にたびたび登場する祭祀の場である。《帝臨》「帝臨中壇」の項を參照。

◎九疑賓　夔龍舞

如淳注に「九疑、舜所葬。言以舜爲賓客也。夔典樂、龍管納言、皆隨舜而來、舞以樂神。(九疑は、舜の葬らるる所なり。言うこころは舜を以て賓客と爲すなり。夔は樂を典り、龍は納言を管り、皆舜に隨いて來り、舞いて以て神を樂します。)」祭壇に降臨した神靈の元に、いにしえの帝舜も客人としてあらわれ、帝舜に付き從ってきた臣下の夔や龍が舞を披露するという情景である。

「九疑」(或いは九嶷)は『山海經』海內經に「南方蒼梧之丘、蒼梧之淵、其中有九嶷山。舜之所葬、在長沙零陵界中。(南方の蒼梧の丘、蒼梧の淵、其の中に九嶷山有り。舜の葬らるる所にて、長沙零陵界中に在り。)」とある。『楚辭』離騷に「百神翳其備降兮、九疑繽其並迎。(百神　翳いて其れ備く降り、九疑　繽として其れ並び迎う。)」、『楚辭』九歌・湘夫人に「九嶷繽兮並迎、靈之來兮如雲。(九嶷　繽として並び迎え、靈の來るや雲の如し。)」とあり、もとは長江流域における神山であった。

「夔龍舞」の典故としては、『尚書』舜典の「夔曰、於、予擊石拊石、百獸率舞。(夔曰く、「於、予　石を擊ち石を拊たば、百獸率い舞わん。」)」が擧げられる。夔は『山海經』大荒東經に見え、古くは音(特に雷鳴音)と關連づけられる神獸である。

東海中有流波山、入海七千里。其上有獸、狀如牛、蒼身而無角、一足、出入水則必風雨、其光如日月、其聲如雷、其名曰夔。黃帝得之、以其皮爲鼓、橛以雷獸之骨、聲聞五百里、以威天下。(東海中に流波山有り、海に入ること七千里なり。其の上に獸有り、狀は牛の如く、蒼身にして角無く、一足にて、水に出入すれば則ち必ず風雨あり、其の光ること日月の如く、其の聲は雷の如し、其の名を夔と曰う。黃帝　之を得、其の皮を以て鼓と爲し、橛は雷獸の骨を以てし、聲は五百里に聞こえ、以て天下に威あり。)

◎神安坐　鵕吉時　共翊翊　合所思

師古注に「鵕、古翔字也。言神安坐回翔、皆趣吉時也。(鵕は、古の翔字なり。言うこころは神　安坐して回翔し、皆　吉時に趣くなり。)」

「翊翊」は上文にも見えたが、ここではそれとは意を異にし、師古が「共讀曰恭。翊翊、敬也。(共は讀みて恭と曰う。翊翊は、敬なり。)」と注している。ここでの「翊翊」は『詩經』大雅・大

明および烝民に現れる「小心翼翼」のように、うやうやしいさま、つつましいさまを表す。『詩經』ではこちらの意で用いる例が多い。なお《西顥》（第五）「附而不驕、正心翊翊。」も參照のこと。

「合所思」は、《景星》（第十二）に「周流常羊思所幷。」という同じ趣旨の句がある。

◎神嘉虞　中貳觴

師古注に「虞、樂也。貳觴、猶重觴也。（虞は、樂なり。貳觴は、猶お觴を重ぬるがごときなり。）」神靈が酒を酌み交わし樂しむ様子は郊祀歌に何度か登場する。「重觴」は《天門》（第十一）にあった。

◎福滂洋　邁延長

師古注に「滂洋、饒廣也。滂音普郎反。洋音羊、又音祥。」神靈のもたらす福が廣がってゆくさまである。

◎沛施祐　汾之阿　揚金光　横泰河　莽若雲　增陽波

師古注に「沛音普大反。沛然泛貌也。阿、水之曲隅。横、充滿也。泰河、大河也。（沛は音、普大の反。沛然として泛き貌なり。阿は、水の曲隅なり。横は、充滿なり。泰河は、大河なり。）」神靈の惠みが汾水のくまにあまねく廣がり、光を發しながら大河に滿ちあふれ、雲のようにもうもうと嵩を增してゆく。

「沛」は《練時日》（第一）にも「靈之來、神哉沛。」とみえ、そこでは神靈のやってくる速さを表現していたが、ここでは神靈の惠みのゆきわたることをいう。いずれにしても水のイメージと結びつく語であり、ここではそれがよくうかがえる。

「莽若雲」について、顔師古は「莽、雲貌。言光明之盛、莽莽然如雲也。（莽は、雲の貌なり。言うこころは光明の盛んなること、莽莽然として雲の如きなり。）」という。王先謙は、この一連の句を武帝の作とされる「秋風辭」（『文選』四五）の「泛樓舡兮濟汾河、横中流兮揚素波。（樓舡を泛かべて汾河を濟り、中流を横ぎりて素波を揚ぐ。）」と結びつけ、「莽若雲、言波如雲興。（「莽たること雲の若し」は、波　雲の如く興るを言う。）」とする。つまり汾河に浮かぶ舟から見た實景と解釋しているが、ここでは師古注に依り、神靈によって施された「祐」が「金光を揚げ」、「雲の如く」になるものと考えた。

「增陽波」について、王先謙は「陽揚古通」といい、また魏文帝「臨渦賦」（『藝文類聚』八）の「微風起兮水增波。（微風起ちて水は波を增す。）」をここに基づく表現として擧げる。ただしここでは、前の句と同様、神靈の惠みのさまとして譯出した。

郊祀歌でも《景星》（第十二）が鼎を汾陰に得て作られたものとされ、《后皇》（第十四）に「物發冀州、兆蒙祉福。（物　冀州に發し、兆　祉福を蒙る。）」といった句が見られるように、汾水は祭祀と深くかかわる地であった。

◎徧臚驩　騰天歌

師古注に「臚、陳也。騰、升也。」

「騰天歌」について、師古は「言陳其歡慶、令歌上升於天。（言うこころは其の歡慶を陳べ、歌をして天に上升せしむ。）」と注して、天に向けて歌をたてまつる様子と解釋する。一方、王先

謙は「帝自作秋風詞、故曰天歌。此禮后土祠畢濟汾河作。（帝自ら秋風詞を作る、故に天歌と曰う。此れ后土祠に禮して畢り汾河を濟りて作る。）」として、「天歌」を武帝の「秋風辭」のことであるという説を述べる。「秋風辭」の序には「上行幸河東、祠后土、顧視帝京欣然。中流與群臣飲燕、上歡甚、乃自作秋風辭。（上　河東に行幸し、后土を祠り、帝京を顧視して欣然とす。中流にて群臣と飲燕するに、上の歡くこと甚しく、乃ち自ら秋風辭を作る。）」という。しかしながら『漢書』にはこれを裏付けるような記述は見られないため、ここでは師古注に基づいて解釋した。

【餘說】《練時日》との類似

三言で統一された形式や、「神之〇」として神靈の動きを逐一述べる構成、さらには一つ一つの語彙に至るまで、《練時日》（第一）との共通點が多く、むしろ重複といってもよいほどである。《練時日》との間に何らかの機能分擔があったのか、あるいは元は別の機會に用いられた迎神曲であったのか、今後の研究が待たれる。

《五神》（第十六）

五神相　包四鄰　　五神は相たりて　四鄰を包む
土地廣　揚浮雲　　土地は廣く　浮雲を揚ぐ
扢嘉壇　椒蘭芳　　嘉壇を扢（みが）きて　椒蘭　芳し
璧玉精　垂華光　　璧玉　精たり　華光を垂る
益億年　美始興　　益すること億年にして　美　始めて興る
交於神　若有承　　神に交わり　若（すなわ）ち承有り
廣宣延　咸畢觴　　廣く宣延し　咸（み）な觴を畢ゆ
靈輿位　偃蹇驤　　靈輿　位し　偃蹇として驤（あ）ぐ
卉汨臚　析奚遺　　卉汨として臚（つら）なり　析（わ）かちて奚ぞ遺らん
淫淥澤　洸然歸　　淥澤に淫（ひた）らしめ　洸然として歸す

五神十六

【押　韻】

鄰・雲―眞部　芳・光―陽部　興・承―蒸部　觴・驤―陽部
遺・歸―脂部

【通　釋】

五帝は泰一神の補佐となって　四方を包み込み
大地は廣く　（天は）浮雲を揚げる
めでたき祭壇をみがけば　椒（はじかみ）や蘭がかぐわしく
璧玉は清らに　まばゆい光を放つ

永劫にめぐみをもたらし　さいわいは今まさに興り
神靈に交われば　ここに降臨あそばす
（神靈を）廣く呼びまねけば　さかずきを盡くし
（祭祀のもてなしが終わると）神靈の輿は居並んで　高く天へ上る
すばやく列をなしたかと思えば　分散してあとかたも殘らない
この世を福祿で充たし　（神靈は）深く廣い惠みを殘して歸る

【注　釋】

◎五神相　包四鄰

如淳注に「五帝爲太一相也。（五帝は太一の相と爲るなり。）」五神は青帝・赤帝・白帝・玄帝・黃帝の五帝のことであり、『史記』封禪書に「五帝、太一之佐也。（五帝、太一の佐けなり。）」という記述もある。「五帝」といわずに「五神」としたのは、「相」の地位であることによるのであろう。

このように五帝を泰一の下に置くのは、武帝期になって現れた新しい祭祀體系である（【餘説】參照）。『史記』封禪書にはその體系に基づく泰一の祭壇について、次のように言う。「令祠官寬舒等具太一祠壇。……五帝壇環居其下、各如其方。……其下四方地、爲醊、食群神從者及北斗云。（祠官寬舒等に令して太一の祠壇を具えしむ。……五帝の壇は其の下に環居し、各其の方の如し。……其の下四方の地、醊を爲し、群神の從者及び北斗を食（まつ）るという。）」これによると、中央に泰一の祭壇、その周圍に五帝、さらにその四方に群神を祀る三重構造であった。王先謙はこれをふまえ、この歌を郊祭において初めて泰一を祀ったときのものとし、この歌の「五神」は泰一をとりまく五帝、「四鄰」はさらにその外の群神に相當するという。

師古注に「包、含也。四鄰、四方。」

◎抎嘉壇　椒蘭芳

孟康注に「抎、摩也。」、師古注に「音公忽反。」、さらに「謂摩拭其壇、加以椒蘭之芳。（其の壇を摩拭し、加うるに椒蘭の芳を以てするを謂う。）」という。香草を供えて祭壇を整える様子である。

「壇」は郊祀歌に頻出しており、「嘉壇」は《后皇》（第十四）にもみえた。《帝臨》（第一）に「中壇」、《天地》（第八）に「紫壇」、《華爗爗》（第十五）に「壇宇」などの例がある。

祭祀に香草を用いるのは、《練時日》（第一）にも「俠嘉夜、莅蘭芳。（嘉夜に俠みて、莅蘭　芳し。）」とあった。椒・蘭は中でも代表的な香草で、『楚辭』九歌・東皇太一に「蕙肴蒸兮蘭藉、奠桂酒兮椒漿。（蕙肴蒸（すす）めて蘭もて藉（し）き、桂酒と椒漿とを奠（すす）む。）」、湘夫人に「蓀壁兮紫壇、罔芳椒兮成堂。桂棟兮蘭橑、辛夷楣兮葯房。（蓀壁と紫壇、芳椒を罔（し）き堂を成す。桂の棟と蘭の橑（たるき）、辛夷の楣と葯房あり。）」などとある。

◎璧玉精　垂華光

美しい玉璧が祭壇に供えられ、輝くさまである。師古注に「言禮神之璧乃玉之精英、故有光華也。（言うこころは神を禮するの

璧　乃ち玉の精英、故に光華有るなり。)」

元鼎五年（前一一二）の泰一祭祀については、『史記』封禪書（『漢書』郊祀志上でもほぼ同様）に次のように記述される。

有司云「祠上有光焉。」公卿言「皇帝始郊見太一雲陽、有司奉瑄玉嘉牲薦饗。是夜有美光、及晝、黄氣上屬天。」太史公、祠官寬舒等曰、「神靈之休、祐福兆祥、宜因此地光域立太畤壇以明應。」（有司云う「祠の上に光有り。」と。公卿言えらく「皇帝　始めて太一を雲陽に郊見するに、有司　瑄玉・嘉牲を奉りて薦饗す。是の夜　美光有り、晝に及びて、黄氣上りて天に屬す。」と。太史公、祠官寬舒等曰く、「神靈の休、福を祐け祥を兆す、宜しく此の地の光域に因りて太畤の壇を立て以て應を明らかにすべし。」と。）

先謙はこの前半部分を擧げ、祭壇に玉が奉られ、それが光っていたのだとする。

◎益億年　美始興

師古注に「言福慶方興起也。（言うこころは福慶の方に興起するなり。）」

「億年」は『尚書』洛誥に「公其以予萬億年、敬天之休。（公其れ予が萬億年を以て、天の休を敬え。）」という用例があるように、古くから用いられる語であるが、漢代には吉祥語として用いられ、「億年無疆」と記された瓦當がいくつか出土している。

◎交於神　若有承

師古注には「言神來降臨、故盡其肅恭。（言うこころは神來りて降臨し、故に其の肅恭を盡くす。）」といい、人が神の降臨を恭しく承けると解しているようだが、ここでは、神が人の祭祀を受け容れるという方向で解した。先謙は『漢書』郊祀志上の先に擧げた部分の後半で、祭祀の夜には光が、晝には黄色い氣が天に上る靈驗が起ったという記述を指摘し、これらが「承」であるという。

「若」は「ごとし」と解しているものが多いが、ここでは「乃（すなわち）」の意で解した。『國語』周語中に『書』（逸書）を引いて、「必有忍也、若能有濟也。（必ず忍ぶ有れば、若ち能く濟る有るなり。）」とあり、その韋昭注に、「若、猶乃也。」王引之『經傳釋詞』などに指摘がある。

◎廣宣延　咸畢觴

師古注に「言徧延諸神、咸歆祭祀、畢盡觴爵也。（言うこころは徧く諸神を延き、咸な祭祀を歆け、畢く觴爵を盡くすなり。）」類似表現として《天門》（第十一）に「重觴」、《華爗爗》（第十五）に「貳觴」とある。

◎靈輿位　偃蹇驤

神靈の乘る輿が天上高くへのぼっていく情景である。師古注には「神既畢饗、則嚴駕靈輿、引其侍從之位偃蹇高驤也。（神　既に饗を畢えれば、則ち靈輿を嚴え駕し、其の侍從の位を引き偃蹇として高く驤ぐるなり。）」といい、「位」を名詞として解しているが、王先謙は「各就其列也。（各おの其の列に就くなり。）」という動詞であるとし、《赤蛟》（第十九）にも「百君禮、六龍位。

（百君禮し、六龍位す。）」という例があることを指摘する。

「偃蹇」は、師古注に「蹇音居偃反。」というように、疊韻の語。『楚辭』離騷に「望瑤臺之偃蹇兮、見有娀之佚女。（瑤臺の偃蹇たるを望み、有娀の佚女を見る。）［王逸注：偃蹇、高貌。］」、「何瓊佩之偃蹇兮、衆薆然而蔽之。（何ぞ瓊佩の偃蹇たる、衆薆然として之を蔽う。）［王逸注：偃蹇、衆盛貌。］」、九歌・東皇太一に「靈偃蹇兮姣服、芳菲菲兮滿堂。（靈　偃蹇として姣服し、芳　菲菲として堂を滿たす。）［王逸注：偃蹇、舞貌。］」ほか數例あり、いずれも「高く上がるさま」「盛んであるさま」といった意で、多くのものが高く舞い上がる様子をいうのであろう。

◎卉汨臚　析奚遺

師古注に「卉汨、疾意也。臚、陳也。析、分也。奚、何也。言速自陳列分散而歸、無所留也。（言うこころは速く自ら陳列分散して歸し、留まる所無きなり。）汨（イツ）、音于筆反。」神靈の輿やその從者がすばやく隊列をなして天に上り、散り散りになる情景である。「卉汨」という語は他に例を見ず、師古の注釋に從って「はやい」という意で解釋した。

「遺」はもと「道」に作る本があったが、錢大昭や王先謙は監本・閩本・官本がことごとく「遺」に作ることを指摘している。後の「歸」と押韻する箇所であるので、「遺」が正しいであろう。

◎淫淥澤　洼然歸

顔師古は「淫、久也。淥澤、澤名。言我饗神之後、久在淥澤、乃洼然而歸也。（淫は、久なり。淥澤は、澤名なり。言うこころは我　饗神の後、久しく淥澤に在り、乃ち洼然として歸るなり。）淥、音綠（リョク）。」といい、ここでの主語は祭祀を行った帝王であるとする。

これに對し宋祁は「淥、當是福祿之祿。淫、溢也。言神之賜祿洼然廣溢、然後歸而上天也。（淥は、當に是れ福祿の祿たるべし。淫は、溢なり。言うこころは神の祿を賜うこと洼然として廣く溢れ、然る後に歸りて天に上るなり。）」と、「淥」字を「祿」と解釋した上で（その場合「澤」も「めぐみ」の意となろう）、主語は神靈の側であるとする。

「淥澤」は他に用例がなく、地名としても文獻に見あたらないことから、ここでは宋祁によって、福が溢れ、神靈が天に歸るさまと解釋した。

「洼」は、「汪」の異體字。師古注に「洼（ワウ）音烏黃反。」『說文解字』一一上水部に「汪、深廣也。」とあり、本來は水が廣く深いさまを指すが、宋祁に從って神靈の惠みを形容したものと解した。

【餘說】泰一神祭祀の開始とその郊祀歌への反映

この歌は冒頭に「五神相たり」とあり、五帝が泰一の下位にあることが示されるが、『史記』封禪書およびそれを承けた『漢書』郊祀志の記述によれば、このような祭祀體系は、亳の人である謬忌（薄忌ともよばれる）が、「天神貴者泰一、泰一佐曰五帝。（天神の貴き者は泰一、泰一の佐を五帝と曰う。）」として泰一を祀る方法を奏上し、それに從って長安の東南郊に泰一祠が建てられた

のに始まる。その後元鼎五年（前一一二）に至り、雍の甘泉宮における郊祭（天の祀り）に際して、泰一―五帝―群神の三重構造の祭壇が築かれた（上文參照）。ここに、泰一を最高神とする體系が、それまでの五畤（五帝）を中心とする祭祀體系に取って代わったのである。

ところが郊祀歌を見渡すと、《帝臨》（第二）に「帝臨中壇、四方承宇。」とあり、それにつづく《青陽》《朱明》《西顥》《玄冥》は四方に相當するから、ここでは四章と中央の五帝が祀られ、そのうち中央の帝が最高位におかれている。趙敏俐『漢代樂府制度與歌詞研究』（商務印書館、二〇〇九）では、これら五首が泰一を最高神とする體系に合わないこと、歌詞が四言の齊言體で統一されていること、《青陽》以下の四章が「鄒子樂」とよばれ特別視されていることなどから、これらは泰一神祭祀が始まる前に成立したとしている。さらに、雍に泰一祠が築かれた元鼎五年は、郊祀歌の制作に大きく關わった樂官李延年が武帝にまみえた年でもあることから、この《五神》や、泰一をたたえる《惟泰元》（第七）をはじめ、郊祀歌の主要な部分はこの年以降に作られたと論じている。

《朝隴首》（第十七）

朝隴首　覽西垠　　隴首に朝（むか）いて　西垠を覽る
靁電𤇾　獲白麟　　𤇾に靁電し　白麟を獲たり
爰五止　顯黃德　　爰に五止　黃德を顯わす
圖匈虐　熏鬻殛　　匈虐を圖り　熏鬻は殛せらる
闢流離　抑不詳　　流離するを闢（しりぞ）け　不詳なるを抑え
賓百僚　山河饗　　百僚を賓して　山河に饗す
掩回轅　鬣長馳　　掩（たちま）ちに轅を回らし　鬣として長く馳す
騰雨師　洒路陂　　雨師を騰げ　路陂を洒（うるお）わしむ
流星隕　感惟風　　流星　隕ち　惟の風に感ず
簫歸雲　撫懷心　　歸雲を簫（ふ）み　懷心を撫す

朝隴首十七
元狩元年行幸雍獲白麟作
元狩元年、雍に行幸して白麟を獲て作る。

【押　韻】

垠・麟―眞部　德・殛―職部　詳・饗―陽部　馳・陂―歌部
風・心―侵部
師古注に「饗合韻音鄉」というが、「饗」「享」などが平聲であったことは、《惟泰元》（第七）參照。

【通　釋】

隴山の頂に向かって　西の果てを見る
寮祭に答えて雷鳴が起り　白い麒麟を捕らえた
白麟の五つの蹄は　漢王朝の土德を顯現している
凶悪なことをしようと圖り　そのために匈奴たちは滅ぼされた
各地をうろつくものを退け　不吉を呼ぶものを抑え
百神の官をもてなして　山河に食事を供える
にわかに轅を回して引き返し　延々と長い距離を疾走する
雨の神を飛翔させて　路傍を雨で潤わせる
流星が落ちて　善き教えを感じ
歸るための雲に乘り　異民族を懐柔する心を抱く

【注　釋】

◎朝隴首　覽西垠

「隴首」は、隴山の頂。師古注に「隴坻之首也。坻音丁禮反。」「西垠」は、西の果て。師古注に「垠、厓也。」この二句について、臣瓚は「謂朝於隴首而覽西北也。（隴首に朝いて西北を覽るを謂うなり。）」といい、隴山のある西北の方角を見ることとする。

『漢書』六武帝紀の太始二年（前九五年）の三月の詔に、「有司議曰、往者朕郊見上帝、西登隴首、獲白麟以饋宗廟、渥洼水出天馬、泰山見黄金、宜改故名。今更黄金爲麟趾褭蹏以協瑞焉。（有司議して曰く、「往者　朕　郊して上帝に見え、西して隴首に登るに、白麟を獲て以て宗廟に饋り、渥洼水に天馬出で、泰山に黄金見る、宜しく故名を改むべし。」と。今　黄金を更めて麟趾褭蹏［麟や馬の蹄の形］と爲し以て瑞に協す。）」とある。武帝がかつて上帝の祭祀をした際、隴山に登って白麟を獲たというのは、この歌の内容と合う。

◎靁電寮　獲白麟

「寮」は火を焚いて天を祀る祭祀のこと。『説文解字』一〇上火部に「寮、柴祭天也。（寮は、柴して天を祭るなり。）」雷との關わりについては、臣瓚注の「寮祭五時、皆有報應、聲若靁、光若電也。（五時に寮祭し、皆　報應有り、聲は靁の若し、光は電の若し。）」という解釋に從い、寮祭に對する天からの返事として雷のような音と光が起こったと解した。一方、師古注には「寮、古燎字。」という。「燎」には「やく」と「あきらか」の兩義があるので、雷の明るく光る様子とも考えられる。

◎爰五止　顯黄德

「爰」は助辭。師古注に「爰、曰也、發語辭也。」「五止」は、白麟に蹄が五つあること。師古注に「止、足也。時白麟足有五蹏。（止は、足なり。時に白麟の足に五蹏有り。）」『漢書』六四下終軍傳には、「從上幸雍祠五時、獲白麟、一角而五蹄。（上の雍に幸して五時を祠るに從うに、白麟を獲たり、一角にして五蹄なり。）」という。

「黄德」は用例を確認できないが、漢王朝の土德と解した。

◎圖匈虐　熏鬻殛

「匈虐」は「凶虐」として解した。

「熏鬻」は異民族匈奴の呼び名。應劭注に「熏鬻、匈奴本號也。」表記はさまざまで、『孟子』梁惠王下に「獯鬻」、『史記』四周本紀に「薰育」、『漢書』九四上匈奴傳上に「薰粥」などの例がある。

「殛」は、師古注に、「殛（キヨク）、窮也。一曰、殛、誅也、音居力反。」

◎闢流離　抑不詳

「流離」は居所の定まらない流民と解した。「流離」の初出は、『詩經』邶風・旄丘の「瑣兮尾兮、流離之子。」であり、毛傳に「流離、鳥也。少好長醜。（少くして好（みめよ）けれど長じて醜し。）」、釋文及び疏に引く陸璣の『草木疏』に「流離、梟也。」という。王念孫はこれを典據に、悪鳥とされるフクロウから轉じて悪人の意と解するが、牽強付會の感を免れない。

「流離」は前漢後半から流浪の意で用いることが多くなるが、武帝期以前の用例は少なく、司馬相如「天子游獵賦（上林賦）」の「流離輕禽、蹴履狡獸。（輕禽を流離し、狡獸を蹴履す。）」にしても、『文選』李善注に引く張揖が「流離、放散也。」というのに對し、『漢書』の顔師古注は「流離、困苦之也。（流離は、之を困苦せしむるなり。）」と說が定まらない。ただし『漢書』五三中山靖王勝傳の勝の上書に「斯伯奇之所以流離、比干之所以横分。（斯れ伯奇の流離する所以、比干の横ざまに分かたるる所以なり。）」とあるように、武帝期にも流浪の意で用いた例もある。また王念孫が「闢流離」と「抑不詳」は同義だとする點は傾聽すべきものであり、それらを勘案してよからぬ流民と解した。

「闢」は退ける意。師古は、「流離不得其所者、爲開道路、使之安集。（流離して其の所を得ざる者は、爲めに道路を開き、之をして安集せしむ。）」といい、「闢」を「開く」意で解しているが、退ける意のほうが自然であると考えられる。小竹武夫氏の譯では「流離せる悪人を闢（ひら）き除き」とし、「ひらく」と讀みつつ退けるという意味合いで解している。

「不詳」は不吉なこと、不吉を呼ぶもの。「詳」は「祥」に通じる。『周易』大壯の上六の象に、「不能退、不能遂、不詳也。（「退く能わず、遂ぐる能わず」とは、不詳なり。）」とある。「抑不詳」の句について師古は「違道不詳善者、則抑黜之、以申懲勸也。（道に違（たが）い詳善ならざる者は、則ち之を抑黜して、以て懲勸を申（の）ぶるなり。）」といい、善行を行わないものを退けて、勸善懲悪をはっきりとさせる、と解している。

◎賓百僚　山河饗

「百僚」は諸々の官僚。ここでは居並ぶ神々を指す。師古注に「百僚、百神之官也。」

◎掩回轅　鬻長馳

「掩」はたちまち。王先謙は「掩與奄同、謂超忽也。（掩は奄と同じ、超忽なるを謂うなり。）」という。《天馬》（第十）第一首に「籀浮雲、晻上馳。」とあるのも參照。

「鬻」は長いさま。如淳注に「鬻音槅（マン）。鬻鬻、長貌也。」師古注に「音武元反。」『說文解字』九上髟部に「鬻、髮長皃、从髟鬲、

讀若曼。（鬗は、髮の長き皃、髟・萬に從う、讀みて曼の若し。）」といい、髮の長いさまとするが、ほかに用例は見られない。

◎騰雨師　洒路陂

「雨師」は雨をつかさどる神のこと。「洒路陂」は路を清めること。雨の神の行爲である。師古注に「洒、灑也。路陂、路傍也。言使雨師灑道也。（洒は、灑なり。路陂は、路傍なり。雨師をして道を灑わしむるを言うなり。）」

神が降臨するときには雨が降り、それは雨の神が道を清めるのだと考えられていた。『楚辭』九歌・大司命に「令飄風兮先驅、使涷雨兮灑塵。（飄風をして先に驅けしめ、涷雨をして塵を灑わしむ。）」、『淮南子』原道にも「令雨師灑道、使風伯埽塵。（雨師をして道を灑わしめ、風伯をして塵を埽かしむ。）」とある。また《練時日》（第一）にも「靈之來、神哉沛。先以雨、般裔裔。（靈の來ること、神なるかな沛たり。先んずるに雨を以てし、般くこと裔裔たり。）」という。

◎流星隕　感惟風　籥歸雲　撫懷心

「流星」は、『楚辭』九辯「願寄言夫流星兮、羌儵忽而難當。（願わくは言を夫の流星に寄せん、羌　儵忽として當るに難し。）」のように、言傳をする對象となる例もあるが、通常は不吉なものと考えられていた。『春秋』莊公七年の經に「恒星不見、夜中星隕如雨。（恒星　見えず、夜中星隕つること雨の如し。）」「『左氏傳』のテクストによる」という。『漢書』二六天文志では、この記事をはじめ春秋時代における日食や彗星などにふれて、「當是時、禍亂輒應、周室微弱、上下交怨。（是の時に當りて、禍亂輒ち應じ、周室　微弱にして、上下交も怨む。）」という。

「籥」は踏む。師古注に「籥音躡。」「籥歸雲」は歸っていく雲に乘ること。《天馬》（第十）に「籥浮雲、晻上馳。（浮雲を籥みて、晻ち上馳す。）」という類句が見える。

「懷心」は懷柔の心。師古注に「懷心、懷柔之心也。（懷心は、懷柔の心なり。）」

この四句について王先謙は「見流星之隕、興好風之感、歸塗撫此、懷集四夷之心、不能忘也。蓋卽所見言之。（流星の隕つるを見て、好風の感を興し、歸塗に此れを撫し、四夷を懷集するの心、忘るる能わざるなり。蓋し見る所に卽きて之を言う。）」といい、流星を見たことから、異民族を慰撫する心持になったとする。しかし、先に述べたように流星が落ちるのは不吉なこととして認識されており、郊祀歌に詠まれること自體が奇妙である。あるいは異民族を討伐したことを象徴するのかも知れないが、それを裏づける資料はない。ここでの流星の意味づけには、まだ檢討が必要である。

◎元狩元年行幸雍獲白麟作

元狩元年は、前一二二年。『漢書』武帝紀同年の條に、「冬十月、行幸雍、祀五畤、獲白麟、作白麟之歌。（冬十月、雍に行幸し、五畤を祀り、白麟を獲て、白麟の歌を作る。）」という。郊祀歌のうち、制作年代が示されているものとしては、最も早く作られた歌である。

《象載瑜》（第十八）

象載瑜　白集西　　象載　瑜にして　白くして西に集う
食甘露　飲榮泉　　甘露を食み　榮泉を飲む
赤鴈集　六紛員　　赤鴈　集うこと　六にして紛員（ふんうん）たり
殊翁雜　五采文　　殊なる翁　雜りて　五采の文あり
神所見　施祉福　　神の見（あらわ）る所　祉福を施し
登蓬萊　結無極　　蓬萊に登り　無極を結（な）す

象載瑜十八

太始三年行幸東海獲赤鴈作

太始三年、東海に行幸して赤鴈を獲て作る。

【押　韻】

西・泉・員・文―眞部・元部（泉）通押　福・極―職部

師古注に「西、合韻音先」という。「西」は中古音では齊韻、上古音では脂部であるが、漢代には專ら眞部の字と押韻する。『漢魏晉南北朝韻部演變研究』一九九ページ注⑤參照。

【通　釋】

めでたき車はうつくしく白く　西方に集う
甘露を食し　榮泉の水を飲む
瑞祥である赤鴈が集い　その數は六羽と多く
頸の毛は混じりあって　五彩の文様をなしている
神靈のあらわれる所　めぐみを施して
蓬萊山に登り　果てしない幸いを成しとげる

【注　釋】

◎象載瑜　白集西

服虔注に「象載、鳥名也。」とあるのに對し、師古注は「此說非也。象載、象輿也。山出象輿、瑞應車也。瑜、美貌也。言此瑞車瑜然色白而出西方也。（此の說　非なり。象載は、象輿なり。山　象輿を出だす、瑞應の車なり。瑜は、美なる貌なり。言うところは此の瑞車　瑜然として色白くして西方に出づるなり。）」とする。服虔注はおそらく「赤鴈を獲て作る」というところから鳥と解釋したのであろうが、根據は未詳である。ここでは師古注に據り、瑞祥の車、神靈の車と解した。なお「象輿」は《赤蛟》（第十九）參照。

ただ「象載」という語は《景星》（第十二）「象載昭庭、日親以察。（象載　庭を昭し、日び親しみて以て察なり。）」に既出であるが、そこでは「縣象（天體）の祕事」という師古の解釋が妥當であろう（當該の條參照）。この歌の解釋において「景星」との關連を指摘したものは見られないものの、或いは星と解釋し、

「瑞祥の星が西方に集い白く輝いている」とすることも可能ではないだろうか。

◎食甘露　飲榮泉

師古注に「駕輿者之所飲食也。榮泉、言泉有光華。（輿を駕する者の飲食する所なり。榮泉、泉の光華有るを言う。）」

劉攽は「此詩四句先敘所見祥瑞之物也。（此の詩四句　先ず見る所の祥瑞の物を敘するなり。）」として、「象載瑜」を「黒車」、「白集西」を「雍之麟」と解する。この歌の前に收錄されている《朝隴首》が白麟を獲て作られたものであることから「白」を「白麟」と解釋したのであろうが、二首の制作年には三十年近い開きがある上、「白」一字で「白麟」とするにはやや疑問が殘る。また「象載瑜」を黒い車とする根據も未詳である。從ってここでは師古注に據った。

「甘露」は《惟泰元》（第七）、《華爗爗》（第十五）に既出。

◎赤鴈集　六紛員

師古注に「言六者、所獲赤鴈之數也。紛員、多貌也。言西獲象輿、東獲赤鴈、祥瑞多也。（六と言うは、獲る所の赤鴈の數なり。紛員は、多き貌なり。言うこころは西に象輿を獲、東に赤鴈を獲、祥瑞多きなり。）」『漢書』六武帝紀太始三年（前九四）の條に「二月、令天下大酺五日。行幸東海、獲赤鴈、作朱鴈之歌。幸琅邪、禮日成山。（二月、天下に令して大いに酺すること五日。東海に行幸し、赤鴈を獲、朱鴈の歌を作る。琅邪に幸し、日を成山に禮す。）」という記述がある。

「紛員」は、疊韻の語。師古注に「員音云。」錢大昭がいうように「紛紜」と同じであろう。盛大なさま。《天門》（第十一）に「紛云六幕浮大海。（紛云たる六幕　大海に浮かぶ。）」とあるのを參照。

赤鴈の數である「六」と、次の句に現れる「五」との組み合わせは、郊祀歌ではしばしば用いられる。《帝臨》（第二）參照。

◎殊翁雜　五采文

孟康は「翁、鴈頸也。言其文采殊異也。（翁、鴈の頸なり。其の文采の殊異なるを言うなり。）」といい、鴈の頸の羽毛が他と異なり、鮮やかな模樣をなすこととする。沈欽韓は、『說文解字』四上羽部に「翁、頸毛也。」とあるのを引き、「頸上毛易雜色。（頸上の毛　色を雜え易し。）」として孟康の說を補強する。さらに「翁」が「雜」の意をもつ例として、『荀子』樂論の「塤篪翁博」を擧げ、『墨子』節葬下の「翁、縗絰。」を、縗の垂れることが鳥の頸毛のようだと解する。

ただ『荀子』の「塤篪翁博」については、兪樾がいうように、「翁」は「滃」であり、「翁博（＝滃渤）」の二字で一語として理解すべきであろう。『文選』一二郭璞「江賦」に「氣滃渤以霧沓、時鬱律其如煙。（氣は滃渤として以て霧沓く、時に鬱律として其れ煙の如し。）」、李善注に「滃渤、霧出貌。」とある。また『墨子』の原文には「哭泣不秩聲翁縗絰垂涕」とあるが、畢沅は「翁」は義未詳といい、洪頤煊は「翁」は上の句につき、かつ「嗌」（むせぶ）の誤りとし、吳毓江は「翁」を衍字とする。結

局、孟康注の根據としては『說文』の說解しか見あたらないのであるが、他によるべき解釋もないので、これによって解した。

なお「五」は前條にもふれたように特別な數であり、「五采」については、『史記』七項羽本紀に「吾令人望其氣、皆爲龍虎、成五采、此天子氣也。（吾　人をして其の氣を望ましむるに、皆龍虎と爲り、五采を成す、此れ天子の氣なり。）」という例がある。

◎神所見　施祉福　登蓬萊　結無極

師古注に「見、顯示也。蓬萊、神山也、在海中。結、成也。」

先謙は、この歌が『漢書』六武帝紀（前揭）にいう「朱雁之歌」であることをふまえ、そこに「登之罘、浮大海。（之罘に登り、大海に浮かぶ。）」と述べられる東方への遊行を詠み込んだものとする。

「祉福」は《天門》（第十一）に「函蒙祉福常若期、寂漻上天知厥時。（祉福を函蒙すること常に期するが若く、寂漻たる上天厥の時を知る。）」、《后皇》（第十四）に「物發冀州、兆蒙祉福。（物は冀州に發し、兆は祉福を蒙る。）」と複數の用例が見られる。

「無極」は「安世房中歌」第八章に「長莫長、被無極。（長は無極を被うより長なるは莫し。）」という用例がある。「無疆」と同じく、漢鏡などにも用いられる吉祥語である。

◎太始三年行幸東海獲赤鴈作

太始三年は、前九四年。『漢書』武帝紀の關連する記事は、「赤鴈集　六紛員」の項に引いた。郊祀歌のうちでは、最後に作られたものということになる。

《赤蛟》（第十九）

赤蛟綏　黃華蓋
露夜零　晝晻溘
百君禮　六龍位
勺椒漿　靈已醉
靈既享　錫吉祥
芒芒極　降嘉觴
靈殷殷　爛揚光
延壽命　永未央
杳冥冥　塞六合
澤汪濊　輯萬國
靈禗禗　象輿轙
票然逝　旗逶蛇
禮樂成　靈將歸
託玄德　長無衰

赤蛟十九

赤蛟　綏たり　黃なる華蓋
露　夜に零（ふ）り　晝に晻溘たり
百君　禮せられ　六龍　位し
椒漿を勺し　靈　已に醉いたり
靈　既に享け　吉祥を錫（たま）う
芒芒として極まり　嘉觴を降す
靈　殷殷として　爛として光を揚げ
壽命を延ばし　永く未だ央（つ）きず
杳として冥冥として　六合に塞がり
澤は汪濊として　萬國を輯む
靈　禗禗として　象輿　轙す
票然として逝き　旗は逶蛇たり
禮樂成り　靈　將に歸らんとす
玄德に託して　長えに衰うこと無からん

【押　韻】

蓋・溘―祭部　位・醉―脂部　祥・觴・光・央―陽部　合―緝部、國―職部（合韻）　轙・蛇―歌部　歸・衰―脂部

【通　釋】

赤い蛟は安らかに　その上の黄色い氣は華蓋のよう
露は夜に降り　晝にはもうもうと立ち込める
百神は祭られ　六龍はあるべき位置にいまし
椒の酒を酌み　神靈はすでに醉った
神靈は祭りを享けて　吉祥を賜う
廣々と遠くまで果てしなく（神靈は）佳き杯を下した
神靈はにぎにぎしく　爛爛と光り輝き
（帝の）壽命をのばし　永遠のものとする
（神靈は）日にかかる雲のようにうす暗く　世界を覆い
惠み多く　すべての國を一つにする
神靈は（祭壇を）去ろうと思しめし　靈妙なる車が（神靈の乘車なさるのを）待つ
（神靈を乘せた車は）輕やかに舞いあがってゆき　旗がはためく
神を祀る禮樂は完成し　神靈は今まさに天へ歸ろうとなさる
玄妙なる德に託して　（國家の）とこしえに衰えることの無きように

【注　釋】

◎赤蛟綏　黄華蓋

「赤蛟」は、赤いミズチのこと。ミズチは龍に似た傳説上の動物。「蛟」は、『楚辭』に數例見られる。離騷「麾蛟龍使梁津兮、詔西皇使涉予。（蛟龍を麾（さしまね）きて津に梁（はし）かけしめ、西皇に詔げて予を涉さしむ。）」、九歌・湘夫人「麋何食兮庭中、蛟何爲兮水裔。（麋何ぞ庭中に食らう、蛟何ぞ水裔に爲（あ）る。）」など。

「赤蛟」の例は他には見られないが、同時期の文獻に「赤螭（螭は角のない龍）」が見られる。司馬相如の作品中、「天子游獵賦（上林賦）」に「於是乎蛟龍赤螭、甌鱠螹離。」、また「大人賦」に「駕應龍象輿之蠖略逶麗兮、驂赤螭青虬之蟉蟉蜿蜒。（應龍象輿の蠖略逶麗たるを駕し、赤螭青虬の蟉蟉蜿蜒たるを驂す。）」の二例が見られ、『淮南子』には「今夫赤螭、青虬之游冀州也。（今夫れ赤螭、青虬の冀州に游ぶ。）」（覽冥）の一例がある。

「綏」は、師古注に「綏綏、赤蛟貌。」「綏綏」と二字にしたのは、『詩經』衞風・有狐「有狐綏綏、在彼淇梁。（狐有り　綏綏たり、彼の淇梁に在り。）」、齊風・南山「南山崔崔、雄狐綏綏。」を意識したものであろう。狐の歩くさまから、ここでは赤蛟のゆったり進むさまと解した。

「黄華蓋」は師古注に「言其上有黄氣、狀若蓋也。（言うこころは其の上に黄氣有り、狀　蓋の若きなり。）」赤蛟の上に黄色の氣が覆いかぶさっているさまであると言い、この解釋によった。

一方、王先謙は、この二句はいずれも神の乘る車を指すとする。

すなわち『説文解字』一三上糸部の「綏、車中把［段注によれば靶］也。」により、「赤蛟綏」は神の車の吊革紐を赤いミズチになぞらえたものと考え、「黄華蓋」は文字通り黄色の車蓋としている。しかし、この歌が神霊の出現を描くものであり、あとに「六龍」も現れることからみれば、「赤蛟」が現れた際の情景とする顔師古の解釋の方がよいと思われる。

ただし、『禮記』明堂位に「夏后氏之綏」といい、また『釋名』釋兵に「綏、夏后氏之旌也、其形衰衰也。」とあるように、「綏」は夏王朝に用いられた旗でもある。これをふまえれば、「赤蛟綏」は神を先導する赤蛟の掲げる旗、「黄華蓋」は神の乗る車の黄色い華蓋と解することもできよう。

◎露夜零　晝晻濫

師古注に「晻音烏感反。濫音藹。晻濫、雲氣之貌。」他に用例を見ないが、『楚辭』離騒に「揚雲霓之晻藹兮、鳴玉鸞之啾啾。（雲霓の晻藹たるを揭げ、玉鸞の啾啾たるを鳴らす。）」の句がある。「晻濫」は「晻藹」と同様、雲が滿ちて暗いさまを形容していると考えられる。

◎百君禮　六龍位

「百君」は百神のこと。師古注に「百君、亦謂百神也。（百君は、亦た百神を謂うなり。）」『楚辭』離騒に「百神翳其備降兮、九疑繽其並迎。（百神翳いて其れ備く降り、九疑繽として其れ並び迎う。）」という例がある。《朱明》（第四）には「百鬼迪嘗」の句があった。

「六龍」は《日出入》（第九）に既出。

◎勺椒漿　靈已醉

「勺」は注ぐこと、酌に同じ。師古注に「勺讀曰酌。（勺は讀みて酌と曰う。）」

「椒漿」はサンショウをいれた酒。『楚辭』九歌・東皇太一に「蕙肴蒸兮蘭藉、奠桂酒兮椒漿。（蕙肴蒸め蘭もて藉き、桂酒・椒漿を奠む。）」

◎靈既享　錫吉祥　芒芒極　降嘉觴

「芒芒」は廣大なさま。師古注に「芒芒、廣大貌。音莫郎反。」『詩經』商頌・玄鳥に「天命玄鳥、降而生商、宅殷土芒芒。（天玄鳥に命じ、降りて商を生み、殷土の芒芒たるに宅らしむ。）」の句が見られる。また、『楚辭』九章・悲回風に「穆眇眇之無垠兮、莽芒芒之無儀。（穆眇眇として垠無く、莽芒芒として儀無し。）」、「紛容容之無經兮、罔芒芒之無紀。（紛容容として經無く、罔芒芒として紀無し。）」と二度見られ、極まりがない、果てしないといった意味を表す。

「嘉觴」は《練時日》（第一）に既出。

◎靈殷殷　爛揚光　延壽命　永未央

「殷殷」は盛んなさま。師古注に「殷殷、盛也。爛、光貌。殷音隱。」《景星》（第十二）「殷殷鐘石羽籥鳴」とあったのを參照。

「未央」は『詩經』小雅・庭燎に「夜如何其、夜未央。（夜は如何、夜未だ央きず。）」、『楚辭』離騒に「及年歳之未晏兮、時亦猶其未央。（年歳の未だ晏からざるに及ばん、時も亦た猶お其れ

未だ央きず。)」、九歌・雲中君に「靈連蜷兮既留、爛昭昭兮未央。(靈は連蜷として既に留まり、爛昭昭として未だ央きず。)」などとある。漢代には鏡銘や瓦當に盛んに用いられた吉祥語であり、長安の宮殿の名ともなった。

◎杳冥冥　塞六合　澤汪濊　輯萬國

「杳冥冥」は暗いさまの形容として『楚辭』にみられ、九歌・東君「撰余轡兮高駝翔、杳冥冥兮以東行。(余が轡を撰(もち)て高く駝翔し、杳として冥冥として以て東行す。)」、同じく山鬼「杳冥冥兮羌晝晦、東風飄兮神靈雨。(杳として冥冥として羌(ああ)晝も晦く、東風　飄として神靈　雨ふらす。)」といった用例がある。また郊祀歌と同じく『漢書』禮樂志に收錄されている「安世房中歌」十七章にも、第一章「芬樹羽林、雲景杳冥。(芬として羽林を樹て、雲景は杳冥たり。)」第二章「清思眇眇、經緯冥冥。」第十一章「杳杳冥冥、克綽永福。(杳杳冥冥として、克く永福を綽(なが)くす。)」のように何度か用いられる。

「塞六合」は、世界に滿ちあふれること。師古注に「塞、滿也。天地四方謂之六合。(天地四方は之を六合と謂う。)」「六合」は《帝臨》(第二)に「清和六合、制數以五。」という例が既出。

「汪濊」は、多いさま。師古注に「汪濊、言饒多也。濊音於廢反、又音烏外反。」双聲の語。司馬相如「難蜀父老」に「威武紛紜、湛恩汪濊。」という例がある。

「輯」は、師古注に「輯、和也。輯與集同。」

◎靈禨禨　象輿轙

「禨禨」は、落ち着かず立ち去ろうとするさま。孟康注に「禨音近枲、不安欲去也。(禨は音　枲(シ)に近し、安んぜず去らんと欲するなり。)」師古注に「禨、孟音是也。」「禨禨」は他に用例が見つけられず、音、意味とも孟康の説にそのまま據った。

「象輿」は、山から瑞祥として出た車。ここは神靈の車をいう。《象載瑜》(第十八)の師古注に、「象載、象輿也。山出象輿、瑞應車也。(山　象輿を出だす、瑞應の車なり。)」司馬相如の「天子遊獵賦(子虛賦)」に「青虬蚴蟉於東箱、象輿婉蟬於西清。(青虬　東箱に蚴蟉たり、象輿　西清に婉蟬たり。)」、同じく司馬相如の「大人賦」に「駕應龍象輿之蠖略逶麗兮、驂赤螭青虬之蟉蟉蜿蜒。(應龍象輿の蠖略逶麗たるを駕し、赤螭青虬の蟉蟉蜿蜒たるを驂す。)」という句があり、武帝期ころから使われ始めた言い方のようである。

「轙」は、車の出發の支度をして待つこと。孟康注に「轙、待也。」如淳注に「轙、僕人嚴駕待發之意也。(轙は、僕人の駕を嚴(ととの)えて發するを待つの意なり。)」師古注に「轙、如説是也。轙音儀(ギ)。」

「轙」は『爾雅』釋器に「載轡謂之轙。(轡を載す、之を轙と謂う。)」[郭注：車軛上環、轡所貫也。(車の軛上の環、轡の貫く所なり。)]とあり、車の手綱を通す部分をいう。洪亮吉はこの本來の字義で解釋すべきだとしているが、そうするとこの句には動詞がなくなり、前後の句との意味の繋がりがはっきりしない。小竹武夫氏の譯では「靈禨禨として心安んぜず、象輿を轙にしばり

て、飄然輕く擧り逝くに」とし、いまひとつ明瞭さを缺くが、おそらく手綱を「轙」に通すというところから、出發の支度をするという意味に轉化したものであり、舊注に從ってよかろう。

◎票然逝　旗委蛇

「票然」は、高く擧がるさま。師古注に「票然、輕擧意也。票音匹遙反。」「票然」（あるいは「漂然」）という語は用例に乏しく、『漢書』六六楊惲傳に「漂然皆有節槩、知去就之分。（漂然として皆　節槩有り、去就の分を知る。）」という程度である。「漂」一字であれば『楚辭』九章・悲回風に「漂翻翻其上下兮、翼遙遙其左右。（漂として翻翻として其れ上下し、翼として遙遙として其れ左右す。）」といった例がある。

「委蛇」は「委蛇」「委佗」などとも書かれる疊韻の語。ゆったりとしたさま、うねうねと曲がるさまなど、さまざまな様子を表すが、ここでは旗がはためくさま。師古注に「委蛇、旗貌也。蛇音移。」旗の様子を表現する用例としては、『楚辭』九歌・東君「駕龍輈兮乘雷、載雲旗兮委蛇。（龍輈に駕して雷に乘り、雲旗の委蛇たるを載す。）」や九辯「載雲旗之委蛇兮、扈屯騎之容容。（雲旗の委蛇たるを載せ、屯騎の容容たるを扈（したが）う。）」といったものがある。

◎禮樂成　靈將歸　託玄德　長無衰

師古注に「言託恃天德、冀獲長生、無衰竭也。（言うこころは天德に託恃し、長生を獲、衰竭の無きことを冀うなり。）」

王先謙は、『宋書』二〇樂志二「宋明堂歌」送神歌辭の三言歌に關する「漢郊祀送神亦三言。（漢郊祀の送神も亦た三言なり。）」という記述の指すものがこの《赤蛟》歌であると指摘している。